静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第237集

七社神社遺跡他

平成20～22年度農道整備（一般・樹園地）高天神2期地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第237集

七社神社遺跡他

平成20～22年度農道整備（一般・樹園地）高天神2期地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回、農道整備（一般・樹園地）高天神２期地区事業に伴って発掘調査を実施した七社神社遺跡他は掛川市大坂に所在し、三井中世墓群、七社神社遺跡、寺部遺跡、寺部中世墓群の複数の遺跡から成り立っています。

高天神２期地区として事業地区名とされた高天神とは、近接する高天神山に由来します。高天神山には高天神城跡があって、静岡県を代表する戦国城跡として国の史跡として指定されています。この城跡は、戦国時代の終わり頃、徳川・武田の争奪戦が数度にわたって繰り広げられたことは、広く知られるところであります。

ところで七社神社遺跡他は、高天神城跡の麓から南部にかけて計画された事業によって、丘陵には三井中世墓群と寺部中世墓群が、平地には七社神社遺跡と寺部遺跡があって、古墳時代から近世の遺構と遺物が調査されました。

今回の調査は、平成20（2008）年から平成22（2010）年まで実施され、古墳時代から近世の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・集石墓などが検出されました。その意味では、今回、あまり遺跡調査の行われなかったこの地域の歴史に、新たな資料を付け加えることができ意義深いと思います。

なお調査成果の詳細は本書に譲りますが、事業は掛川市南部の農道整備のために実施すべく計画されたものでありました。また遺跡は丘陵や現在も耕作に利用されている場所にあり、発掘調査についても用地の引き渡しのすすんだ部分から年次をまたいで、複数年度にわたって実施されました。そのためきめ細かい調整がなされ、関係者の多大な理解と援助を有形無形にいただき無事終了することができました。

最後になりますが、調査と報告書作成にあたっては、静岡県中遠農林事務所、文化財保護課、地元掛川市、大坂の住民の皆さんには多大なるご配慮を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。寒中と猛暑の中、現地作業に従事した方々の労をねぎらい、あわせて資料整理に従事した方々にも、その労をねぎらい御礼申し上げます。

2011年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　石田　彰

例　言

1　本書は、静岡県掛川市に所在する七社神社遺跡他の発掘調査報告書である。
2　本調査は農道整備（一般・樹園地）高天神２期地区埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県中遠農林事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3　現地調査は平成20年９月～平成22年３月の２年次にわけて実施し、資料整理を平成22年８月～平成23年３月に行った。
4　調査の体制は次のとおりである。

	平成20年度	平成21年度	平成22年度
所長	清水　晢	天野　忍	石田　彰
次長兼総務課長	大場正夫	松村　享	松村　享
次長兼調査課長	及川　司	及川　司	
調査課長			中鉢賢治
保存処理室長	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
事業担当	青井拓司	青井拓司	青井拓司
調査担当	藤井光広	藤井光広 溝口彰啓	足立順司

5　本書の執筆は足立順司が担当した。
6　遺物写真撮影は、当研究所職員が行った。
7　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
8　発掘調査にかかる出土品及び記録資料については、静岡県教育委員会文化財保護課が保管している。

凡　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1　本書で使用した方位はすべて世界測地系による公共座標系の方位である。
2　遺構の標記は以下のとおりである。
　SH＝竪穴住居跡　SB＝掘立柱建物跡　SD＝溝　SK＝土坑　SX＝不明遺構（土器集中箇所や性格不明遺構も含む）　SP＝小穴
3　写真図版中の遺物の番号は本文・挿図の番号と同一である。
4　引用・参考文献、出土遺物観察表については第５章の文末に記す。

目　次

序・例言・凡例・目次

第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的・人文的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の方法と経過 …… 7
　第１節　調査の方法 …… 7
　第２節　現地調査の経過 …… 7
第４章　調査の成果 …… 9
　第１節　微地形と土層 …… 9
　第２節　各区の遺構 …… 12
　第３節　出土遺物 …… 52
第５章　まとめ …… 69
　第１節　遺構と遺物の検討 …… 69
　第２節　尾張系須恵器と山茶碗の搬入 …… 71
　第３節　城飼郡の古代氏族 …… 73

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 2
第２図　和名類聚抄の郷 …… 5
第３図　笠原荘の郷村 …… 5
第４図　調査区位置図 …… 8
第５図　２・３・４区土層柱状図 …… 10
第６図　１区三井中世墓群全体図（完掘後） …… 11
第７図　１区三井中世墓群全体図 …… 13
第８図　１区SH01平・断面図 …… 14
第９図　１区集石墓１・２・３・４平・断面図 …… 15
第10図　２区七社神社遺跡全体図 …… 16
第11図　２区北・中央・南土層図 …… 17
第12図　３区七社神社遺跡１・２面全体図 …… 19
第13図　３区１面流路・西壁土層平・断面図 …… 20
第14図　３区１面SR01・02平・断面図 …… 21
第15図　３区１面SR03・04平・断面図 …… 22
第16図　３区１面SR05・06平・断面図 …… 23
第17図　３区土器集中箇所平面図 …… 25
第18図　３区遺構平・断面図(1) …… 26

第19図　3区2面掘立柱建物図（SB01）…… 27
第20図　3区遺構平・断面図(2)…… 29
第21図　3区遺構平・断面図(3)…… 30
第22図　4区七社神社遺跡1・2面全体図…… 32
第23図　4区SR01・02土層図…… 33
第24図　4区遺構平・断面図(1)…… 34
第25図　4区遺構平・断面図(2)…… 36
第26図　4区遺構平・断面図(3)…… 37
第27図　5区寺部遺跡全体図…… 39
第28図　5区土層柱状図…… 40
第29図　5区遺構平・断面図(1)…… 41
第30図　5区遺構平・断面図(2)…… 43
第31図　5区SR01・02土層図…… 44
第32図　5区遺構平・断面図(3)…… 45
第33図　6区寺部中世墓群全体図(1)…… 46
第34図　6区寺部中世墓群全体図(2)…… 48
第35図　6区集石墓1・2平・断面図…… 49
第36図　6区集石墓3・6・7平・断面図…… 50
第37図　6区集石墓4・5平・断面図…… 51
第38図　出土遺物実測図1…… 53
第39図　出土遺物実測図2…… 55
第40図　出土遺物実測図3…… 56
第41図　出土遺物実測図4…… 57
第42図　出土遺物実測図5…… 58
第43図　出土遺物実測図6…… 59
第44図　出土遺物実測図7…… 61
第45図　出土遺物実測図8…… 62
第46図　出土遺物実測図9…… 63
第47図　出土遺物実測図10…… 65
第48図　出土遺物実測図11…… 66
第49図　出土遺物実測図12…… 67
第50図　尾張系須恵器と山茶碗…… 70
第51図　京遺江横穴墓の出土遺物…… 72

挿表目次

表1　出土遺物観察表　土器…… 76
表2　出土遺物観察表　土製品…… 80
表3　出土遺物観察表　石製品・金属製品…… 80
表4　出土遺物観察表　木製品…… 80

図版目次

図版1　1　掛川市大坂周辺遠景（空中写真）
　　2　調査区遠景（空中写真）
図版2　1　七社神社遺跡他遠景（南より）
　　2　3区遠景（西より）
図版3　1　1区三井中世墓群全景
　　2　1区三井中世墓群・SH01全景
図版4　1　1区集石墓群全景
　　2　1区SH01全景
図版5　1　1区集石墓1
　　2　1区集石墓2
　　3　1区集石墓2土坑
　　4　1区集石墓3
　　5　1区集石墓4
図版6　1　2区全景（空中写真）
　　2　2区全景（空中写真）
図版7　1　2区全景（南より）
図版8　1　2区南側土器出土状況
　　2　2区土層堆積状況（南より）
　　3　2区北壁（南より）
図版9　1　3区全景（北より）
図版10　1　3区SR02
　　2　3区SR03
　　3　3区SR04
　　4　3区北東隅土器出土状況
図版11　1　3区SR06（西より）
　　2　3区SR06覆土堆積状況
　　3　3区SE01・SP01
図版12　1　土器集中箇所1
　　2　土器集中箇所2
　　3　土器集中箇所2近景
図版13　1　3区2面SB01遠景
　　2　3区2面SB01
　　3　3区2面SD02
図版14　1　3区2面柱穴2
　　2　3区2面SB01柱穴5
　　3　3区2面SB01柱穴7
　　4　3区2面SB01柱穴9
　　5　3区2面SB01柱穴10
図版15　1　4区1面全景（南より）

図版16　1　4区1面SR02（西より）
　　2　4区1面土層堆積状況
　　3　4区2面北側全景（北より）
図版17　1　4区2面全景（北より）
図版18　1　4区2面SB01
　　2　4区2面SB01柱痕出土状況
　　3　4区2面SB01柱穴礎石
　　4　4区2面SP29柱根出土状況
　　5　4区2面SP29柱根
図版19　1　4区2面礎列
　　2　4区2面遺物出土状況1
　　3　4区2面遺物出土状況2
図版20　1　5区全景（北より）
図版21　1　5区SK01・SD01・SD02
　　2　5区SK03
　　3　5区漆椀出土状況
図版22　1　6区寺部中世墓群全景（北より）
図版23　1　6区全景（西より）
　　2　6区集石墓1
　　3　6区集石墓2
　　4　6区集石墓3
　　5　6区集石墓4
図版24　1　6区集石墓5（南より）
　　2　6区集石墓5（北より）
　　3　6区集石墓6
　　4　6区集石墓7
図版25　出土遺物1土器ほか
図版26　出土遺物2土器
図版27　出土遺物3土器
図版28　出土遺物4土器
図版29　出土遺物5土器ほか
図版30　出土遺物6土器ほか

第1章　調査に至る経過

静岡県中遠農林事務所では、掛川市大坂地内に農道整備（一般・樹園地）事業の一環として、農道建設を計画していた。そのため計画範囲について埋蔵文化財の照会があり、事前に静岡県教育委員会文化課では、計画された範囲に遺跡の範囲が及ぶかの確認調査を実施し、事業対象地の一部が周知の七社神社遺跡の範囲であること、従前において、この遺跡からは古墳時代から中世の遺物が発見され、確認調査の結果においても同様の所見をえたことを回答した。

さらに工事予定地内には確認調査の結果、以下の所見がえられ、三井中世墓群・寺部遺跡・寺部中世墓群が発見され、これも含め記録保存の対象となった。

三井中世墓群

トレンチ調査によって、低丘陵尾根部から一辺0.5mの集石が発見され、古墳ではなく経塚もしくは集石墓の可能性が指摘された。

寺部遺跡

トレンチ調査によって、七社神社遺跡の一部と新たな範囲において、溝状遺構が発見され、古墳時代と中世前期の山茶碗が出土した。新発見の範囲は寺部遺跡と呼称した。

寺部中世墓群

長源庵の寺院墓地に近接した独立丘陵尾根部にある。トレンチ調査によって、集石墓が確認された。山茶碗と文久永宝が出土し、中世から近世の時期と推定された。

調査範囲の大坂とは、江戸時代には東大坂村と西大坂村に分かれ、明治期に合併してできた大坂村から派生した広域の大字（おおあざ）であり、通常の単位での大字は三井である。この三井は北から南へ寺部、太田、東側が中川原の字（あざ）にわかれているが、遺跡名は重複を避け、大字、字、通称をとっている。七社神社遺跡とは、七社神社に近接するという意味であり、小字は道前（どうぜん）である。

さらに農道整備（一般・樹園地）事業の事業地区名である高天神２期地区とは、国指定遺跡である戦国時代の高天神城跡にちなみ、その南部を広域に事業対象とすることであろう。

計画範囲のうち七社神社遺跡・三井中世墓群・寺部遺跡・寺郎中世墓群（本文中、調査対象遺跡をすべてさす場合に七社神社遺跡他と略）に該当する範囲は、事前調査の対象とされた。平成20年９月29日に静岡県中遠農林事務所（以下、農林に略）は、調査実施機関として静岡県埋蔵文化財調査研究所とのあいだに、埋蔵文化財調査に関する委託契約を結び発掘調査を実施した。なお調査に関する調整と指導は静岡県教育委員会文化課である。

翌年の平成22年７月30日には、平成20・21年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の出土品基礎整理と資料整理及び報告書刊行、出土品保存処理に関する委託契約を結び、基礎整理および資料整理及び報告書刊行、出土品保存処理を実施した。この結果、保存処理、資料整理を終了し、対象とした埋蔵文化財調査報告書を刊行し、すべての業務を完了した。

1	三井中世墓群	2	七社神社遺跡	3	寺部遺跡	4	寺部中世墓群
5	兼清横穴墓群	6	兼清遺跡	7	高塚横穴墓群	8	権地遺跡
9	三井山Ⅳ号墳	10	三井山Ⅲ号墓	11	塩兵衛山古墳	12	覚田古墳
13	太田古墳	14	三井山Ⅱ遺跡	15	三井山Ⅰ号墳	16	三井山Ⅰ遺跡
17	三井山Ⅲ遺跡	18	神田遺跡	19	三井山Ⅱ号墳	20	奥の谷古墳
21	神ノ前山1号墳	22	山王遺跡	23	山王山古墳	24	星川原墓群
25	畑ヶ谷古墳	26	高天神城跡	27	谷田古墳	28	薙田古墳
29	本勝寺裏横穴墓群	30	五郎山古墳	31	毛森山横穴墓群	32	長谷古墳推定地

第1図　周辺遺跡分布図（国土地理院発行1：25,000地形図「下平川」を複写して加筆）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的・人文的環境

七社神社遺跡の存在する掛川市大坂は、掛川市南部の小笠山丘陵裾部に位置するが、むしろ遠州灘の海岸線より2.5kmほどのところが中心である、といった方がわかりやすい。中心部は国道150線沿線と県道掛川大東線沿線で、県や市の出先機関や農協、商店街が存在する。

他方、七社神社遺跡他は大坂の北側に位置し、海岸線より北に入った3.5kmほど入ったところに所在する。遺跡周辺は小塊村が散在的に分布し、水田の広がる農村の景観を保っている区域である。平成の大合併によって掛川市は大須賀町と大東町と合併したが、遺跡の所在する大坂は旧大東町内に含まれる。

新たに広域行政区となった掛川市域において、国道150線沿線などを除く旧大東町地域は、農村地帯であって、旧掛川市郊外や旧大須賀町大渕などとともに、米・茶・野菜・果樹栽培の一翼を担っている。

大坂周辺の地形をみると、西と北側方面には礫層からなる小笠山丘陵（三角点最高値標高264.4m）が広がる。三井中世墓群と寺部中世墓群は、この小笠山丘陵の先端頂部に位置する。寺部中世墓群は、周囲が浸食され独立丘となっている。遺跡周辺では小笠山丘陵が浸食されて造られた開析谷がみられ、その谷を丘陵から流出し押し出した砂礫が堆めてできた、小扇状地がみられる。七社神社遺跡と寺部遺跡は小扇状地に位置する。

第２節　歴史的環境

ここでは周辺に分布する遺跡とあわせて古代から中世の文献史料にふれながら、七社神社遺跡他の歴史的環境を概観してみたい。

発掘調査の行われた糸繰遺跡からは、縄文時代中期中葉の土器が出土した。この土器は糸繰遺跡の第Ⅴ層という砂丘を形成する土層からの出土で（大東町教育委員会 1988）、すでにこの土器の示す時代には、遠州灘に沿って東西方向に砂堤列が形成されていたこととなろう。糸繰遺跡は、七社神社遺跡周辺ではもっとも古い段階の歴史を刻む遺跡であるが、遺構も発見されず生活を営んだとはいえない。

七社神社遺跡の東側に位置する掛川市東大阪字海戸所在の兼信遺跡からは、発掘調査によって弥生時代後期後葉を中心とする方形周溝墓群、土坑、ピットが検出されている。調査区の範囲では住居跡などを確認できなかったが、付近に集落の存在が推定される。なお、出土した土器には僅少量、弥生中期後葉の土器が認められたので、付近の集落形成がこの時期までさかのぼりえると推定される（大東町教育委員会 2002）。このほかこの遺跡からは、古墳時代後期後葉から奈良時代前葉の土器が出土した溝・土坑・小穴が認められた。集落の一角であろう。平安時代後期には、地鎮と思われる瓶類を埋納した遺構が認められた。ふたたび集落形成が行われた時期を示すと考えられる。

掛川市大坂に所在する五塚山古墳は、大東町文化会館に付属する展望台建設予定地の事前調査で発見された古墳である。この古墳は３基の埋葬施設からなる円墳で、５世紀後葉～末の築造と推定される。古墳は眼下に大坂に広がる集落や遠州灘を見下ろす位置に築造されており、この付近ではもっともよい眺望をえることができる。このことからこの地域ではこの場所をきわめて早く墓地できた古墳といえよう。

出土品うち有蓋付四連环（ゆうがいつきよんれんつき）と台付三連瓮は、尾張東山窯周辺で焼成された優品で、交易品として入手したのであろう。この時期の遠江の古墳で、このような須恵器が出土することはきわめてまれである。この古墳は直径20m以下という規模の円墳であり、礫槨と礫床という少数例の埋葬施設と特殊な須恵器や金製の飾りなど副葬品とするなど（大東町教育委員会 2001a）、新しい

様相をしめしている。ここからうかがえる被葬者については、この地に君臨した新興勢力と推定したい。

七社神社遺跡の西0.3～0.4mの丘陵には奥の谷古墳があったが、すでに消滅しているので、詳細は不明である。七社神社遺跡から約1㎞ほど北東には、昭和5年に「遠江大坂村の古墳」として、西郷藤八によって報告された古墳があった（西郷藤八 1930）。この古墳は大坂中河原字長谷（ながや）の丘陵頂部にあって、開墾によって発見されたものであるが、現在、正確な場所は特定できていない。発見された管玉、小玉各1、刀1、鏡1は、副葬品の一部であろう。鏡は直径11㎝を測る白銅鏡で、半肉彫円座乳帯獣帯鏡とされ舶載鏡と判断された。これにより5世紀前半に築造された古墳と判断される。従来、この古墳についてはあまり注目されなかったが、この地域の古墳時代像を考える上で、再評価されてもよい古墳である。

七社神社遺跡から約1㎞～1.5㎞には沖ノ前山古墳と山王山古墳があるが、後者からは鏡、刀、管玉、白玉が発見されているという。山王山古墳の副葬品については、西郷藤八報告の古墳と誤認した可能性もあるが、両者は字が違い場所が離れているため、別の古墳と理解した。いずれも詳細は不明であるが、横穴式石室をもつ古墳とは考えられず、さらに単独、もしくは数基で構成されると推定される。時期については5世紀代から6世紀前半であると考えられる。

七社神社遺跡から約1.3㎞～1.5㎞ほど南には、太田古墳と鷺田古墳、惣兵衛山古墳がある。太田古墳と鷺田古墳は丘陵先端、惣兵衛古墳は丘陵頂部の遠州灘を見下ろす位置に築造されており、この付近ではもっともよい眺望をえることができる。このことから惣兵衛山古墳はこの場所をきわめて早く選地できた古墳といえよう。鷺田古墳と惣兵衛山古墳からは埴輪が出土している。出土した埴輪を実見していないので築造時期は判断できないが、群集墳を形成していない点から、5世紀代から6世紀前半の単独墳であると考えられる。前方後円墳や大型古墳の分布はないものの、このような大坂周辺の古墳の分布をみると、後期群集墳の時代（6世紀後葉）以前の、5世紀後半代から6世紀前半に小規模な古墳を築造できうる小首長の存在を推定できるであろう。律令期の城飼郡の郡域では7世紀を中心に横穴墓による群集墳の時代となっていたが、大坂付近では、本勝寺裏横穴墓群（3基開口）以外に認められず、大きな断絶が認められる。上記のようなそれ以前の大坂地域の古墳時代像とは異なっている。

七社神社遺跡から約0.5㎞ほど北には星川窯跡群がある。この窯跡群は数地点に分かれているため、ある程度の期間にわたって地点を移動し、須恵器を焼造していたもので、あわせて一部の窯では、須恵質埴輪も焼造していた。この窯の焼造時期は、田辺昭三氏による陶邑編年TK10型式からTK209型式併行と考えられるので、6世紀中葉から7世紀前葉と考えられる。埴輪は菊川流域の古墳に供給されているので（柴田稔 1986）、副葬品の須恵器も含め古墳築造に関わって、この地に窯を築いたと考えられる。七社神社遺跡においてもこの窯で焼造された須恵器が認められた。

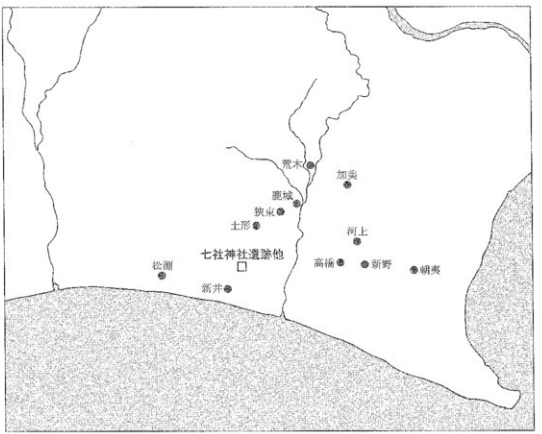
和名類聚抄の郷と笠原荘

承平年中、源順が醍醐天皇の皇女勤内親王に撰述した『和名類聚抄』の中に、遺跡の所在する平安時代の郡と郷に関する記載がある。『倭名類聚鈔』もいくつか伝本があるが、そのうち高山寺本によると、旧小笠郡にあたる城飼郡には、以下の11郷があった。

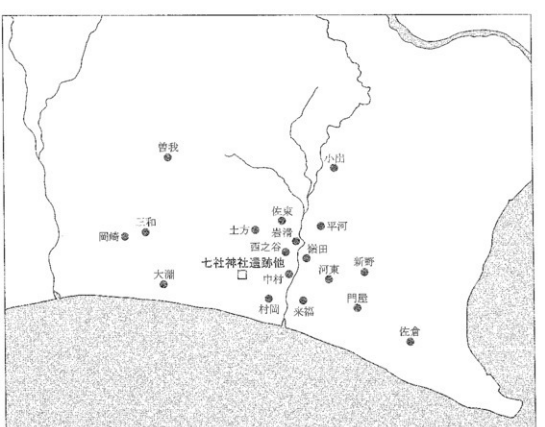
「加美　新井　荒木　河上　高橋　鹿城　朝夷　松淵　土形　狭（狭）東　新野」

遠江の郡では敷知郡が10郷、磐田郡が13郷であり、隣接する佐野郡が5郷、榛原郡が8郷、山名郡が6郷である。このことから城飼郡は東海道から離れているため駅家はないものの、磐田郡に次ぐ大郡であった点は、留意すべきであろう。

城飼郡の郷は、遠江には珍しく、江戸時代の村名や現在でも地名として残る例が多い。このことは中世郡郷制では、それほど新たな郷村の分立や消長がなかったこととなろう。そのうち七社神社遺跡に関連深い『倭名類聚鈔』の土形（ひじかた）は、一つの開析谷にあり、地形的にもまとまりをもっている。



第２図　和名類聚抄の郷



第３図　笠原荘の郷村

その後、上土方と下土方に分立したものと考えられる。大坂が土形郷に含まれていたかは、明確ではないが、別の郷ではないとすれば、もっとも近接した土形郷に含まれていた可能性が高い。

隣接する狭東（さづか）についても、土形同様に佐東川にそった一つの開析谷にあり、地形的にもまとまりをもっている郷であった。これら2郷は南部の菊川流域の自然村落をどこまで、取り込んで『倭名類聚鈔』の郷と成立していたのかが、課題であろう。

平安末期にはいると城飼郡には広大な笠原荘が成立していた。立券に関する文書は残っておらず、荘域や伝領に関することは不明である。もとは主に軍団用の馬を飼育する笠原牧であったが、のちに荘園となり、12世紀初頭には荘園として確認できる。湯之上隆氏によれば、この笠原荘は皇室御領の八条院領であったこともあり、当初の地頭は平重盛であり、そののち平家没官領となって、鎌倉御家人が地頭職であったとされる（湯之上隆 1983）。荘域については、袋井市の一部、旧大須賀町から旧大東町、旧浜岡町、旧小笠町の一部に広がると推定されているものの、それほど深く追求されていないことから、ここでは以下のような中世文書・金石文から（静岡県）、その荘域を復元してみたい。

袋井市岡崎　笠原庄木根郷光照院　応永２・３年哦「曇鸞市石巻宮大般若経識語」
　笠原庄岡崎岡崎之郷竜巣院・宗有寺　天正11年「大須賀康高判物」
　遠江州笠原庄城東郡笠原庄三和郷銘の鰐口　南アルプス市鮹大寺旧蔵
掛川市　笠原庄曽我郷　応永20年　「今川範豪書下」
掛川市（旧大須賀町）大渕　遠州城東郡笠原庄大淵郷宝珠禅寺　文亀２年「円通松堂語録」
掛川市（旧大東町）村岡郷（大坂・浜野）　笠原庄村岡郷　至徳２年「森町蔵泉寺大般若経識語」
　岩滑　遠江州笠原庄新福寺　長禄戊寅二年銘の鰐口　青木観音堂蔵
　佐東郷　遠江笠原庄佐東郷内八祖寺　天文20年「正林寺文書」
　中村（中）　遠□□□原庄中村郷満勝寺　天文21年「満勝寺文書」
　来福村（千浜）　遠江笠原庄来福村銘の懸仏　天文20年　柴山神社蔵
　上土方　笠原庄土方上郷　天文11年　「華厳院文書」
　西之谷　西之屋村　永禄12年　「大村弥兵衛宛判物」
菊川市（旧菊川町）　笠原庄小出村　天正４年　「華厳院文書」
菊川市（旧小笠町）遠州笠原庄平河郷　明応３年以前　「円通松堂語録」
　河東　神主職之河東事　大治２年（真治カ）「中山文書」
　嶺田　笠原庄峰田郷　明応９年　「井伊直勝寄進状」
御前崎市桜郷（佐倉）　遠州城東群笠原庄桜郷　明応２年「山梨県日枝神社大般若波羅蜜多経識語」
　門屋（高松神社）　笠原庄一宮　年次多数あり　「中山文書」
　新野　笠原庄の内新野の池　貞和５年「中山文書」

このようにみると笠原荘は、袋井市岡崎から旧大須賀町の大渕、旧大東町、旧浜岡町合戸から佐倉、比木の一部、旧小笠町河東、嶺田、平河の国衙領を除く一部、飛び地として掛川市曽我と旧菊川町小出が領域となろう。こうしてみると、笠原荘は城東郡西半分以上を占める広大な荘園であったことが判明する。笠原庄曽我とは三代御起請地として立券された「曽我庄」の一部が得分となって、このように呼ばれたと推定される。別の文書に笠原庄比木とあるが、比木荘は賀茂神社領比木荘として立券されたので、その一部が得分として笠原荘に含まれていた時期があったと理解したい。旧小笠町の平河郷は国衙領が大半であって、その一部が、笠原荘であったと推定される。

すると中世においては七社神社遺跡他は笠原荘村岡郷に属し、江戸時代にはいると、村岡郷は東大坂村と西大坂村に分立したと考えられる。そして七社神社遺跡他は、江戸時代にはいると城東郡西大坂村に属した。

第３章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

七社神社遺跡の発掘調査は、農道整備工事により掘削される範囲を工事計画図面と現地の立ち会いに基づいて確定し、あわせて確認調査によって遺跡の範囲とされた部分を対象とし、実施した。

調査にあたっては、事前に中遠農林事務所の成果に基づいて調査対象範囲を覆う範囲で基準点測量を作成した。発掘調査は数カ年にわたるため、七社神社遺跡の調査区全体図は公共座標（世界測地系 平面直角座標系）の（X、Y）＝（－145500.000、－42730.000）上とし、一貫性をもたせている。調査対象範囲には10×10mのグリッドを設置して位置をしめしたが、これは先にふれた全体図の座標系に基づいている。グリッドの呼称はX軸方向（南－北）をアルファベット、Y軸方向（東－西）をアラビア数字で表記している。

地形図、実測図の作成及び遺構や土層断面の記録、遺物の取り上げにあたっては、空中写真測量と手実測による作図を行った。また、４×５版大型カメラとブロニー版中型カメラ、35㎜小型カメラを用いて、モノクロネガ、カラーリバーサル、カラーネガによる写真撮影を行った。

第２節　現地調査の経過

平成20年度

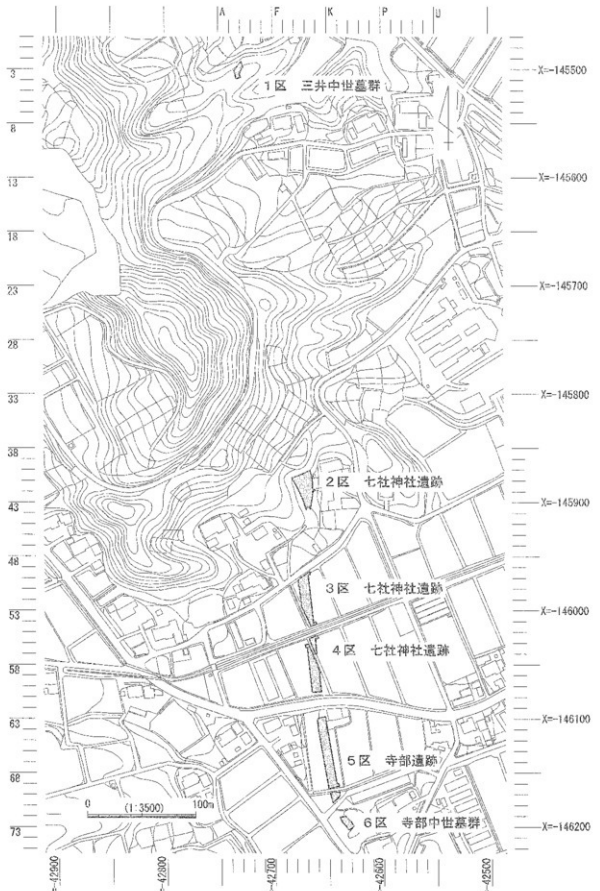
現地調査の準備は９月29日の契約締結後から着手した。準備工の第１番として、地元に対し発掘調査の開始することを説明し、協力と理解をお願いした。現地事務所と調査区を巡らす安全フェンス等の設営準備をし、関係業者と打ち合わせた。調査関係の資・器材搬入、現地事務所と安全フェンス等の設営等を10月14日から行い、あわせて10月14日と20日にも資材の搬入を行った。23日には採用した普通作業員が集合し、作業内容の説明、新規入場者教育等を実施した。20年度の発掘調査は三井中世墓群を１区とし、開始した。ほかに６区の寺部中世墓群、七社神社遺跡の一部である３区が20年度の調査対象区である。

１区の三井中世墓群からは小規模な竪穴住居跡１軒と集石遺構３基が発見された。６区の寺部中世墓群は独立丘陵頂部に集石遺構７基が発見された。当初、両遺跡はともに集石遺構は墓ではないかとされ、ともに中世墓群とした遺跡名を呼称した。七社神社遺跡３区は２面の遺構面が検出された。遺構については、古墳時代から中世の遺物が含まれた流路、掘立柱建物跡、土器集中箇所、土坑・小穴等が検出された。検出された遺構については、随時実測・写真撮影を行った。各調査区については、空中写真測量と撮影、高所作業車による撮影を行い、調査を終えた。調査終了後には埋め戻しを終了し、20年度の出土遺物を島田事務所に搬出し、調査事務所を撤去して、平成20年度の調査は終了した。

平成21年度

現地調査の準備は７月17日の契約締結後から着手した。まず、準備工の第１番として、現地作業のための普通作業員を募集し、応募者の面接とその後の採用を行った。あわせて資材の調達、諸届の作成など事務手続に入った。現地事務所と調査区を巡らすフェンス等の設営準備をし、関係業者と打ち合わせた。調査関係の資・器材調達などの準備、24日には現地事務所等設営に関する打ち合わせを行い、30日には現地事務所設営が完了した。あわせて資材の搬入を行った。

８月３日には七社神社遺跡２区の重機による表土除去作業を行い、８月25日には中遠農林事務所（以下、農林に略す）、文化課の表土除去後の土量確認検査を受ける。


A
F
K
P
U
1区　三井中世墓群
2区　七社神社遺跡
3区　七社神社遺跡
4区　七社神社遺跡
5区　寺部遺跡
6区　寺部中世墓群
0　(1:3500)　100m
X=-145500
X=-145600
X=-145700
X=-145800
X=-145900
X=-146000
X=-146100
X=-146200
Y=-42500
Y=-42600
Y=-42700
Y=-42800
Y=-42900

第４図　調査区位置図

2区の調査

2区の人力掘削は8月後半から開始し、流路を検出した。検出した流路について予想された掘削深度と異なるため、掘削深度の変更を農林、文化課とともに確認した。流路からは須恵器・土師器・灰釉陶器などが出土した。近接する生活領域からの流入と考えられる。2区については流路数条が検出されたが、随時、検出された遺構の実測・写真撮影を行った。空中測量・写真撮影を9月15日に行い、16日に埋め戻しを開始し19日には完了した。その後、調査区に巡らしたフェンスを除去し、農林に引き渡した。

5区の調査

5区の表土除去掘削は、2区の調査と併行して10月14日から開始した。その後、人力掘削をはじめたところ、家紋とおぼしき文様の描かれた漆椀が発見され、保存処理のため清水整理事務所に運び、保管。遺構検出作業により、明らかとなった遺構については、掘削を行った。この間、各遺構は検出状況や断面、完掘状況について、随時実測と写真撮影を行った。また、出土遺物についても、同様に実測と写真撮影を行った上で、取り上げを実施した。5区で発見された遺構は、流路、溝、柱穴、性格不明遺構であり、出土遺物には漆椀のほか、須恵器・土師器・山茶碗が発見された。空中測量・写真撮影を12月1日に行い、調査は完了した。12月7日に調査区に巡らしたフェンスを除去し、調査区を農林に引き渡した。

4区の調査

4区については12月2日より表土除去掘削に入り、その後、人力掘削をはじめた。4区では2面の遺構面が確認された。発見された遺構は、1面では流路が、2面では流路、掘立柱建物跡、柱穴、土坑・小穴、溝等が発見された。つぎに遺構検出作業により、明らかとなった遺構については、掘削を行った。この間、各遺構は検出状況や断面、完掘状況について、随時実測と写真撮影を行った。また、出土遺物についても、同様に実測と写真撮影を行った上で、取り上げを実施した。年末・年始の休暇に入ったため、その間は安全パトロールを実施した。

空中測量・写真撮影を2月23日に行い、4区についての調査は終了した。25日に埋め戻し・整地を行い、調査は完了した。26日に調査区に巡らしたフェンスを除去し、調査区を農林に引き渡した。

3月に入り、一部、出土品の洗浄と注記、図面や写真の基礎整理の一部を実施した。あわせて資材搬出・現場事務所等の撤収を行い、調査資料の搬送を行っている。これをもって本年度の委託事業を完了した。

22年度にはいると8月から平成23年3月を実施期間とする委託事業の発掘調査報告書作成が開始され、資料整理と報告書作成作業が実施された。

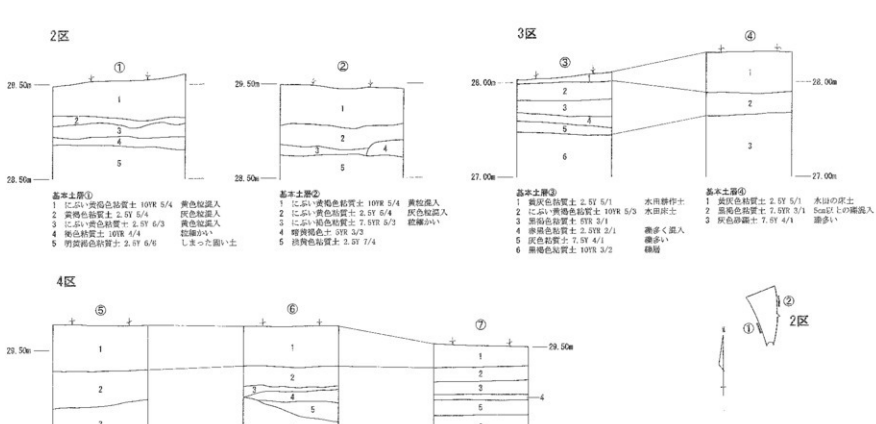
第4章　調査の成果

第1節　微地形と土層

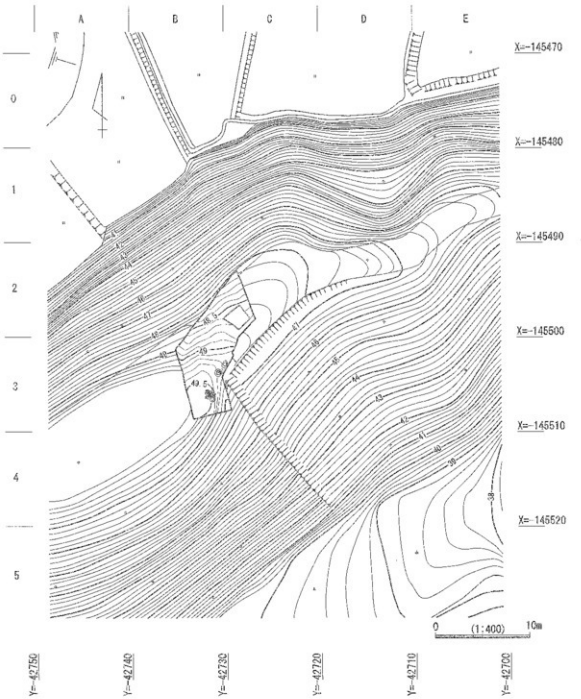
平成20から21年度の発掘調査の結果、七社神社遺跡他では1区から6区を調査した。あらかじめ各調査区に共通する土層や異なる土層について述べ、つぎに各調査区別にその概観と各遺構について記述をすすめる。

調査区では、1区と6区のように小笠山礫層を基盤とし、その上位に丘陵を浸食してできた土が堆積している区域、別に2区から5区のように、小扇状地上に周囲の丘陵から流出した粘質土や礫が堆積した区域がある。特に後者では谷地形を掘削してできた流路、溝が幾筋か認められ、その後、丘陵から流出してできた土砂によって、これら流路（小河川）が埋没されたことが土層の堆積状況から判明した。

土層については、3区から5区は水田に利用されていたため、3区には黄灰色粘質土が耕作土として



第5図　2・3・4区土層柱状図



第６図　１区三井中世墓群全体図（完掘後）

認められた。この土壌は鉄分の多い酸化土壌であり、乾田もしくは半乾田により形成されたと推定される。4区は還元土壌の黒褐色粘質土が耕作土として認められた。この点は4・5区の土壌と異なる。5区は、3区と同様に黄褐色粘質土が耕作土として認められた。同じような土地利用が考えられる。3区から5区については、遺構検出面まで中世・古代の遺物を含む包含層が残っていたが、出土量は少なく、周辺から流出した粘質土や礫とともに混入したと考えられる。それ以外の遺構や流路に出土遺物が認められた。

第2節　各区の遺構

三井中世墓群（1区）の遺構

北東に先端を向けた浸食の進んだ丘陵上に調査区はある。調査区から検出された遺構は、時代の異なる2時期の遺構であった。1は海抜49～48m付近の平坦面から小規模な竪穴住居跡1軒であり、2は海抜49.8～49m付近の緩傾斜面から検出された集石墓4基であった。

竪穴住居跡SH01

竪穴住居跡SH01は丘陵稜線上の長さ11m、6.5mほどの平坦面に存在するが、この平坦面は狭く、複数の竪穴住居跡が存在する余地はなかった。この住居跡については、居住域としてこの場に造られたという意味はほとんど考えられないので、何らかの特殊な事情によって建てられたものと推定される。

SH01は長辺2.22m、短辺1.7mを測り、ややいびつな方形を呈する。調査面での掘方の壁面での高さは、4～1㎝ときわめて浅い。床面には生活の痕跡を残す硬化面は認められず、竪穴住居跡の壁溝、柱穴や炉跡も認められず、かつきわめて小規模であることから、特殊な立地に建てられていることも考慮すると、居住用の竪穴住居跡とは考えられなかった。住居跡の南西から壺もしくは甕1が出土した。この竪穴住居跡SH01の時期ついては、覆土から出土した土器が古墳時代前期の単一時期であることから、古墳時代前期の遺構と理解できる。

集石墓1

調査区南で丘陵頂部に近い位置で発見された。集石墓1は東西長0.72m、南北長0.68m、深さ0.15mを測る土坑の上に、0.5mほどの範囲に長径15㎝ほどの河原石を敷き詰めた遺構である。四周を木の根によって抱えられているため、詳しくは不明である。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓2

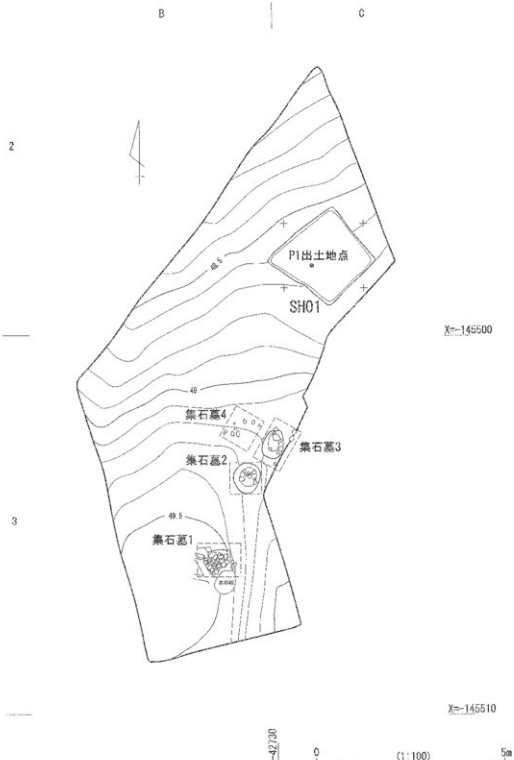
調査区南で、集石墓1の1.5m北、丘陵頂部よりやや下がった傾斜変換点で発見された。集石墓2は東西長0.73m、南北長0.88m、深さ0.1mを測る土坑の上に、0.3mほどの範囲に長径10㎝ほどの河原石を9個、散在的に敷いた遺構である。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓3

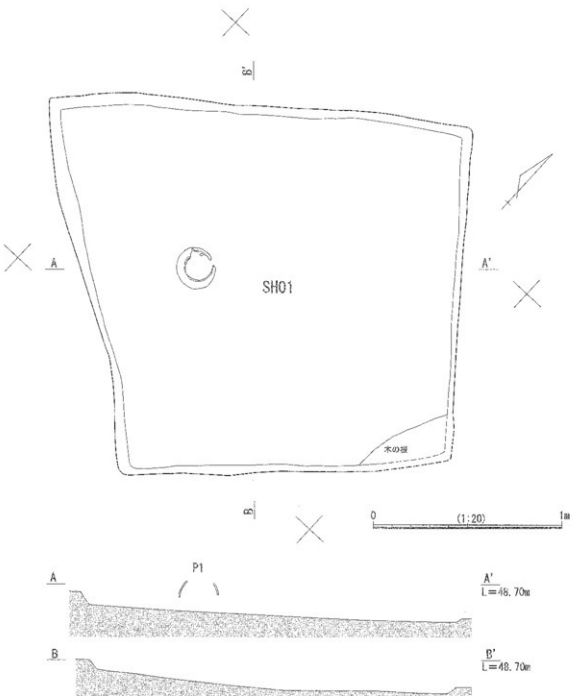
調査区南で、集石墓2の0.3m北東、丘陵頂部よりやや下がった平坦面で発見された。集石墓3は東西長0.55m、南北長0.85m、深さ0.07mを測る土坑の上に、0.8m×0.5mほどの範囲に長径15㎝ほどの河原石を10個、散在的に敷いた遺構である。一部の礫は土坑の範囲の外にまで分布した。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓4

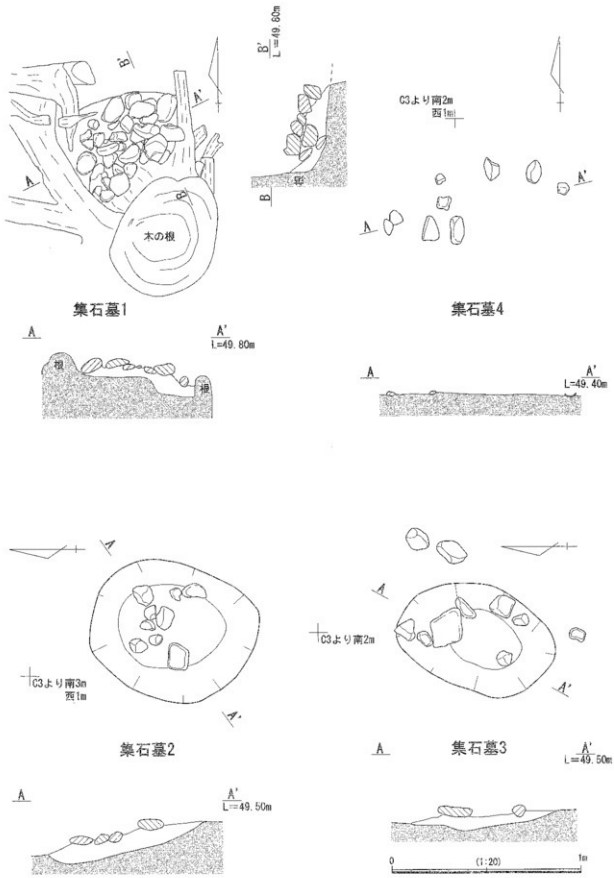
調査区南で、集石墓3に近接した、丘陵頂部よりやや下がった平坦面で発見された。集石墓4は下部に土坑は認められなかった。0.9m×0.4mほどの範囲に長径10㎝ほどの河原石を9個、散在的に敷いた遺構である。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。



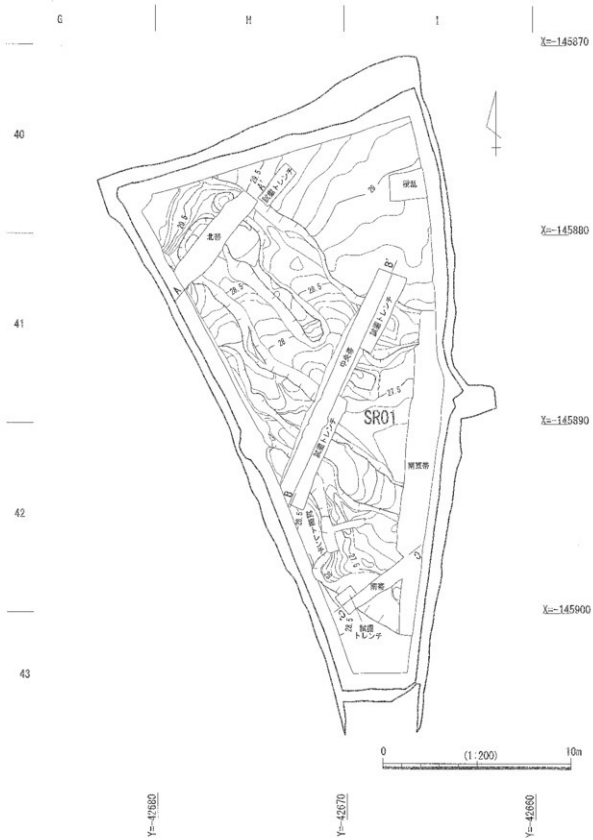
第７図　１区三井中世墓群全体図



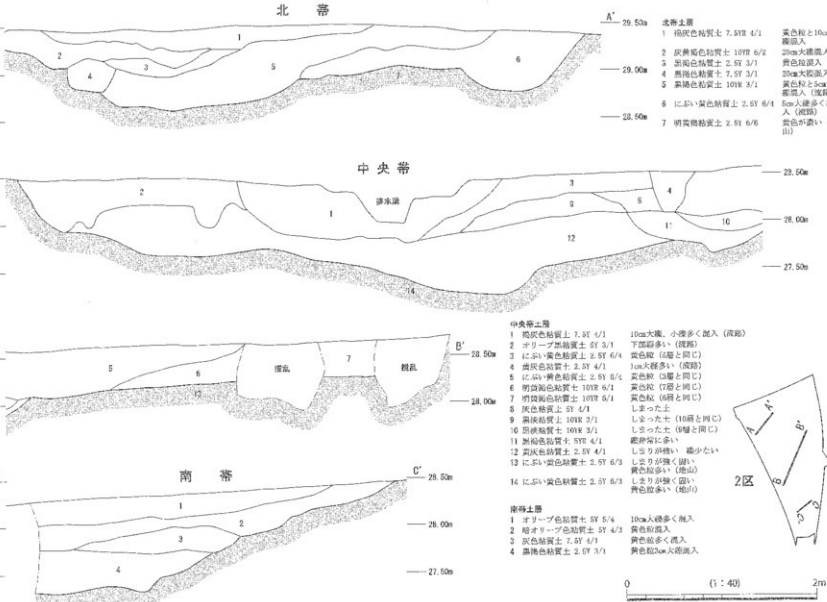
第８図　１区SH01平・断面図



第９図　１区集石墓１・２・３・４平・断面図



第10図　２区七社神社遺跡全体図



第11図　2区北・中央・南土層図

七社神社遺跡（２区）の遺構

南東に先端を向けた浸食の進んだ丘陵の谷間に調査区はある。調査区から検出された遺構は、土器等を含んだ流路であった。流路は海抜29.7m付近を上面とし谷方向に沿って南東に流れていた。

SR01

SR01は調査区を北西から南東に谷方向に沿って斜めに検出された。長さ約18m、幅10m、検出上面より底面までの深さ２ｍを測る。出土した土器から、時期の異なる複数の流路が重複して流れていたと考えられる。流路からの出土土器には、古くは古墳時代後期からはじまり、新しい遺物は初期の山茶碗が認められる。これは周辺からの生活遺物が流入したと考えられる。

出土土器をみると、流路は一時的な断絶はあるとも推定されるが、その出土遺物の中に奈良時代の須恵器片が出土していることから、おおづかみには古墳時代後期から山茶碗の時期である平安時代末まで、複数の時期にわたってほぼ同じ流路が存在し、それが北西から南東に流れを変えていたと推定される。

あるいは流入遺物の年代は、周辺にあった集落の消長年代を示すだけかもしれない。

七社神社遺跡（３区）の遺構

３区は七社神社遺跡２区の南側にあって、小扇状地北側に位置する。調査区の等高線の流れは北側が高く、南側に下っている。調査対象となった遺構面は２面で、検出された１面の遺構は中世から奈良時代後半の遺構で、井戸跡、流路（溝状遺構）、土器集中箇所などである。２面は古墳時代後期から奈良時代の遺構であり、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑・小穴などである。

以下、１面の遺構より報告するが、おそらく旧地形は北側が高く南にむかって低かったと推定されるが、現地調査の段階では水平に調査面を整えて調査したため、現地調査の担当者は本来２面とすべき遺構も十分区別できていなかった。そのため遺構面の認識と出土遺物の間に本来あり得ないであろう若干の混乱が認められる。そのため、整理担当者の該識により遺構の年代を決定した。

また現地調査を担当した調査員は１面遺構のうちSR01から06までを流路遺構と考え、SRの遺構略号を使用し、遺物の取り上げまで行っている。しかしながら、これらは自然の流路とは考えにくく、人工の溝状遺構と判断できる。したがって１面の遺構のうちSR01から06については、出土遺物の注記まで終了しているため、遺構略号の変更には影響が大きく、あえて本書ではそこまでは行わず、そのままSRの遺構略号を使用し記述したことを付記しておく。

SE01

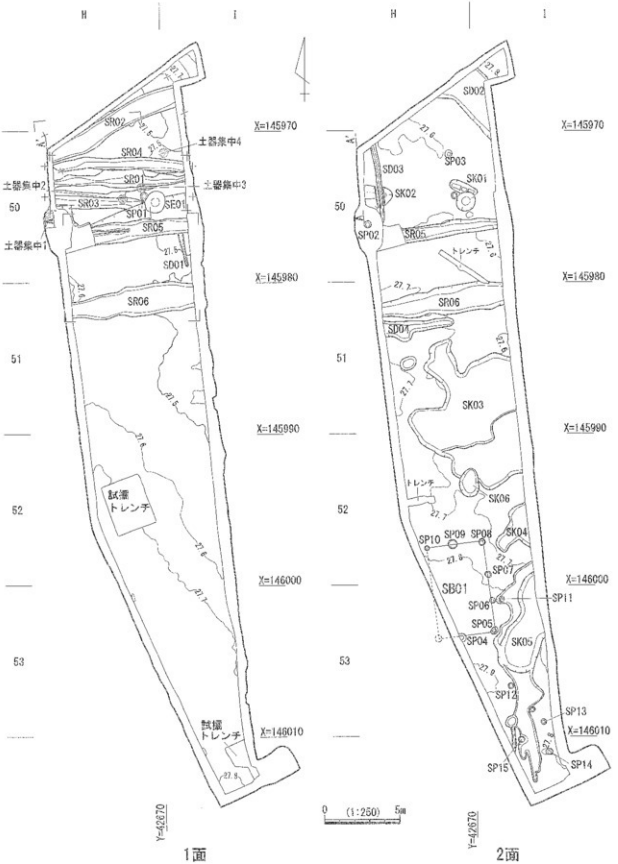
SE01は調査区北側で東西方向に検出された。長径1.5m、短径1.26m、検出上面より底面までの深さ0.45mを測る。この井戸跡に堆積した土は灰色粘土で10cm大の礫を含んでいた。有機質の遺物である漆椀、曲物片が残っていた。伴出した土器に古志戸呂焼の天目茶碗があり、15世紀後葉に一点を置く井戸跡と考えられる。

SR01

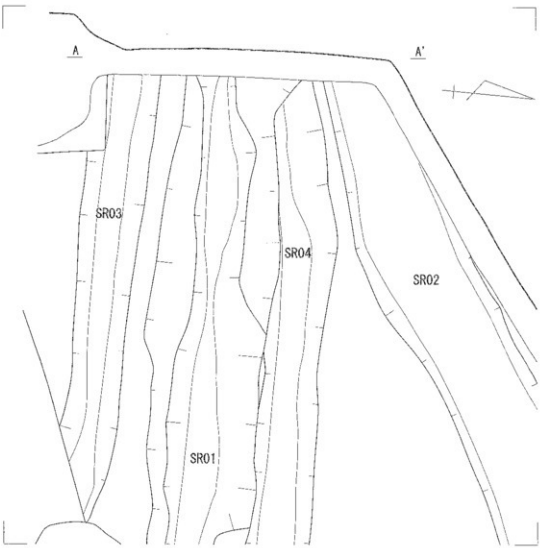
SR01は調査区北側で、東西方向に検出された。調査区内での長さ8.67m、幅1.62m、検出上面より底面までの深さ0.62mを測る。この溝状遺構に堆積した土は灰色粘土層で、周辺の丘陵からの流入と考えられる礫層は認められない。七社神社遺跡の遺構には覆土に違いがあり、礫を含む層で埋まったものとSR01のように粘土によって埋まったものがある。おそらく前者は周辺の丘陵からの流入土であり、後者は丘陵が安定し流入土の押し出しが少なくなって、水流による粘土層が堆積している。このように時代によって環境の変化が、遺構の埋土に変化をもたらした事が推定される。覆土の切り合いからSR02やSR03より新しいことが判明した。

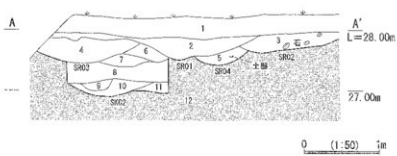
SR02

SR02は調査区北側で東西方向に検出された。底面のレベルの高低から東から西へ流れていたことがわ



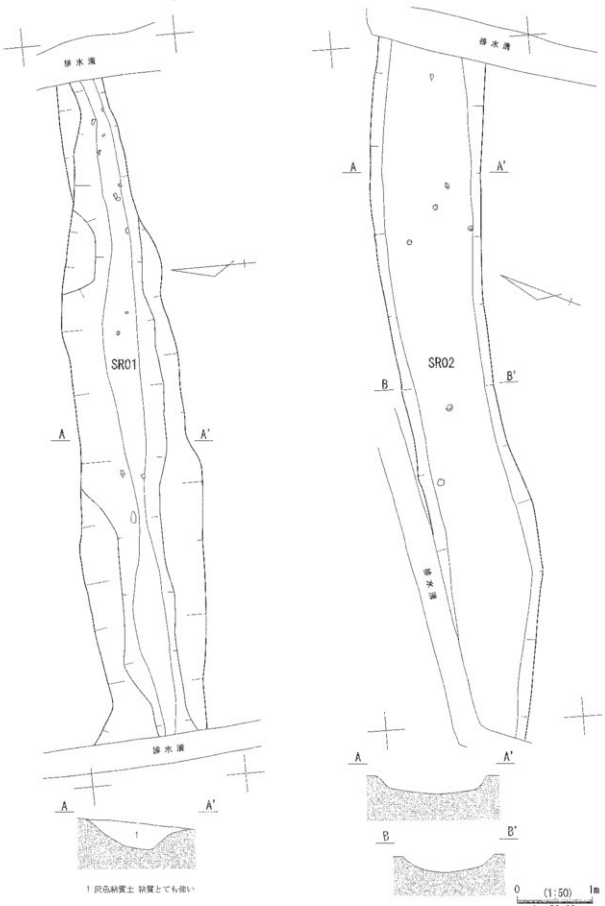
第12図　3区七社神社遺跡1・2面全体図



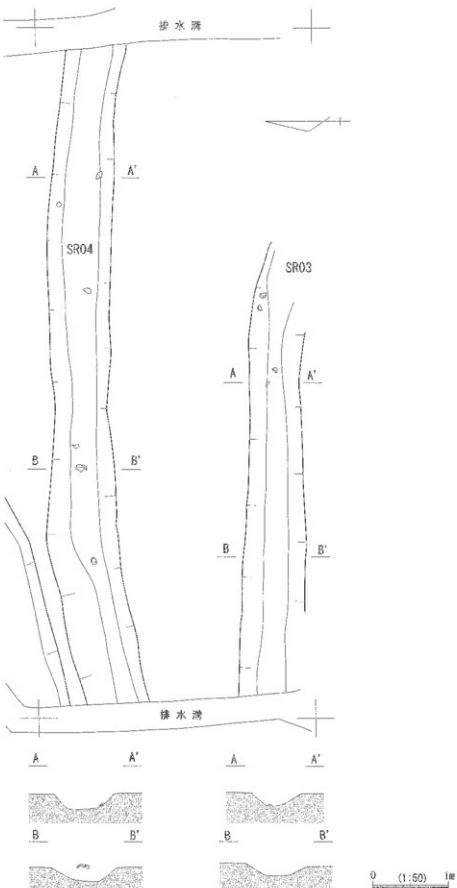


1	灰褐色粘質土 7.5YR 4/2	(撹乱層)	
2	にぶい黄褐色粘質土 10YR 5/3	(SR01)	黄色と青色が混じる
3	黄褐色粘質土	(SR02)	10cm大の礫含む
4	黄褐色粘質土 2.5YR 6/3	(SR03)	礫含む　土器含む
5	黄褐色粘質土	(SR04)	礫含む
6	褐灰色粘質土 5YR 4/1		オレンジの土混じる
7	黒褐色粘質土		礫多く含む
8	黒色粘質土 5YR 1.7/1	(包含層)	砂利多く含む
9	褐灰色粘質土 10YR 4/1	(SR02)	少し礫混じる
10	黒褐色粘質土 10YR 3/1	(SR02)	炭土器少し混じる
11	黒色粘質土 10YR 2/1		粘質強い
12	黒色粘質土 7.5YR 2/1		大礫混じる　粘質強い

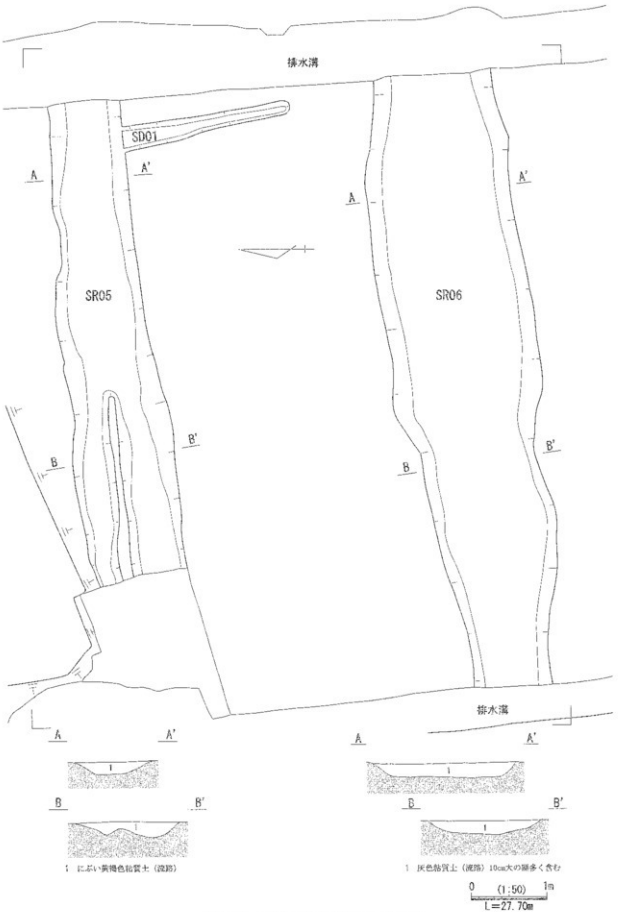
第13図　3区1面流路・西壁土層平・断面図



第14図　３区１面SR01・02平・断面図



第15図　3区1面SR03・04平・断面図



第16図　3区1面SR05・06平・断面図

かる。長さ9.06m、幅1.33m、検出上面より底面までの深さ0.23mを測る。この遺構に堆積した土は黄褐色粘土を呈し、10㎝大の礫が含まれていた。遺構の年代は10世紀代から13世紀代の土器が出土したことにより、13世紀代と判断される。

SR03

SR03は調査区北側で検出された。長さ5.4m、幅0.7m、検出上面より底面までの深さ0.34mを測る。この遺構に堆積した土は黄褐色粘土を呈し、10㎝大の礫が含まれていた。覆土はSR02と近似している。遺構の年代は13世紀代の土器の出土により、13世紀代と判断される。

SR04

SR04は調査区北側で検出された。検出された範囲では長さ8.6m、幅0.84m、検出上面より底面までの深さ0.24mを測る。この遺構に堆積した土は黄褐色粘土を呈し、礫が含まれていた。出土した土器からと遺構の切り合いから、10世紀代から11世紀代の遺構と判断される。

SR05

SR05は調査区北側でSR03の南に位置する。長さ6.3m、幅1.07m、検出上面より底面までの深さ0.12mを測る。この遺構に堆積した土はにぶい黄褐色粘土で、遺物がわずかに認められた。遺構の年代は13世紀代の土器が出土したことにより、13世紀代と判断される。

SR06

SR06は調査区北側でSR05の南に位置する。長さ8.2m、幅1.98m、検出上面より底面までの深さ0.18mを測る。この遺構に堆積した土は灰色粘土で、遺物がわずかに認められた。遺構の年代は、わずかな土器から9～11世紀代と判断しておく。

SD01

SD01は調査区北側で南北方向に検出された。長さ約2.3m、幅0.38m、検出上面より底面までの深さ0.15mを測る。この溝状遺構はSR05によって切られているので、それより古い遺構と判断されるが、詳細な時期については手がかりはなかった。

土器集中箇所1

調査区北西から検出された。海抜27.5～27.4mのレベルで、長さ約1.0m、幅0.3mの範囲に土器が集中していた。図下できる土器は7世紀前葉の土師器の高杯や坏であった。本来、年代の共通する2面の遺構と関連深いと考えられ、SP02に伴う可能性が高い。

土器集中箇所2

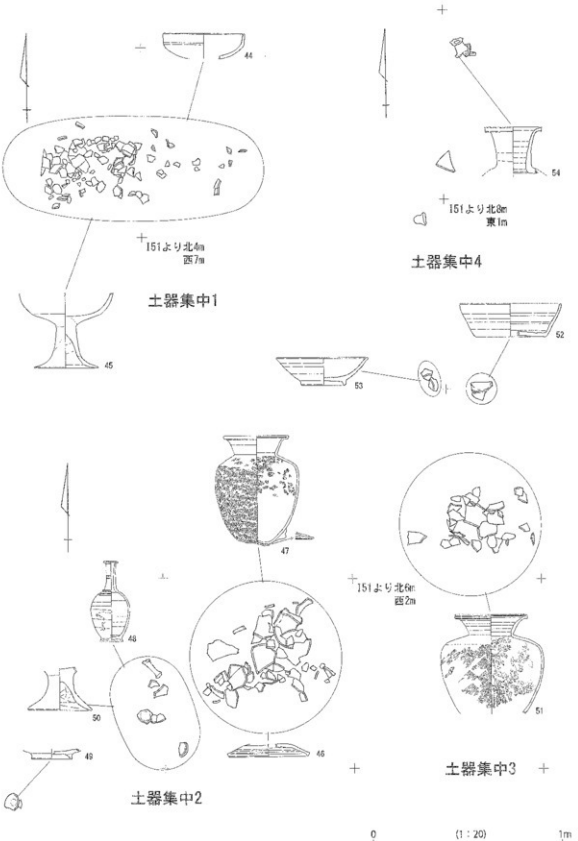
調査区北西から検出された。海抜27.5～27.4mのレベルで、長さ約1.1m、幅0.5mの範囲に土器が集中していた。出土した土器は8世紀後葉の須恵器甕や浄瓶であった。破片の接合状況から本来、地面に置かれていた可能性が高い。年代の共通する2面の遺構と関連深いと考えられる。

土器集中箇所3

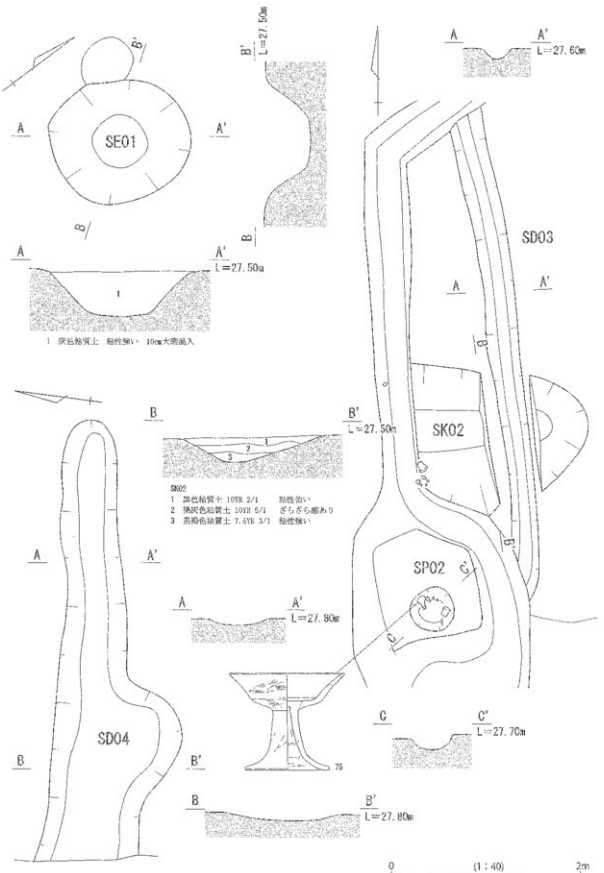
調査区北東から検出された。海抜27.4m前後のレベルで、長さ約0.5m、幅0.3mの範囲に土器が集中していた。出土した土器は8世紀後葉の須恵器甕1個体分であった。破片の接合状況から本来、地面に置かれていた可能性が高い。年代の共通する2面の遺構と関連深いと考えられる。

土器集中箇所4

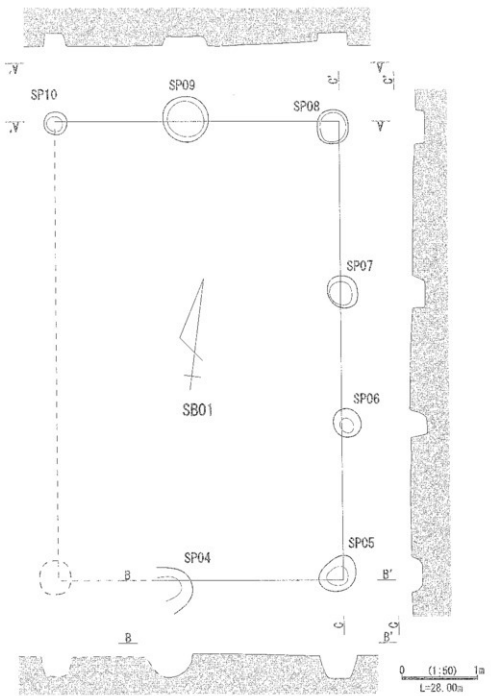
調査区北東隅のSR04の北から検出された。海抜27.4m前後のレベルで、土器が散在的に3カ所から出土した。これを一くくりとして土器集中箇所4とした。出土した土器は北から長頸壺頸部と碗など10～11世紀代の土器と、それより南には8世紀後葉の須恵器坏身が出土した。南の土器については年代の共通する2面の遺構と関連深いと考えられるが、SR04の撹乱によって一部が削り取られた可能性が高い。以上が1面とした遺構である。



第17図　3区土器集中箇所平面図



第18図　3区遺構平・断面図(1)



柱穴堆土一覧

SP04	下層	黒褐色粘質土 2.5Y 3/1	焼土少量混入
	上層	暗灰黄色粘質土 2.5Y 4/2	焼土多量混入
SP05	下層	黒色粘質土 7.5YR 2/1	焼土少量混入
	上層	黒褐色粘質土 5YR 2/1	炭上、黄色、灰色、暗色、黒色土混入
SP06	1層	暗灰色粘質土 7.5YR 4/1	焼土混入
SP07	1層	黒褐色粘質土 7.5YR 3/1	
SP08	1層	黒褐色粘質土 10YR 3/1	白色焼土混入
SP09	1層	黒褐色粘質土 7.5YR 3/1	
SP010	1層	暗灰色粘質土 7.5YR 4/1	

第19図　3区2面掘立柱建物図（SB01）

SB01

掘立柱建物跡SB01は２面南西から検出されたもので、側柱建物で南北３間であり、東西方向は２間以上で調査区外に延びている。方位はほぼ真北を向いている。柱穴の深さは一定ではないが、北側が浅い傾向を示す。周囲の窪地SK05から出土した土器が８世紀前葉であることから、この時期の遺構と判断される。柱穴の覆土には少量の焼土が含まれていた。

SD02

SD02は調査区北側で、南北方向に検出された。調査区内での長さ4.2m、幅3.4m、検出上面より底面までの深さ0.35mを測る。この溝状遺構に堆積した土は褐灰色粘土層とにぶい橙色粘土層で、周辺の丘陵からの流入と考えられる礫層は認められず、水流による粘土層が堆積している。８世紀末から９世紀前葉の須恵器、土師器のほか東国系の黒色土器が出土した。このことより時期幅の限定される遺構であると考えている。

SD03

SD03は調査区北西側で検出された。底面のレベルの高低から北から南へ流れていたことがわかる。長さ5.2m、幅0.35m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。この遺構に堆積した土は上層が黒褐色粘土、下層が暗赤灰色粘土であった。遺構の年代は出土遺物からは不明であるが、２面で覆土の共通する時期である７世紀後半から８世紀前葉と考えておく。

SD04

SD04は調査区北側で検出された。調査区中央よりやや北側で、東西方向に検出された。調査区内での長さ4.62m、幅0.6～1.33m、検出上面より底面までの深さ0.08mを測る。この遺構に堆積した土は黒褐色粘土であった。遺構の年代は出土遺物からは不明であるが、２面で覆土の共通する時期である７世紀後半から８世紀前葉と考えておく。

SK01

SK01は調査区北側で検出された。長さ1.79m、幅0.75m、検出上面より底面までの深さ0.34mを測る。この遺構に堆積した土は上層が黒色粘土、下層が灰褐色粘土であり、自然に埋まったものと推定される。出土した土器から遺構の年代は明確ではないが、２面から検出と周囲の出土土器の年代から、７世紀後半から８世紀代の遺構と判断される。

SK02

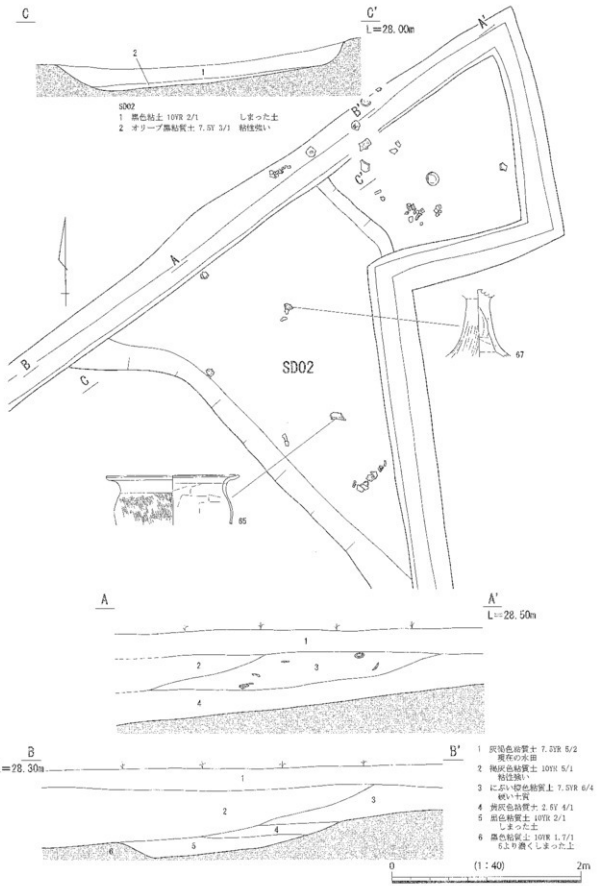
SK02は調査区北側で検出された。長さ5.4m、幅0.7m、検出上面より底面までの深さ0.34mを測る。この遺構に堆積した土は上層が黒色粘土、中層が褐灰色粘土、下層が黒褐色粘土であり、自然に埋まったものと推定される。出土した土器から７世紀前半代の遺構と判断される。

SP02

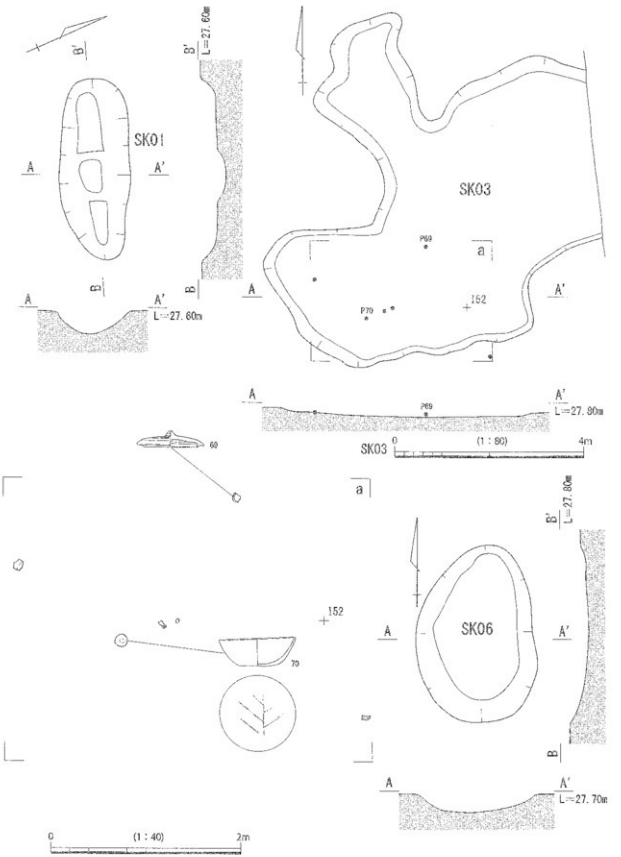
SP02は調査区北側のSK02の南で検出された。検出された範囲では直径0.42m、検出上面より底面までの深さ0.14mを測る。この遺構に堆積した土は黒色粘土であった。出土した土師器高坏から６世紀後半～末の遺構と判断される。

SK03・SK04・SK05

SK03、04、05は調査区中央から南側に位置する。この遺構に堆積した土は黒褐色粘土で、遺物が認められたため、遺構として認定し番号を付したが、壁面も不明瞭で人工的に掘削したとは認定できなかった。そのため調査担当者とも引き継ぎの際に調整し、これらは自然の窪地であると結論を出した。SK03の出土品の年代は７世紀後半、SK05からの出土品の年代は８世紀前半の土器が出土したことにより、この時期に窪地となっている箇所に土器が廃棄されたものと判断される。



第20図　3区遺構平・断面図(2)



第21図　3区遺構平・断面図(3)

小穴群（SP12～15）

調査区南からは小穴が検出された。建物の配置を示す柱穴と判断できるものは認められなかった。出土した土器は土師器・須恵器の小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。以上が2面の遺構である。

七社神社遺跡（4区）の遺構

4区は七社神社遺跡3区の南側にあって、新たに確認調査によって、七社神社遺跡の範囲が広がっていることが確認されたため、4区と呼称し発掘調査を実施した。調査対象となった遺構面は2面で、検出された遺構は、流路、溝状遺構、土坑、小穴などである。2面は古墳時代後期から奈良時代の遺構であり、1面は平安時代後期から中世中～後期の遺構面と考えられる。以下、1面の遺構より報告する。

SD01

SD01は調査区南側で東西方向に検出された。長さ約3.62m、幅1.3m、検出上面より底面までの深さ0.17mを測る。この溝状遺構に堆積した土は黒褐色土で細かい砂利を含んでいた。植物質の腐植土から成り、流路としては機能していたと考えられる。須恵器と土師器小破片10数点の出土が認められたが、時期を示すものではない。1面は平安時代後期から中世中～後期の遺構面と考えられるので、この範囲の時期の遺構であろう。

SD02

SD02は調査区南側で、東西方向に検出された。調査区内での長さ約2.1m、幅0.55m、検出上面より底面までの深さ0.2mを測る。この溝状遺構に堆積した土は2～3㎝大の礫を多く含む灰黄褐色を呈する砂利層で、周辺の丘陵からの流入土と考えられる。SD02とSD01の新旧関係は不明である。1面は平安時代後期から中世中～後期の遺構面と考えられるので、この範囲の時期の遺構であろう。

SD03

SD03は調査区南で北西から南東方向に検出された。長さ約2.1m、幅0.4m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。この溝状遺構に堆積した土は2～3㎝大の礫を多く含む灰黄褐色を呈する砂利層で、周辺の丘陵からの流入土と考えられる。SD02と同じ覆土であることからSD02と同時期と考えられる。

SK01

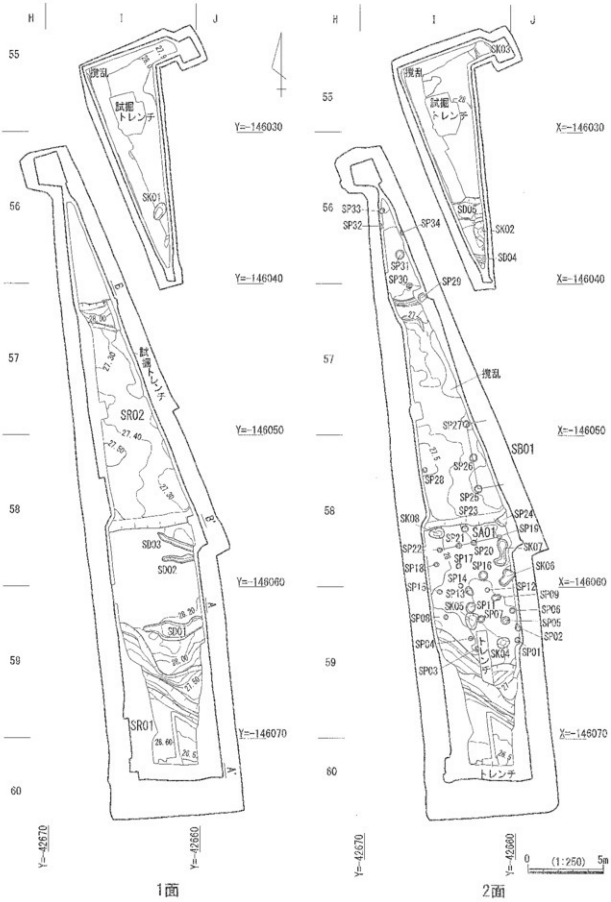
SK01は調査区北側で検出された。長さ約2.4m、幅1.4m、検出上面より底面までの深さ0.25mを測る。この溝状遺構に堆積した土は黄橙色を呈し、5㎝大がほとんどで一部に20㎝大きい礫が含まれていた。埋められたのであろうか。中世中～後期以降の遺構であろうか。

SR01

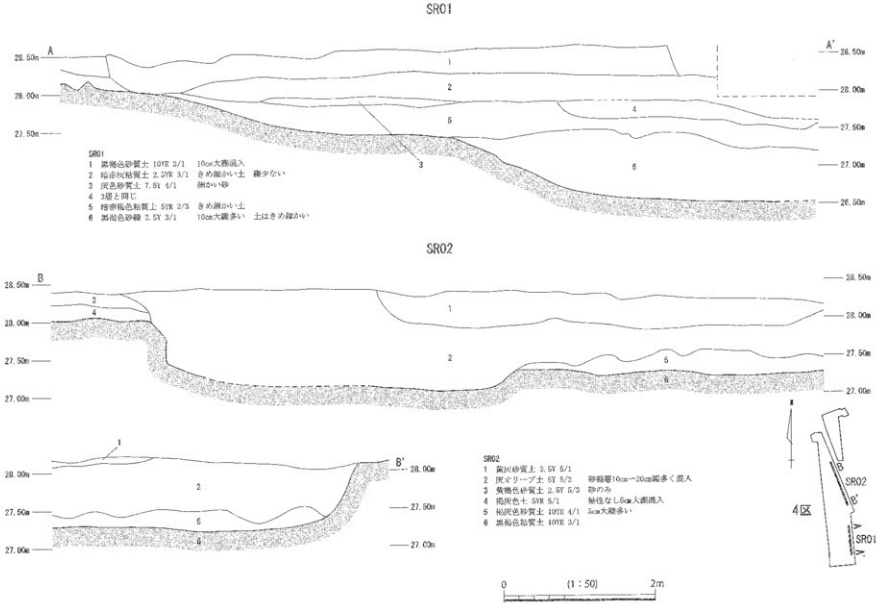
SR01は調査区南端で検出された。検出された範囲では幅9m、検出上面より底面までの深さ1.5mを測る。覆土の堆積状況と底面の断面からすれば、3条の流路がこの位置に流れていたと考えられる。下層では10㎝大の礫が混じっている黒褐色砂礫層が認められた。中間層には砂質土がみられ、水の流れによって砂が堆積したことと推定される。出土した土器は山茶碗から近世の施釉陶器があり、中世前期から近世の流路遺構と考えられる。

SR02

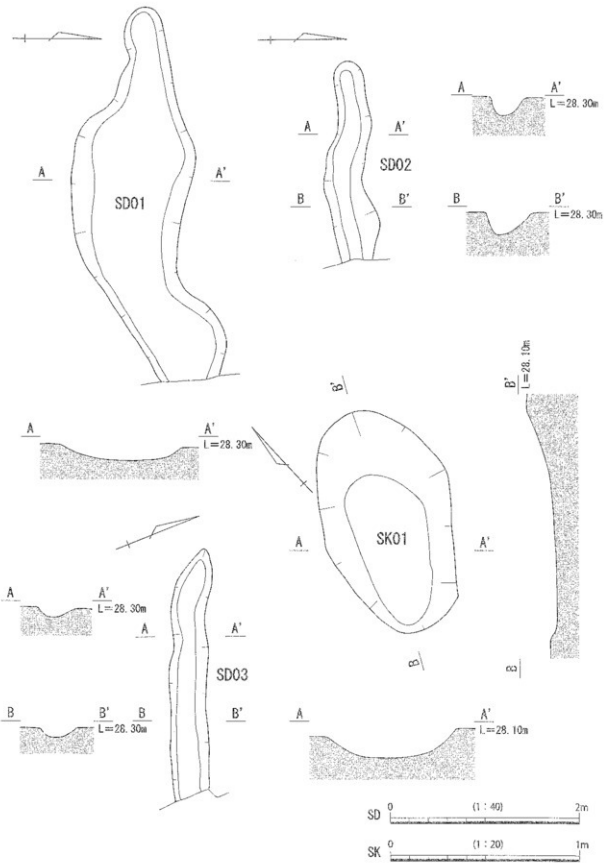
SR02は調査区中央に位置する。検出された範囲では幅15m、検出上面より底面までの深さ0.9mを測る。この流路に堆積した土は砂層と砂礫層の互層で、水の流れによって砂が堆積し、やがて付近の流入土によって埋まったものと判断できる。この流路に堆積した土の主体は灰オリーブ色砂礫層で、10～20㎝大の礫が混じっていた。このことから流路は水の流れによって砂が堆積し、やがて付近の丘陵からの大量の流入土によって埋まったものと判断できる。出土した土器は灰釉陶器から山茶碗があり、古代後期から末期の流路遺構と考えられる。以上が1面の遺構である。



第22図　4区七社神社遺跡1・2面全体図



第23図 4区SR01・02土層図



第24図　4区遺構平・断面図(1)

SB01

掘立柱建物跡SB01は南北２間であり、東西方向は調査区外に延びている。１面流路SR02の底面から検出されたもので、この建物跡が廃棄された後、平安時代後期に流路の下に埋没したものと判断される。柱穴SP27は柱穴に礎を置き、その上に柱を立てたと推定される。SP26とSP25を含め、直径0.4～0.5mを測る。流路下から検出されたこと、周囲からの出土した土器から８世紀中頃から後葉の遺構と判断される。

SA01

小穴SP19とSP22については、東西方向に規則的に並ぶことから柵列SA01とした。小穴はいずれも直径0.25～0.35mを測る。周囲からの出土した土器から７世紀中頃から８世紀後葉であるが、その多くが８世紀代を中心としているので、８世紀代の遺構と判断される。

SP28

SP28は直径0.33mを測る建物の柱穴の中に２個の根石を埋置している。その他この建物を構成する柱穴は調査区外にあって、掘立柱建物跡の規模や方向は不明である。周囲からの出土した土器から８世紀代の遺構と判断される。

SP29

SP29は直径0.26mを測る柱を埋置した建物の柱穴である。柱穴の直径は0.6～0.7m前後の推定され、大型建物の柱穴であろう。この建物を構成する柱穴はほかに調査区外にあって、掘立柱建物跡の規模や方向は不明である。周囲からの出土した土器から８世紀代の遺構と判断される。

SD04

SD04は調査区北側で東西方向に検出された。調査区の端に位置するため、両端部は調査区外に延びている。部分的にしか把握できなかったが、残存する長さは約0.72m、幅0.45m、検出上面より底面までの深さ0.4mを測る。SD04に伴う遺物からは時期は決定できなかったが、周囲からの出土した土器から８世紀代の遺構と判断される。

SD05

SD05は調査区北側で、東西方向に検出された。調査区端から発見されたため、全容は不明確である。残された長さ約1.95m、幅1.35m、検出上面より底面までの深さ0.3mを測る。SD05に伴う遺物からは時期は決定できなかったが、周囲からの出土した土器から８世紀代の遺構と判断される。

SK02

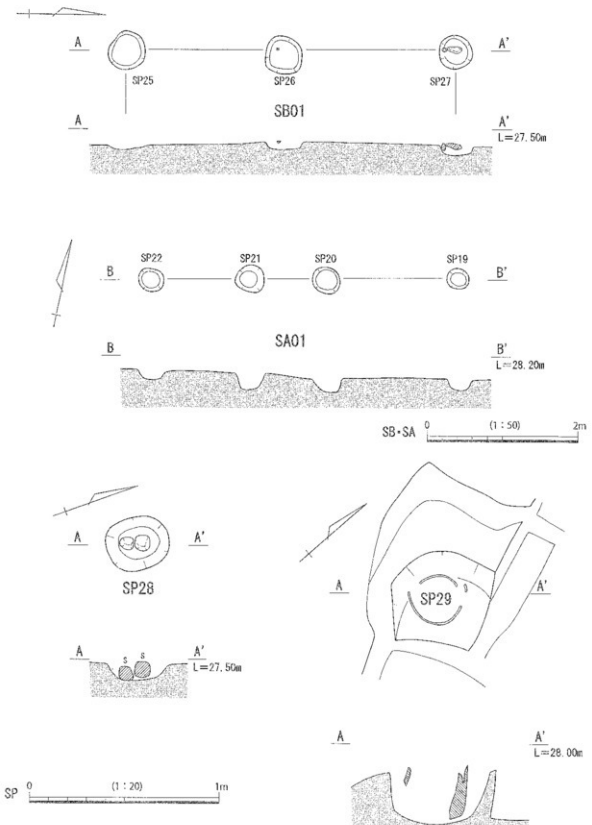
SK02は調査区端部で検出され、一部東側は調査区外に延びている。長径約0.75m、短径0.7m、検出上面より底面までの深さ0.35mを測る。この遺構の覆土は礫混じりの褐灰色土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

SK03

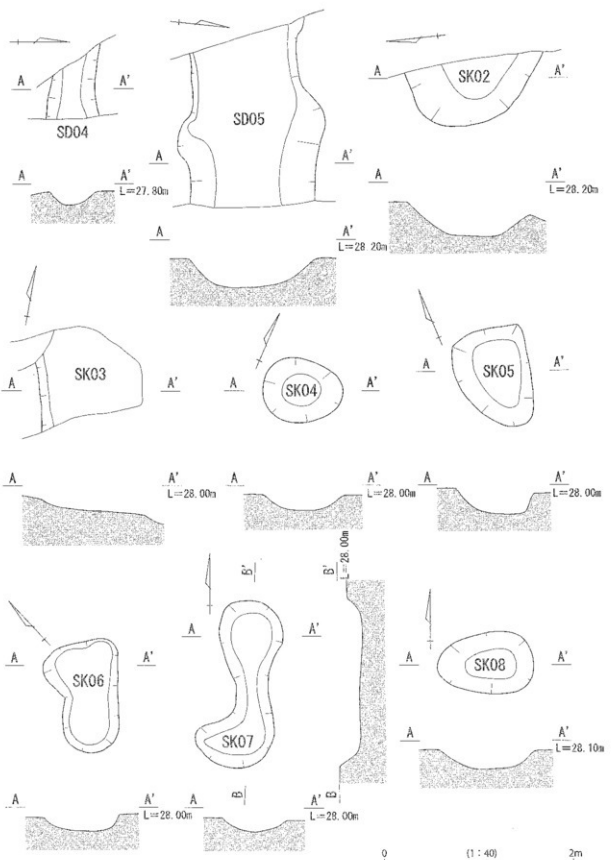
SK03は調査区北端部で検出され、三方が調査区外に延びている。したがって全容は不明であって、溝状遺構もしくは土坑であるのかの判断はできなかったが、本書では土坑とした。長径1.1m、短径0.7m、検出上面より底面までの深さ0.25mを測る。底面はゆるやかに下がってる。この遺構の覆土は黒褐色粘土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

SK04

SK04からSK08は遺構と遺物の集中するⅠ－59グリッドから検出された。長径0.85m、短径0.55mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.17mを測る。覆土は礫混じりの灰褐色土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。



第25図　4区遺構平・断面図(2)



第26図　4区遺構平・断面図(3)

SK05

SK05は遺構と遺物の集中するⅠ－59グリッドから検出された。長径1.05m、短径0.82mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色粘土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

SK06

SK06は遺構と遺物の集中するⅠ－58グリッドから検出された。長径1.18m、短径0.8mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.2mを測る。形状からすると柱穴とその抜き取り痕であるかもしれない。覆土は礫混じりの黒褐色土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

SK07

SK07は遺構と遺物の集中するⅠ－58グリッドから検出された。長径1.75m、短径0.68mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.12mを測る。形状からすると小穴２個が重なったものかもしれない。覆土は赤灰色粘土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

SK08

SK08は遺構と遺物の集中するⅠ－58グリッドから検出された。長径1.03m、短径0.65mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.2mを測る。覆土は礫の多く含む褐灰色土である。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

小穴群（SP１～13）

調査区からは小穴が検出された。建物の配置を示す柱穴と判断できるものは認められなかった。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。

遺構に伴う遺物は少なく細かな年代比定はできないが、２面の遺構であること、建物の柱穴などと考えられる小穴もあることから、２面の出土遺物の中心時期である８世紀中頃から後葉の遺構と判断して大過ないであろう。

寺部遺跡（５区）の遺構

５区は七社神社遺跡４区の南側にあって、確認調査によって新たに発見されたため、寺部遺跡と呼称した。このため本来、七社神社遺跡とは連続した遺跡であろう。小字は鶴居田の範囲に含まれると考えられる。検出された遺構は、溝路、溝状遺構、小穴などである。

SD01

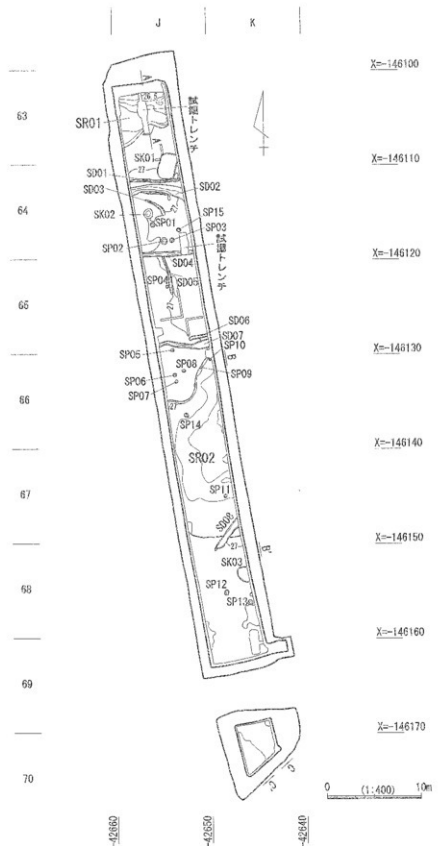
SD01は調査区の西から東方向に検出された。長さ約5.4m、幅0.25m、検出上面より底面までの深さ0.12mを測る。この溝状遺構に堆積した土は褐灰色を呈する砂利層で、周辺の丘陵から流入と考えられる。出土した土器は土師器小破片10数点が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。

SD02

SD02はSD01の南側に併行し調査区の西から東方向に検出された。長さ約5.5～5.6m、幅1.02m、検出上面より底面までの深さ0.23mを測る。この溝状遺構に堆積した土はやや粘質のある灰色を呈する砂利層で、周辺の丘陵からの流入土と考えられる。SD02とSD01の新旧関係は不明である。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。

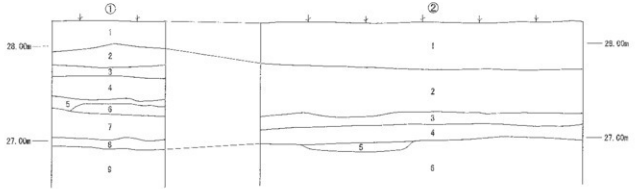
SD03

SD03はSD02の南側に調査区の北西から南東方向に検出された。長さ約2.5m、幅0.15m、検出上面より底面までの深さ0.05mを測る。この溝状遺構に堆積した土は褐灰色を呈する砂利層で、周辺の丘陵からの流入土と考えられる。遺物は認められず、遺構の時期は明瞭ではないが、覆土からSD02と同時期と考えられる。



第27図　５区寺部遺跡全体図

5区

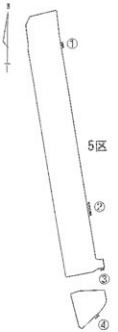


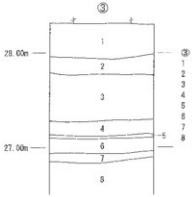
① 東壁（北）

1	にぶい黄褐色土	10YR 5/3　5cm大礫混入
2	にぶい黄橙色土	10YR 4/3　20cm大礫混入
3	灰色土	5Y 5/1　植質あり
4	灰褐色土	5YR 5/2　砂利困
5	褐灰色土	7.5YR 4/1　砂利混入
6	灰褐色土	5YR 4/2　砂利層
7	黒褐色土	2.5Y 3/2　混入なし
8	褐灰色土	7.5YR 5/1　礫少し混入
9	黒褐色土	5YR 2/1　礫等混入なし

② 東壁（中）

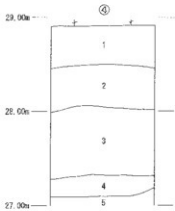
1	にぶい黄褐色土	10YR 5/3　5cm大礫混入
2	灰黄褐色土	10YR 5/2　混入少ない
3	黒褐色土	7.5YR 3/2　混入少ない
4	灰色土	7.5YR 6/4　10cm大礫多い
5	SD08	
6	黒褐色土	5YR 2/1　礫混入なし





③ 南壁

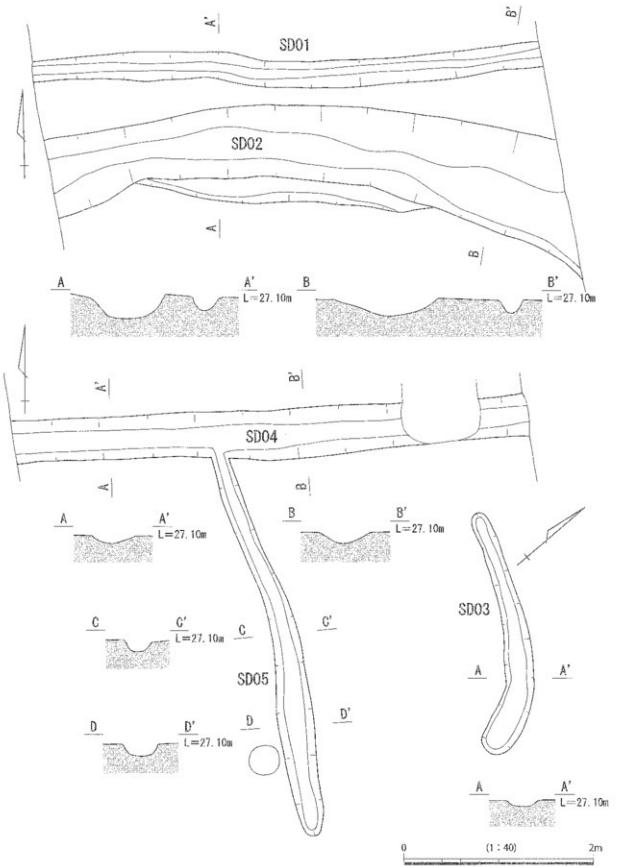
1	にぶい黄褐色土	10YR 6/3　耕作土
2	灰褐色土	5YR 5/2　5cm大礫多い
3	灰黄褐色土	10YR 5/2　混入少ない
4	黒褐色土	7.5YR 3/2　混入少ない
5	褐灰色土	10YR 4/1　砂質礫混入
6	褐灰色土	7.5YR 5/1　砂質礫混入
7	黒褐色土	7.5YR 3/1　砂質混入
8	灰色土	7.5Y 5/1　粒揃わい



④ 長壁

1	にぶい黄褐色土	10YR 6/4　10cm大礫混入
2	黒色土	7.5YR 2/1　粘質強い
3	赤灰色土	2.5YR 4/1　混入少ない
4	褐灰色土	10YR 4/1　粘質強い
5	黄灰色土	2.5Y 5/1　3cm大砂利混入

第28図　5区土層柱状図



第29図　S区遺構平・断面図(1)

SD04

SD04は調査区の西から東方向に検出された。SD04と北側で重複している。長さ約5.4m、幅0.42m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。この溝状遺構に堆積した土はやや粘質のある黒色を呈する砂利層で、付近の流入土と植物の腐植土によってできたと考えられる。ほとんどよどみに近いところに砂利層の流入により埋没したと考えられる。遺物は須恵器と土師器片が認められた。遺構の時期は7世紀前葉から中葉である。

SD05

SD05は調査区の南北方向に検出された。長さ約4.1m、幅0.2m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。この溝状遺構に堆積した土はやや粘質のある灰色を呈する砂利層で、周辺の丘陵からの流入土と考えられる。遺物は須恵器と土師器片が認められた。遺構の時期は7世紀前葉から中葉である。SD04とSD05の新旧関係は不明である。

SD06

SD06は調査区で西から東方向に検出された。長さ約1.94m、幅0.3m、検出上面より底面までの深さ0.05mを測る。この溝状遺構に堆積した土は黒褐色粘質土層で、1㎝大の礫が混じっていた。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。

SD07

SD07は調査区で西から東方向に検出された。長さ約5.5m、幅0.85m、検出上面より底面までの深さ0.08mを測る。この溝状遺構に堆積した土はオリーブ黒色土層で、砂や砂利が混じっていた。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。上部の包含層からは山茶碗や15世紀代の羽釜片が出土している。近接して発見されたSD05との新旧関係は不明である。

SD08

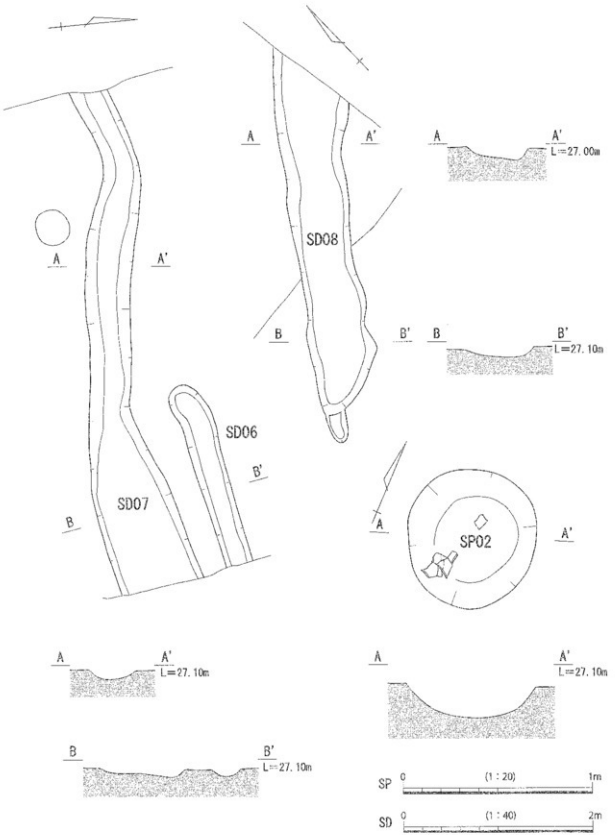
SD08は調査区南で北東から南西方向に検出された。長さ約3.9m、幅0.55m、検出上面より底面までの深さ0.09mを測る。この溝状遺構に堆積した土は黒褐色土層で、5㎝大の礫が多く混じっていた。付近の流入土と植物の腐植土によってできたと考えられる。ほとんどよどみに近いところに砂利層の流入により埋没したと考えられる。SR02の埋没後に掘削したと考えられる。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。SR02との関係から新しい遺構と考えられる。

SR01

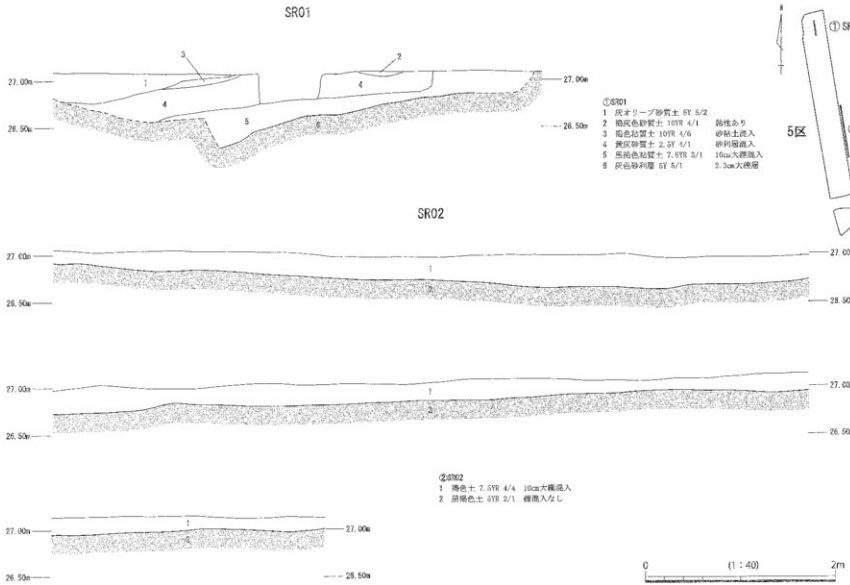
SR01は調査区北側から検出された。検出された範囲では長さ6.2m、幅0.62m、検出上面より底面までの深さ0.7mを測る。この溝状遺構に堆積した土は砂層と粘土層の互層で、10㎝大の礫が混じっている層が認められた。このことから流路は水の流れによって砂が堆積し、やがて付近の流入土によって埋まる、そして流れ、また埋まることが繰り返されたものと判断できる。この部分については、底の高さから西から東へ流れていたと推定される。植物の腐植土によってできたと考えられる。ほとんどよどみに近いところに砂利層の流入により埋没したと考えられる。SR02の埋没後に掘削したと考えられる。出土した土器は山茶碗から古瀬戸中期の製品、その他の遺物には漆器椀があり、中世前期から中期の流路遺構と考えられる。

SR02

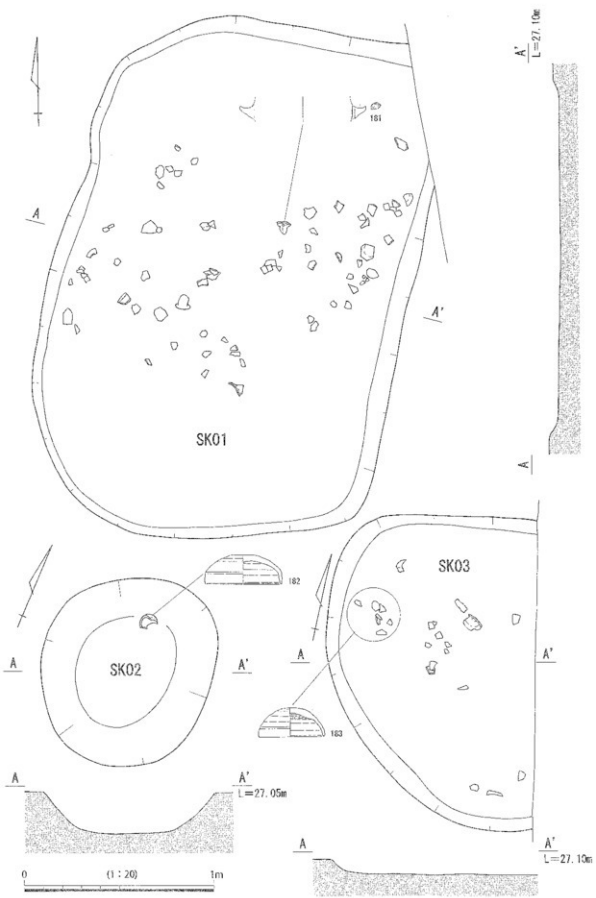
SR02は調査区中央部南側から検出された。検出された範囲では長さ18m、幅0.55m、検出上面より底面までの深さ0.3mを測る。この溝状遺構に堆積した土は褐色の礫層や黒褐色の砂礫層で、付近の流入土によって埋ったものと判断できる。明確な時期を示す資料の出土はなかった。流路というよりも浅く、後背湿地の一部の可能性もある。



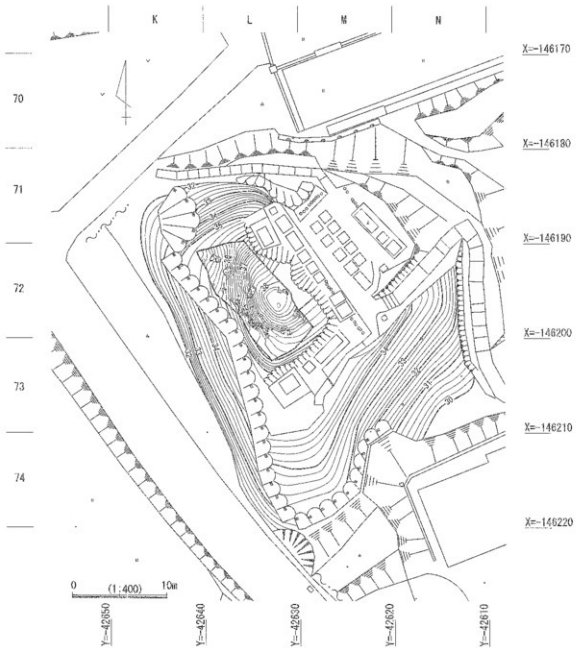
第30図　5区遺構平・断面図(2)



第31図　5区SR01・02土層図



第32図　5区遺構平・断面図(3)



第33図　6区寺部中世墓群全体図(1)

SK01

SK01と02は調査区北側で、SK03は調査区南側で検出された。SK01と03については遺構名称SKの名を命名したが、遺構壁面が明瞭ではなく人工的に掘削した遺構であるとする積極的な根拠に乏しい、という前調査担当者からの引き継ぎを受けている。SK01は長径2.78m、短径1.89mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.05mを測る。出土した須恵器と土師器は窪地に破片を投棄したと考えられる。土器は7世紀前葉から中葉である。

SK02

SK02は長径0.98m、短径0.9mの円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.45mを測る。いずれも須恵器と土師器片が認められた。遺構の時期は7世紀前葉から中葉である。

SK03

SK03は東側が、調査区外に延びている。残存する長径1.65m、短径1.1mの楕円形を呈し、検出上面より底面までの深さ0.12mを測る。明確な時期を示す資料の出土はなかった。

小穴群（SP 1～13）

調査区からは小穴が検出された。建物の配置を示す柱穴と判断できるものは認められなかった。出土した土器は土師器小破片が認められたが、明確な時期を示す資料ではなかった。

5区については、すでに述べたように七社神社遺跡である集落から続く範囲と理解できる。溝状遺構を埋めていた堆積土は砂利層であり、水の流れや丘陵からの流入土により埋没したと考えられる。遺構面についても1面が形成されていた。さらに出土した土器などの生活遺物は3区や4区に比べ少ないことから、生活の中心域から離れた場所と理解できる。

寺部中世墓群（6区）の遺構

臨済宗長源寺の西側には、標高39mの独立丘がある。6区はこの独立丘頂部にある、見かけ上直径8mほどの塚状の盛り上がりの縁辺西側に位置する。検出された遺構は集石墓7基である。この独立丘の東側と南側は、近年、造成され寺院墓地の一角として利用されているので、独立丘の東と南側は旧状をとどめていない。したがって丘陵の東と南側に、集石墓が存在したのかは不明である。遺構に伴う遺物は認められず、明確な時期は不明であるが、調査区からは山茶碗片が2個体出土しているため、12世紀後葉から13世紀前葉の遺構とも考えられるが、同時に近世後期の寛永通宝などが採集されているので、断定はできない。

集石墓1

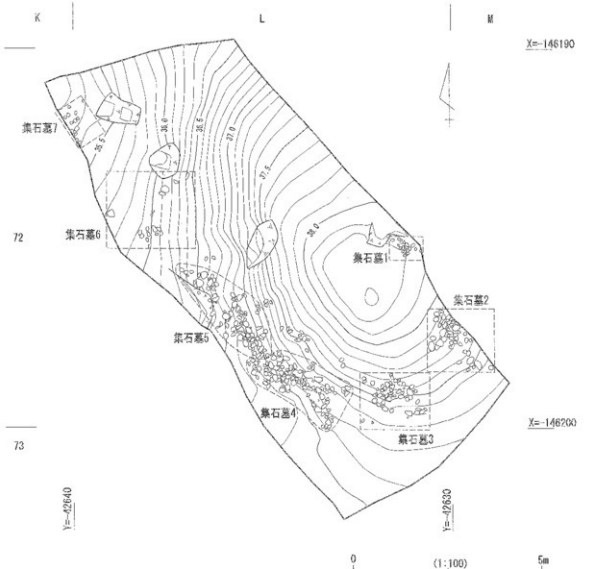
調査区南で丘陵頂部に近い位置で発見された。集石墓1は0.6m×0.4mほどの範囲に長径10cmほどの河原石を敷き詰めた遺構である。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓2

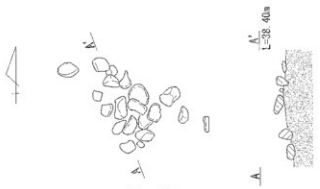
調査区南で、集石墓1の1.6m南、丘陵頂部よりやや下がった傾斜面で発見された。集石墓2は1.1m×1.0mの範囲と0.65m×0.45mの範囲の2カ所に長径20cmほどの河原石を散在的に敷いた遺構である。集石の範囲からすると、2基の集石墓である可能性が高い。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓3

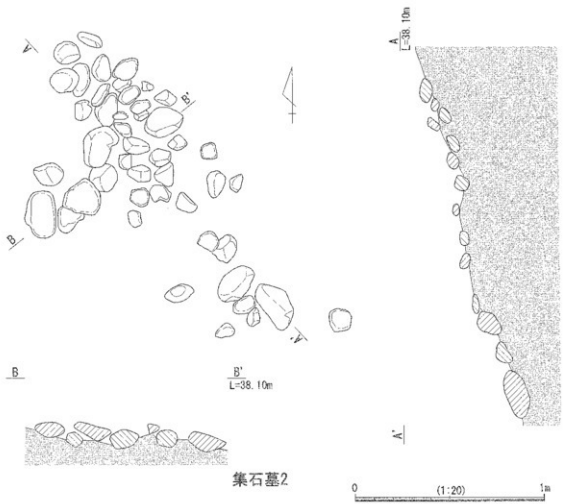
調査区南で、集石墓2の1m西、丘陵頂部よりやや下がった平坦面で発見された。集石墓3は0.9m×0.8mの範囲に長径15cmほどの河原石を略方形に敷いた遺構である。遺構縁辺部の礫は直線に並び、平面形をよくとどめ、6区と1区の集石墓ではもっとも遺存がよい。遺物は認められなかったが、中・近世の墓ではないかと推定される。



第34図　6区寺部中世墓群全体図(2)

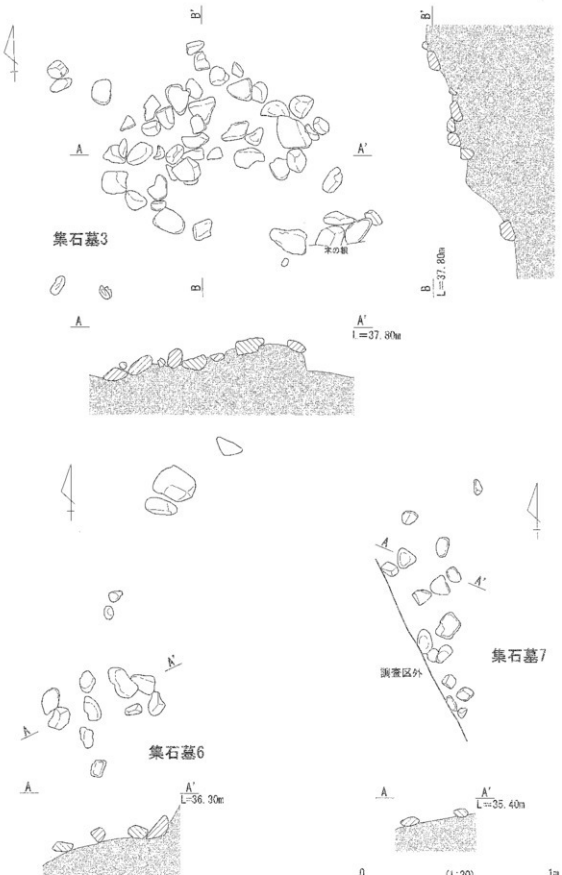


集石墓1

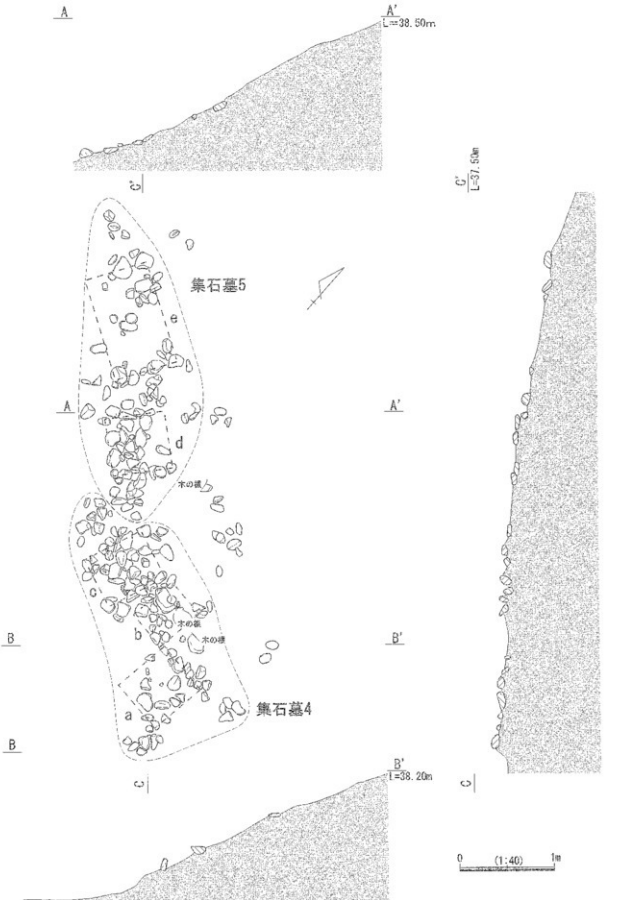


集石墓2

第35図　6区集石墓1・2平・断面図



第36図　6区集石墓3・6・7平・断面図



第37図　6区集石墓4・5平・断面図

集石墓４・５

調査区北西から南東の丘陵頂部よりやや下がった平坦面に、5.5mの範囲に集石が認められた。現地調査の段階で、この集石の範囲を２群の集石と考え、集石４・５と呼称した。なお下部に土坑は認められなかった。集石墓４・５は、さらに礫の直線に並んだ範囲をみると、礫ではずれた部分があるものの、一辺0.6~0.7mの方形を呈する集石墓と推定された。よって集石墓４・５はaからe群の５基の集石墓の集合と推定したい。集石墓からは遺物は認められなかったが、平面方形の中・近世の墓ではないかと推定される。

集石墓７

調査区北西で丘陵斜面で発見された。集石墓７は0.9m×0.4mほどの範囲に、長径10cmほどの河原石を敷き詰めた遺構である。ただし斜面にあるため、礫は上部からの流れ込みの可能性も考えられたが、礫群が規則的に並ぶ部分もあって、流れ込みよって礫が偶然並んだとは、考えられなかった。ただし斜面に落下した礫も多く、残存状態は良くない。遺物は認められなかったが、中・近世の墓の一部ではないかと推定され、集石墓と考えた。

第３節　出土遺物

今回の調査において出土した遺物の多くは土器を中心とし、木製遺物や金属製遺物はきわめて少ない。土器類は古墳時代前期から中世前期を中心にするもので、それ以降の時代を示す遺物はきわめて少ない傾向にある。

１区の竪穴住居跡では古墳時代前期の時期を示す土師器が出土したが、この時期が七社神社遺跡他の上限である。ただし１区以外の２区から６区の調査区では、古墳時代前期の土器は認められなかった。第３節の記述は、量的に多い古墳時代後期から奈良時代の土師器と須恵器と、つぎに多い11世紀から13世紀の灰釉陶器・山茶碗が中心であり、古墳時代中期から後期の土器はそれに続く出土量であるので、従となる。

なお遺物の記述は各区の遺構の年代を示す土器のうち、供献容器である坏・碗類、煮沸容器である甕、貯蔵容器である壺を各区遺構を中心に区別して提示し、そののち遺構に伴わない土器や時代の特徴があまり明瞭でないものを掲示する。

本文で記載する土器のうち須恵器・灰釉陶器・山茶碗は、須恵器生産の中心である湖西窯の製品、清ヶ谷（旧大須賀町）窯、旧菊川町皿山窯から旧金谷町横岡窯など東遠江地域に分布する諸窯の製品とともに、遺跡の至近距離にある須恵器を焼造した皇川窯が認められる。本書では肉眼観察ではあるが、わかる範囲で生産地も認定している。

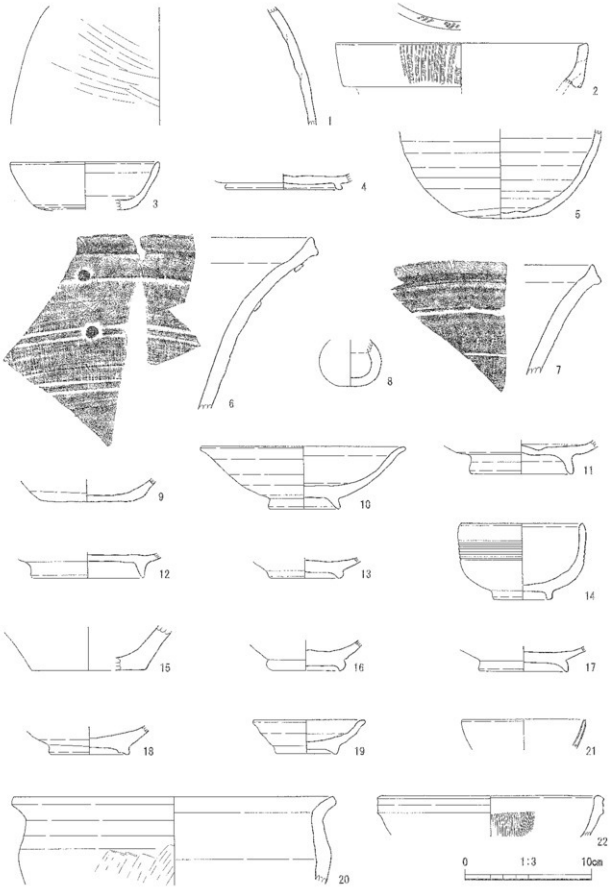
１区の出土遺物

１は竪穴住居跡SH01に伴う壺・甕類である。体部には調整痕が残るが、摩耗のためで調整器具は不明である。２はSH01とトレンチから出土した土器が接合した複合口縁の壺片である。口端部には斜めに突刺文ないしは縄文を施し、口縁外面に半裁竹管により凹線を上から下に入れている。この２点の土器は、古墳時代前期の土器と考えられる。

１区の集石墓に伴う遺物の出土は認められなかった。

２区の出土遺物

３～７は２区流路から出土した７～８世紀代の土器である。周囲の集落域から流れ込んだか、もしくは廃棄された遺物で、周囲に広がっていた集落の存続年代の一点を表している資料である。３は蓋付無高台の坏身である。４は蓋付高台坏身である。いずれも８世紀前葉の湖西産の須恵器である。５は広口



第38図　出土遺物実測図 1

壺で内面に自然釉がかかっている。6と7は湖西産の大甕で、6は口頸部に斜め方向のヘラ描き細線を2段にわたって施すほか、円形浮文を添付している。7は口縁端部を断面三角形とし、口頸部に斜め方向の列点文を2段にわたって施す。いずれも8世紀前葉の湖西産の製品と考えられる。8から9は7～8世紀代の土師器で、包含層から出土した。8は土師器の小型丸底壺である。その寸法からして実用品ではないと考えられる。同様の例が近接する毛森山横穴群一の谷3号横穴から、8世紀初頭の坏蓋とともに出土（大東町教育委員会 2004b）している。9は土師器の壺または甕の底部である。時期は明確ではない。

10～13は流路出土の灰釉陶器と山茶碗である。10・11は11世紀代の東遠窯系のすでに釉のかかっていない段階の碗である。底部の切り離し痕はナデて消している。12の碗は静止糸切り痕を残す。13は切り離し痕をナデて消している。14と15は流路の埋没後の撹乱層から出土した近世陶器である。おそらく水田の開墾にともなって深く鍬が入った時期、言いかえれば近世の新田開発の時期を衰す資料ではないかと推定される陶器である。14は瀬戸・美濃の藤錆茶碗で18世紀後葉、15は18世紀代の志戸呂焼の擂鉢片である。

16～22は2区包含層から出土した土器である。16から18は灰釉陶器と山茶碗窯の碗である。いずれも東遠窯系製品である。16は碗で、鉄分吹き出しの多い胎土は白山窯に類例がある。19は12世紀前半の小碗で、東遠窯系製品である。20は甕で、底部は丸底のタイプであろう。清ヶ谷窯釜ヶ谷窯群D－1号窯の製品によく似た例があるが（大須賀町釜ヶ谷土地区画整理組合 2004）、本例は胴部に縦方向の板ナデ調整がある点が異なる。21は青磁小型碗である。22は19世紀以降の瀬戸・美濃の擂鉢である。

23は不明石製品である。蝋石かと思われる柔らかい石質で、1カ所穴をあけている。石製模造品の可能性も考えたが、明確ではない。

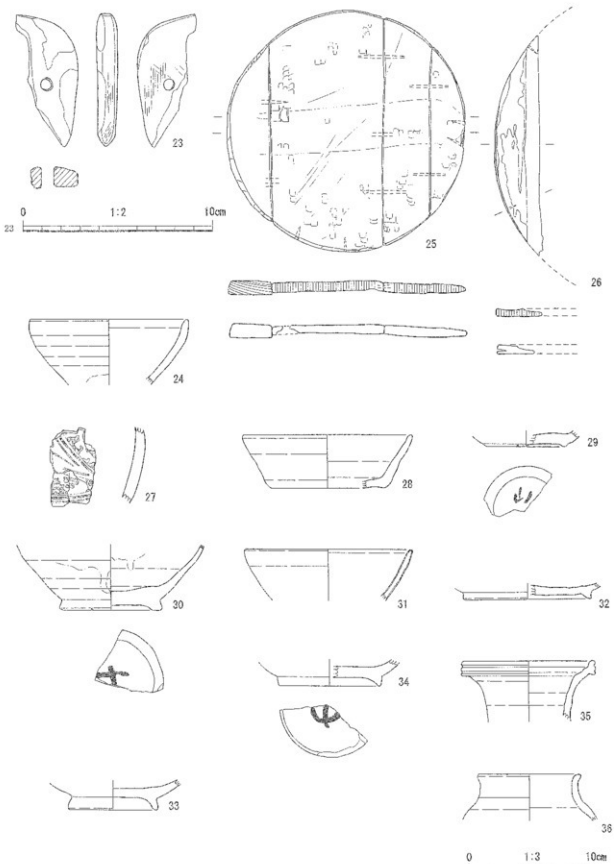
3区の出土遺物

24はSE01から出土した天目茶碗で、15世紀後葉の志戸呂焼である。25から27はSE01から出土した木製品である。27は漆椀で全体に黒漆を塗り、器の表はその上に赤漆の細筆描きで文様を描いている。25は4枚の板を合わせた曲物の底板である。全体を幅0.5cmほどの刃先で薄く削り、スギ材の板目材と柾目材をあわせて使用している。中央の板は3本の木釘で継ぎ、側面は2本の木釘で綴いでいる。SE01からの出土遺物である。26は曲物の底板で1／8ほどが残っていた。全体に黒く、黒漆を塗っている可能性がある。針葉樹の柾目材を使用している。28から31はSR01出土土器である。28は須恵器の短頸を模した形態である。全体に摩耗し、切り離し痕は不明である。29は底部外面に「山」と書かれた山茶碗である。13世紀中葉の東遠窯の製品である。30は高台にモミ痕をつける瓶類である。灰釉浸け掛けであろうか。底面に「十」の墨書がある。内底面にも墨痕があって、破片となった後、再利用されたと考えられる。31は13世紀代の青磁碗である。

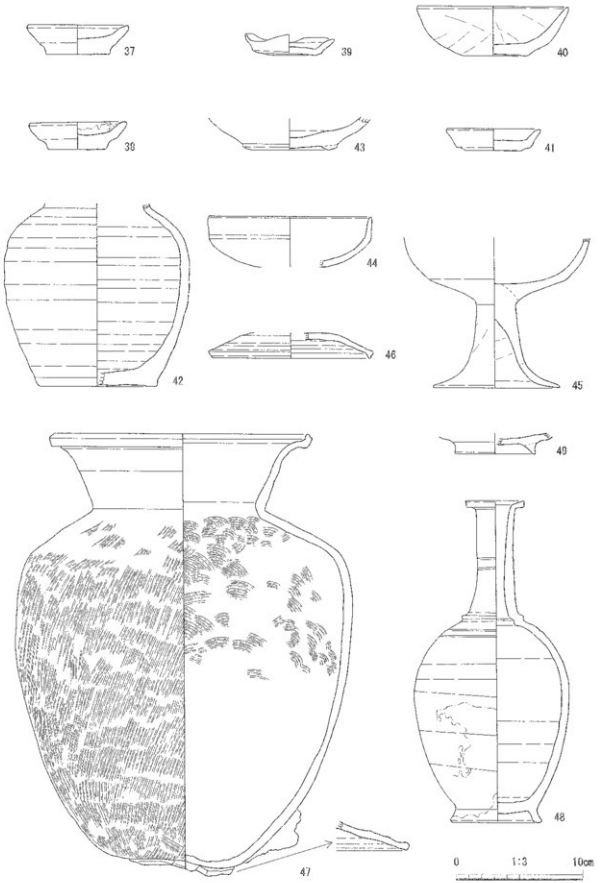
32～39はSR02出土土器である。32は8世紀前半の坏身で湖西窯製品である。33は灰釉陶器の碗で、見込みに同心円文を描く。墨痕が多数付く。34は山茶碗の碗で、見込みが摩耗し、転用されていた。底部に墨書の記号がある。35は須恵器長頸瓶であろう。36は渥美・湖西窯の短頸壺であろうか。2次焼成を受けている。37・38はカワラケ小皿である。38については油性のススがついているので、灯明皿に利用されたと推定される。12世紀後半から13世紀前半と考えられる。39は山茶碗窯の小皿であるが、大きくゆがみ、焼けひずみが顕著である。付近に山茶碗窯があるのであろうか。

40～42はSR04の出土品である。41はカワラケ小皿、40は厚手で、あまり例を知らない。形態からカワラケ質の碗を模したものであろうか。いずれも13世紀代と考えられる。42は渥美・湖西窯の短頸壺であろうか。一部に2次焼成を受けている。43はSR05出土で13世紀前葉から中葉の湖西窯の碗である。

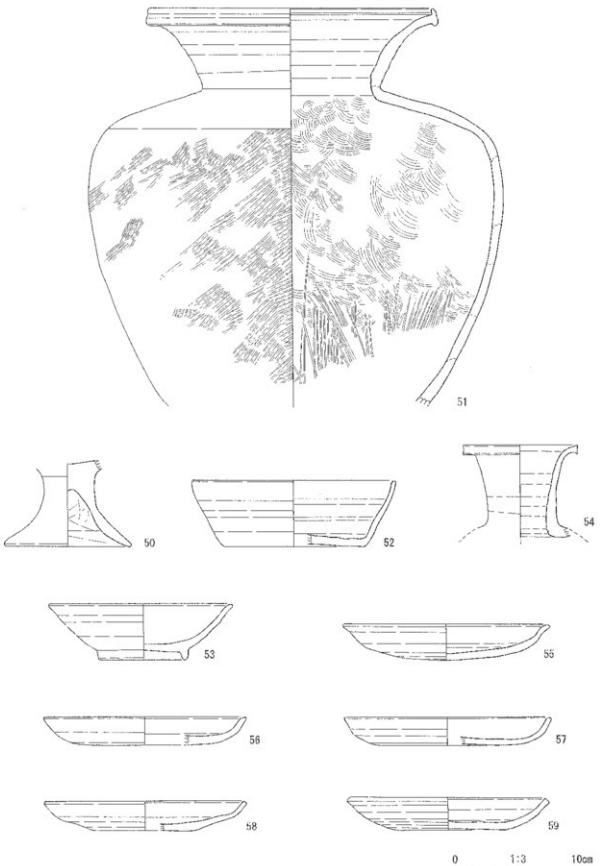
44・45は土器集中箇所1から出土した。44は口縁部に陵をもつ。45は坏部が丸みをもつタイプの高坏



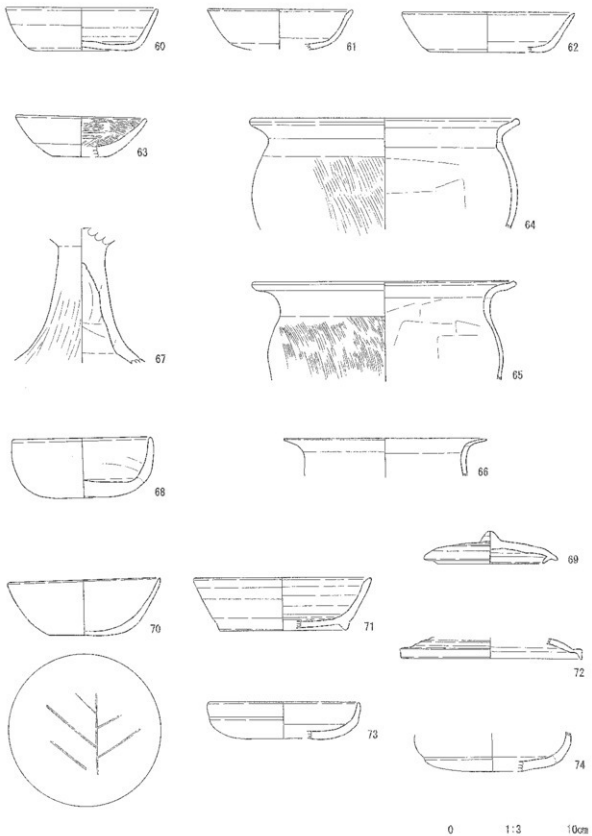
第39図　出土遺物実測図２



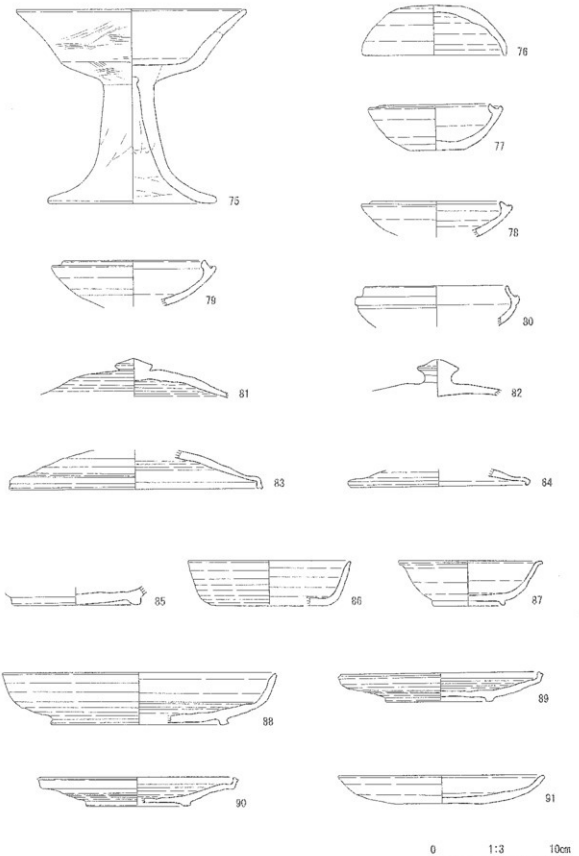
第40図　出土遺物実測図３



第41図　出土遺物実測図４



第42図　出土遺物実測図５



第43図　出土遺物実測図６

である。7世紀前葉と考えられる。

46～50は甕・浄瓶をふくむ土器集中箇所2の土器である。器種の組み合わせから、日常的な生活什器というよりも、何らかの儀礼行為に使用された器類をそのまま置いたと考えられる。46は須恵器瓶、48の浄瓶は体部に自然釉がかかり、整った形態を呈する。47の甕の底部には、焼成に置き台にした須恵器蓋が付着している。蓋と同一時期であることを表している。49は土師器の坏か皿、50は高坏である。いずれも土師器である。煮沸具を欠く供膳形態の組み合わせである。

51は土器集中箇所3の土器、須恵器甕1個体分である。底部を欠き、破片となって出土した。

52～54は土器集中箇所4の土器である。もともと土器集中箇所4の土器は散在的に分布し、同一時期の組み合わせとは考えられなかった。52は無高台の箱形坏、53は灰釉陶器の碗、54は長頸瓶である。ここにも煮沸具は含まれていない。

55から67はSD02出土土器である。55～59が浅い須恵器の皿である。55は内面に墨痕が付着し、硯に転用されていた。60は箱形の坏身である。61・62は土師器の坏で、62は箱形坏である。63は内面を漆位の細かいヘラ磨き調整を施す黒色土器である。形態から関東系と考えられる。64～66は返江に多い口縁部を外反させた土師器甕である。この地区ではこの溝状遺構に煮沸具がみられた。67は高坏または脚付盤である。

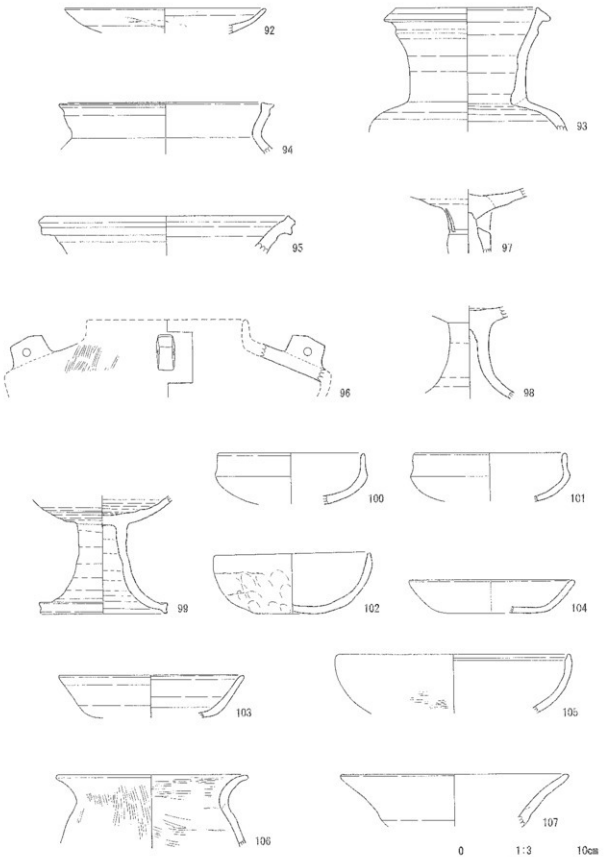
68はSK02出土の土師器坏である。半球形を呈し底部は厚くつくる。7世紀前半と考えられる。69・70はSK03出土土器である。69は乳頭状つまみをもつ須恵器の坏蓋である。70はやや平底の土師器坏である。71～74はSK05出土土器である。71・72は須恵器坏身と坏蓋である。時期は8世紀前葉である。75はSP02出土の土師器高坏である。やや長めの脚に陵をもつ坏部であり、時期は6世紀後葉から末と考えられる。

76から99は包含層出土の須恵器である。76～80は坏身には蓋の受け部をもち、半球形の坏蓋とセットとなるグループをまとめた。いずれもその時期は7世紀前～中葉である。多くは調査区北側で出土したが、遺構に伴っていない。多くは湖西窯など地元遠江で焼造された製品であるが、80は体部上位に沈線を巡らしているところから、尾張窯製品の形態的特徴を忠実に写している。しかしながら焼成からは地元遠江窯の製品の可能性もあって、必ずしも尾張窯製品とは言いきれない。時期については209号窯式～217号窯式の古い段階併行であろう。

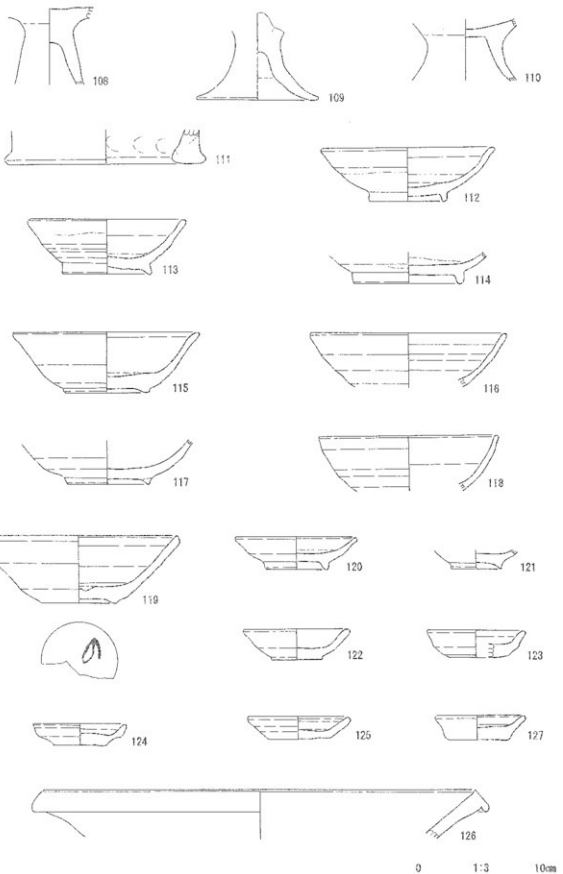
81～85は宝珠状つまみをもち身受けのない蓋に、高台をもつ坏身がセットとなった時期をまとめた。81は扁平な宝珠つまみで、82はやや背の高い宝珠つまみをもつ蓋である。時期については前者が古く8世紀初頭、後者が8世紀前葉から中葉と考えられる。83・84は宝珠状つまみの部分が欠損しているが、その特徴から前者が古く8世紀前葉、後者が8世紀中葉から後葉と考えられる。85は高台をもつ坏身で、時期については8世紀前葉と考えられる。いずれも湖西窯など地元遠江で焼造された製品である。

86は無高台の坏である。底面の側面に近い部分はヘラ削り調整を施している。87は角形高台をもち、口端部をわずかに外反させる。高台の貼り付け際、ナデているため、切り離しの糸切り痕は中心部のみ残る。坏というよりも碗形を呈する。内面は自然釉が掛かっている。黒笹14号窯期に併行する須恵器であろうが、産地は不明である。88は高台の付く大型の坏身もしくは盤である。89・90は台付皿で口縁部の直立するタイプである。いずれも底部に墨痕が付着していることから、硯に転用されていることが判明する。91・92は高台の付かない皿である。91は底面に墨痕が付着する。92は体部外面に墨によるレ点を書いている。

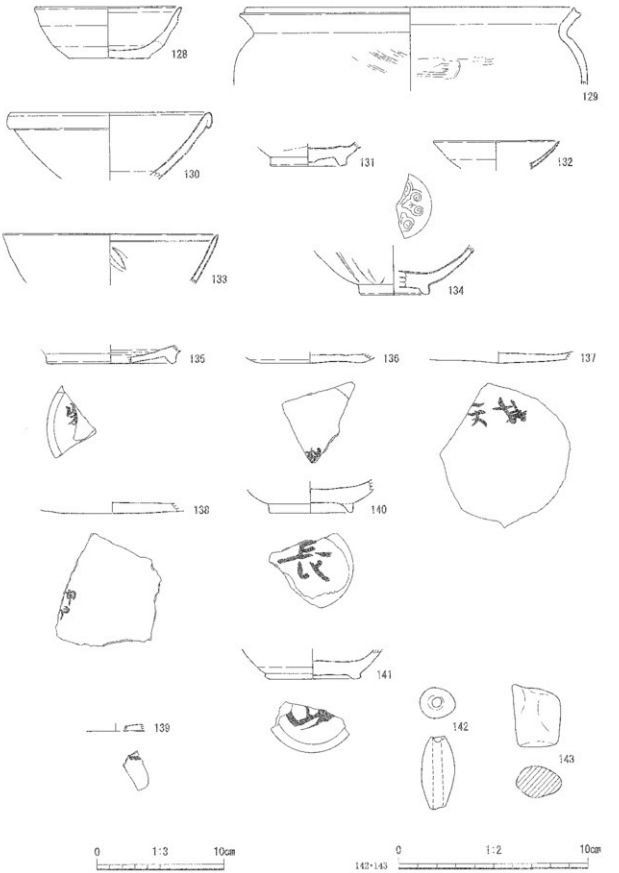
93はやや頸の太い長頸壺である。94・95は甕で、口縁部は無紋である。96は断面方形の耳をもつ横瓶形の短頸壺である。97は長方二段透かしの脚部をもつ高坏である。二方向の透かし部は部分的に穴は貫通している。地元星川窯の製品ではないだろうか。TK209窯併行期と考えられ、3区出土の須恵器では



第44図　出土遺物実測図７



第45図　出土遺物実測図８



第46図　出土遺物実測図９

古い。98・99は無釉高坏である。時期は7世紀後葉から8世紀前葉と推定している。

100～111は土師器である。100・101は須恵器を模倣し口縁部を作り出すタイプの坏である。102は半球形で、口縁部が内彎し、体部外側に指頭痕が残る。103・104は平底の坏である。105はヘラ磨き調整を施した畿内系失塗りの鉢である。106は長い胴部に口縁がくの字に外反する甕である。外面は縦方向の刷毛目調整痕が残る。107～109は高坏である。107は坏部下位に稜をもつ。6世紀後葉から7世紀初頭と考えられる。110は脚付盤で、105などと出土したことから、その時期は8世紀初頭と考えられる。111は器種不明の土器である。置き台のようなものであろうか。

112から125は、瓷器系陶器とよばれる灰釉陶器から山茶碗窯の製品である。112は刷毛塗りで、黒色粒子の吹き出しが多く猿ヶ谷窯の製品と考えられる。113・114は灰釉浸け掛けの碗である。113は浜北窯も含む遠江の灰釉陶器であろう。114の底面には墨痕が残る。115は渥美・湖西窯の碗、116～118は東遠窯の製品である。119は常滑6－a型式の製品である。墨書によるサインもしくは記号が書かれている。

120は低い器高で高台をもつ小皿がふさわしい形態を呈する。東遠窯の製品で、猿ヶ谷窯の白山2号窯期かその直後の時期である。121は東遠窯の小碗である。122は渥美・湖西窯の小皿である。時期については12世紀後葉～13世紀初頭と考えられる。123・124の小皿は、東遠窯の小皿であるが、酸化炎焼成によって表面が橙色を呈している。東遠窯の製品は還元焼成による焼締めを行うのが、特徴であるが、この製品に関する限り異なっている。窯内での製品の置かれた位置などの理由によって、還元焼成による焼締めがうまくできなかったなどが考えられる。125は常滑6－a型式の製品の小皿である。126は常滑9型式の鉢である。

127はロクロカワラケで、時期については15世紀後半～16世紀前半と考えられる。128はロクロ土師器の坏である。10世紀後半を前後する時期と考えられる。129はくの字口縁の内耳土鍋である。

130・131は白磁碗Ⅳ類、132は白磁皿Ⅴ類かⅥ類で、時期は12世紀前半から中頃と考えられる。133は竜泉窯系青磁碗Ⅰ－5類、134は外面体部に蓮弁文、内面見込みに花文様をスタンプで押す。東海地域では13世紀中葉から後葉に位置すると考えられる。

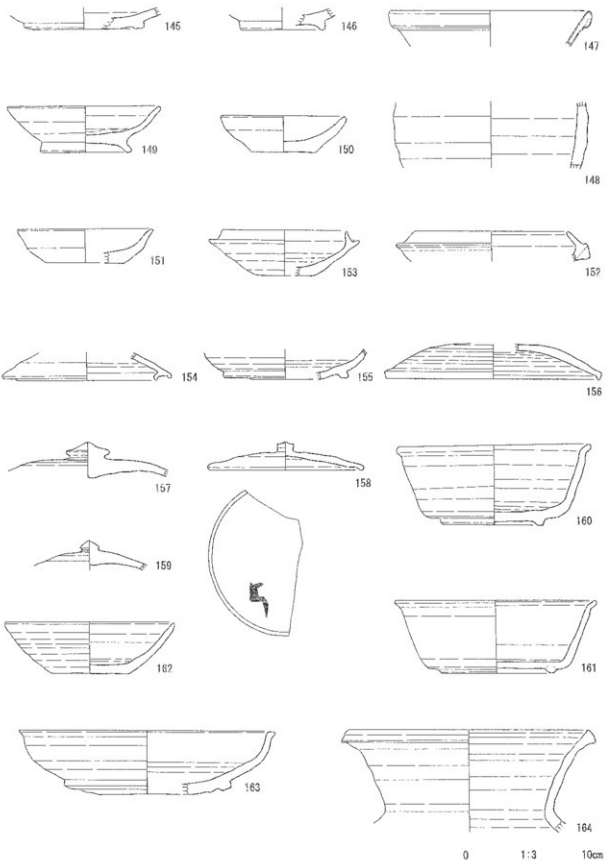
135から141は文字が墨によって書かれた土器である。135は8世紀前半の坏身に「山木」と書かれている。文字も整い、筆の入り方など手慣れている。136～139は盤の底に書かれている。136・137はなんと書かれているかは判明しない。138は「申戸」であるが、甲が右に寄っていることから左に偏があった可能性が高い。すると「申戸」ではなく「神戸」の墨書ではないだろうか。いずれも土器の年代は8世紀後半である。139は薄手平底の須恵器で、糸切り痕が残る。「一」の文字が書かれている。140・141は山茶碗底部に書かれた墨書である。140は12世紀後半から13世紀前半の湖西窯の山茶碗に書かれている。「長」の一字である。141は12世紀後半から13世紀前半の東遠窯の山茶碗に書かれている。「山」であるが、上にもう一字書かれていた可能性がある。

142は土錘である。長さ3.8cm、太さ1.8cmを測る。143は不明土製品である。あるいは土製模造品の一部かもしれない。144は鉄滓の小破片である（写真のみ）。

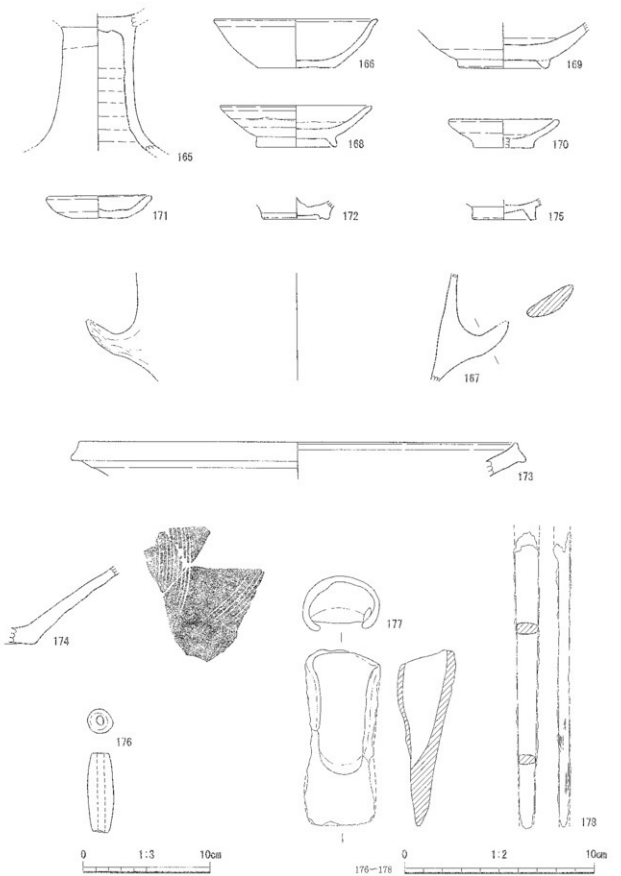
4区の出土遺物

4区は1面と2面を分離して調査を行った。しかしながら出土遺物のうち土器については、時期は前後が逆転して出土することがあったが、調査時の所見をそのまま記述する。

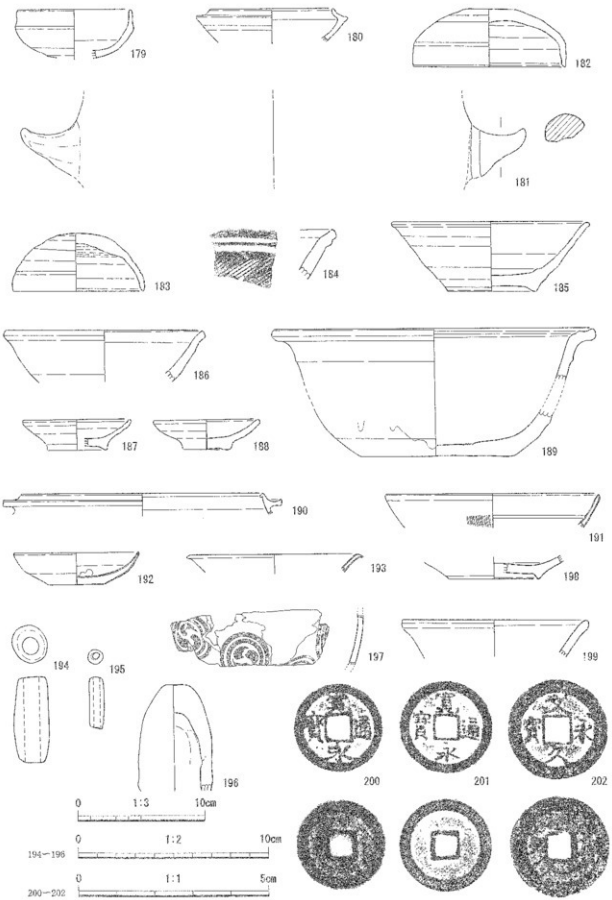
145～148は1面SR01とその上層から出土した。上層の148は18世紀の志戸呂焼で、鉄釉と飴釉を二重掛けした甕類である。145は8世紀前半の須恵器坏身、146は灰釉陶器の小碗、147が白磁碗Ⅳ類であり、他の破片をみると、SR01から出土した土器は13世紀代の山茶碗小片が新しい時期である。149～151はSR02から出土した。149は東遠窯の小皿は白山2号窯期かその直後の時期である。150・151は16世紀代のロクロカワラケである。この時期まで流路は機能していたのであろうか。



第47図　出土遺物実測図10



第48図　出土遺物実測図11



第49図　出土遺物実測図12

152から167は、２面Ｉ－58・59グリッドを中心として出土した土器類である。この区域からは掘立柱建物跡や柵列・小穴など居住域を示す遺構が検出されたが、その年代を示す資料であろう。152・153は坏身で、152はゆがみや粘土が付着したままで、付近の星川窯跡群からそのまま運ばれたと考えられる。いずれも時期は７世紀中葉と考えられる。154は見受けのかえりをもつ蓋である。天井部に自然釉がかかっている。155の坏身は湖西窯の製品である。156・157の坏蓋は湖西窯の製品である。いずれも時期は８世紀初頭と考えられる。158・159は小振りの宝珠状つまみをもつ坏蓋である。時期は８世紀末から９世紀前葉と考えられる。160・161は後藤建一氏分類の碗（後藤建一 1989）に相当する。時期は８世紀末から９世紀前葉と考えられる。162は平底の無蓋坏である。切り離しはヘラ切りである。163は高台をもつ大盤である。164は甕で、頸部は無紋である。８世紀中葉前後であろう。165は脚付盤である。時期は８世紀中・後葉と考えられる。166・167はいずれも土師器である。166は糸切りによる切り離しの平底の無蓋坏である。167は甑であるが、時期は不明である。

168から175は包含層出土の土器である。168は灰釉刷毛塗りの東遠窯の皿である。10世紀前葉から中葉と考えられる。169は東遠窯の山茶碗である。時期は13世紀前葉と考えられる。170は東遠窯の小皿である。時期は13世紀前葉と考えられる。171は渥美・湖西窯の小皿である。時期は13世紀前葉と考えられる。172は灰釉のかけられた古瀬戸製品であるが、器種、時期は不明である。173は常滑の10型式の捏鉢である。時期は15世紀後半とされる。174は古志戸呂焼擂鉢で、時期は15世紀後半である。175は志戸呂焼丸碗で、時期は18世紀である。

176は土錘である。時期は中世以降であるが、詳細は不明である。177は最大長9.25㎝、最大幅3.9㎝、刃部厚さ2.9㎝の有袋鉄斧である。肩部に張り出しのない撫肩タイプで、古瀬清秀氏分類有Ｂ２類に含まれる。古瀬氏によれば、縦斧という（古瀬清秀 1991）が、鍛斧の可能性も考慮すべきであろう。中世まで続く形態から年代を決定できないが、２面Ｉ－59グリッドからの出土であることから、その時期は７世紀後葉から９世紀前葉の可能性が高い。178は棒状鉄製品である。木質が残り、覆われていたことが推定される。何であるかの特定はできないが、鑿の可能性も捨てきれない。時期については、１面出土であることから、中世以降と考えられる。

５区の出土遺物

179はSD04から出土した須恵器坩で、TK217号窯期の一部（飛鳥Ⅱ）併行する時期である。周辺の横穴墓の副葬品にもみられるが、集落跡での出土例は少ない。180の坏身はSD05から出土した。TK217号窯期の一部（飛鳥Ⅱ）併行する時期である。181はSK01から出土した甕で、把手の上方から穴を穿っている。８世紀前半と考えられる。182はSK02から出土した坏蓋である。TK209号窯期に併行する時期で、天井部に陵のある尾張系須恵器の特徴を持っている。183はSK03から出土した坏蓋である。TK217号窯期に併行する時期と考えられる。

184から193は包含層から出土した土器である。184は口縁部に叩きによる文様が施された甕である。外面が灰黒色で、内部は赤灰色の胎土で星川窯の製品と考えられる。185・186は渥美・湖西窯の碗で、13世紀前葉と考えられる。187は東遠窯の高台の付く小碗である。時期は12世紀第３四半期と考えられる。188は渥美・湖西窯の小皿で、12世紀末から13世紀初頭と考えられる。189は折縁深皿で外反する口縁部で見込みに同心円を描く。13世紀後葉から末の古瀬戸前期Ⅳから中期Ⅰに位置づけできよう。断面に漆継ぎがある。190は15世紀中から後葉の羽釜である。

191から193は中国陶磁器である。191は同安窯系碗、192は白磁皿Ⅷ１類で、内面に草花文を描く。193は白磁皿Ⅴ２類である。

194は陶錘であるが、土錘より一回り大きい。時期は８世紀代であろうか。195は細身の管状土製品で、土錘であろうか。196は不明土製品で、器類のミニチュアであろうか。遺物の天地は実測図と写真のよう

に理解したが、あるいは上下は逆かもしれない。とすると衛門坂古窯跡群によく似た例（袋井市教育委員会 1989）がある。

197は漆椀で調査区北試掘穴西側出土と注記があり、おそらくSR01からの出土と考えられる。表裏ともに黒漆を塗り、文様のみ赤漆で描く。文様は二重丸の中に巴文を描いている。

6区の出土遺物

6区はわずかに寛永通宝などの銭貨と山茶碗が出土した。198は常滑5型式の山茶碗片、199は東遠窯の碗として図化した。198は高台脇を端部まで横ナデ調整を施しているところから、椀にない特徴がみられる。天地逆としてあるいは壺である可能性もあるが、破片のため全体を知りえず、明確ではない。

200～202は江戸時代の銭貨である。200と201はいわゆる新寛永であり、202は文久永宝である。集石墓の六道銭もしくは供養銭の一部であろうか。

第5章　まとめ

第1節　遺構と遺物の検討

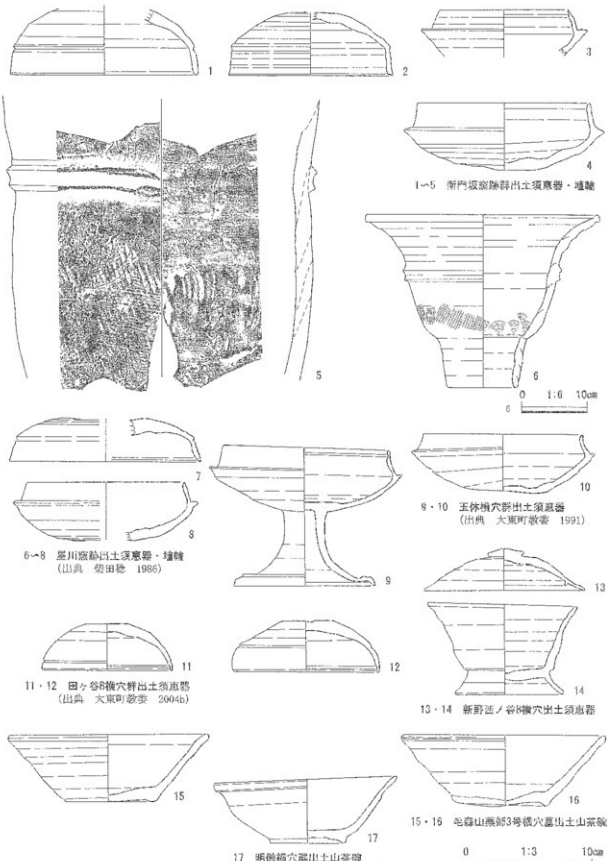
平成20年度からの調査によって検出された遺構と遺物について第2章を中心に報告した。以下、遺構と遺物の両者を結びつけ、1区から6区の七社神社遺跡他（七社神社遺跡、寺部遺跡、三井中世墓群、寺部中世墓群）の歴史的意味を簡単にふれることとする。

1区から6区の中でもっとも古い遺構は、古墳時代前期の1区の竪穴住居跡SH01である。この遺構は小形の竪穴住居1軒のみ単独で存在し、床面の硬化面も認められず、かつ生活什器である土器の出土もきわめて少ない。つまり生活の痕跡が乏しく、日常生活のための住まいと考えられる根拠は少ない。このような例には、以前調査した掛川市藤ノ越遺跡の竪穴住居跡があり、出土した土器から同じ古墳時代前期であった（足立順司 2006）。普段の生活をする集落から離れた丘陵上に、なぜ1軒のみ一時的に営れるための仮りの竪穴住居を造ったのか、その性格は解明できていない。なお祭祀のためのお籠り、あるいは成人のための通過儀礼の仮り小屋（民俗学でいう若者宿など）を思い浮かべたが、これはあくまでも想像の域を出ない。

他方、1区から6区の中でもっとも新しい遺構は1区の三井中世墓群・6区の寺部中世墓群と3区井戸遺構SE01であろう。1区と6区の遺構は、小笠山礫層を基盤とした丘陵上の地上面に河原石を敷き詰めた集石遺構であって、6区寺部中世墓群より出土した鎌倉前期の山茶碗と江戸後期の銭貨から、中世もしくは近世墓と考えた。集石の下部に土坑の有無が不明な三井集石墓1を除くと、土坑を掘削する三井集石墓2、3と土坑をもたない三井集石墓4と寺部中世墓群の集石墓、の2者が認められた。集石に使用された礫は小笠山礫層を構成する基盤層のクサリ礫（クサレ礫ともいう）ではなく、小河川から産出する完新世の礫であることから、下より丘陵に持ち運ばれたと考えられる。下部に土坑を掘削する集石墓は土葬のための墓穴とも考えられるが、遺体を埋葬するには浅い。下部に土坑を掘削しない集石墓は集石の間に火葬骨を浅く埋めたと考えられる。すると両者は土葬墓というよりも火葬墓の可能性が高く、地表施設としての敷石であり、なんらかの木製塔婆などの存在も考慮すべきかもしれない。

なおこの遺構の時期については、本文でふれたように決め手はない。しかしながら6区が長厳庵の寺院墓地に近接していることから、その一角とも理解でき、寺院墓地成立以後とすれば、中世前期というよりも、近世墓と考えることが、より理解を得られるであろう。

3区の井戸遺構は15世紀後葉であるが、調査区にはこの時期の建物跡などは認められず、同じ3区に内耳土鍋と常滑の鉢がみられた以外、4区で古志戸呂の擂鉢片があったのみで出土遺物も極少量である



1～5 新門坂窯跡群出土須恵器・埴輪

6～8 星川窯跡出土須恵器・埴輪
(出典 柴田稔 1986)

9・10 玉休横穴群出土須恵器
(出典 大東町教委 1991)

11・12 田ヶ谷8横穴群出土須恵器
(出典 大東町教委 2004b)

13・14 新野西ノ谷8横穴出土須恵器

15・16 毛森山藤郎3号横穴墓出土山茶碗

17 明僧横穴群出土山茶碗
(出典 大東町教委 1995)

第50図 尾張系須恵器と山茶碗

ため、15世紀代には調査区外が集落の中心と考えられる。

では七社神社遺跡他の中心時期はいつであろうか。3区からは6世紀後半から末の土師器高坏が、SP02から1点みられ、ついで、7世紀前葉の土器は包含層の須恵器や土師器を含めてもは少ない。それ以前は、1区竪穴住居跡の時期から6世紀後半から末まで、調査範囲の中では、人々の活動の痕は認められない。3区・4区・5区で安定的に遺構・遺物が認められる時期は、7世紀中頃以後である。その後の展開については、5区では山茶碗の時期まで、人々の活動の痕はきわめて薄い。奈良時代にはいると、3区・4区では遺構・遺物の発見がピークをむかえるが、その時期は8世紀中葉から8世紀末・9世紀初頭である。

この時期、3区・4区では掘立柱建物跡がそれぞれ1棟検出されている。3区で出土した須恵器の中には墨痕があって硯に転用された例が数点、その他に墨痕があるもの、墨書があるものが出土している。墨書のある土器は12世紀から13世紀の山茶碗にもみられるが、8世紀代の墨書土器が多い。当時、この地域は『倭名類聚鈔』段階の土方郷の一部、もしくはその近隣と考えられるが、墨書土器や転用された硯の存在から、この付近に郷長のような漢字を解し、使いこなす人々の存在を想定することも許されよう。

また3区の土器集中の中には、甕を割って地表に置いた例や当時の仏具に多い浄瓶を置いた例があるが、いずれも8世紀中葉から8世紀末・9世紀初頭の時期である。何らかの行事が行われたと解すことができよう。しかしその後は、3区と4区では10世紀の灰釉陶器の碗、ロクロ土師器などが少数みられるなど、人々の活動の痕はきわめて薄く、この集落域の移動や人口の減少も想定される。

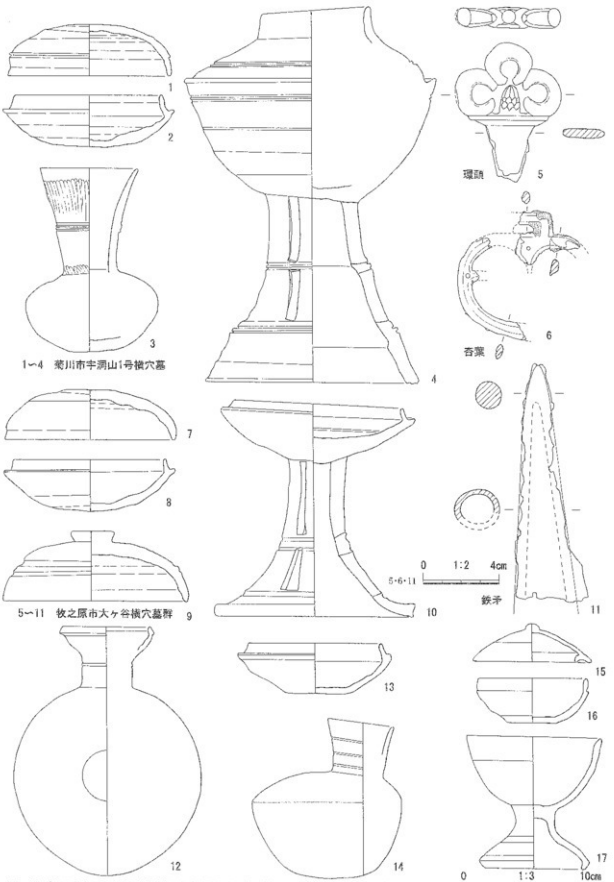
ではつぎに出土遺物が顕著にみられる12世紀段階には、遺跡はどのようであろうか。3区のSR02出土の13世紀前葉の遺物の中に、ロクロカワラケが認められる。この時期カワラケは、儀式用の器であって一般集落ではあまり出土せず、社寺や居館跡などから出土することが多い。すると、この時期、SR02周辺にそのような勢力の存在も注意すべきかもしれない。そのほか3区・4区・5区の出土遺物には、12世紀中葉から13世紀中葉までの山茶碗・小碗・小皿とともに、中国製陶磁器の白磁・青磁も出土している。この点数は山茶碗に対し、遠江の集落遺跡では多いので、カワラケ同様に周辺に地域の有力者の存在を考慮すべきかもしれない。15世紀後葉をのぞいて、その後はほとんど遺構と遺物は認められず、居住域からはずれ、水田などの耕地となったと考えられる。

第2節　尾張系須恵器と山茶碗の搬入

七社神社遺跡の東側には5世紀後葉から末に築造された五塚山古墳がある。すでに指摘があるように、この古墳出土の有蓋付四連坏と台付三連壺については、尾張の須恵器窯で焼造された須恵器であった。このことから古墳の築造された5世紀後葉から末には、この地域の小首長と須恵器を介し交易があったとみることができる。

七社神社遺跡から出土した7世紀代の須恵器の中に、近接する星川窯跡群で焼造された製品が少なからず含まれていた。この星川窯跡群は、TK10号窯式、TK43号窯式、TK209号窯式に併行する6世紀中頃から7世紀前葉の須恵器と須恵質埴輪を焼造していた（柴田稔 1986）。それ以前、同じ小笠山丘陵には衛門坂窯跡群が存在したが、この窯跡群は星川窯跡群より先行しMT15号窯式併行期から始まり、TK10号窯式と続き、TK43号窯式の早い頃に生産が終了した。以前、この窯跡群の須恵器と須恵質埴輪から尾張系陶工の関与を推定したが（足立順司 1983）、その後、この窯跡で焼造された須恵質埴輪の特長を分析した鈴木敏則氏の指摘によって、尾張系埴輪に位置づけられている（鈴木敏則 2001）。

七社神社遺跡と同じ頃、周辺では横穴墓で構成される群集墳が盛んに築造されていた。この中で、旧



1～4　菊川市宇洞山1号横穴墓

5～11　牧之原市大ヶ谷横穴墓群　9

12～17　掛川市十二社神社横穴墓群出土土器（出典　掛川西高郷土研究部作図資料による）

第51図　東遠江横穴墓の出土遺物

大東町佐東地区の玉体第３号横穴墓はTK10号窯式～TK43号窯式の有蓋高坏が副葬されていたが（大東町教育委員会 1991）、これは尾張系須恵器の特徴をもっていた。同じく旧大東町駿三地区の毛森山横穴墓群の一角にある田ヶ谷B1号横穴墓からは（大東町教育委員会 2004b）、尾張系須恵器の坏蓋が認められた。これはTK217号窯式に併行する時期の製品と考えられる。古代の城飼郡新野郷にあたる新野西ノ谷B1号横穴墓と第４号横穴墓から高台のつく坏身に扁平なつまみをもつ坏蓋のセットが出土したが（町史編さん委員会 2006）、これも７世紀後葉～末の尾張系須恵器と考えられる。

この状況をみると、旧城飼郡南部には少数例ながら６世紀後葉から８世紀初頭まで、尾張からの須恵器が搬入されていたことが知りえる。他方、須恵器と須恵質埴輪の焼造に当たっては、尾張系陶工に移住と一定期間の定住という背景がある。このような移住と定住が重なり合って、須恵器の搬入が行われたと考えてみたい。『続日本紀』宝亀二（771）年三月の上には、私物をもって窮民を救った人物に城飼郡主帳玉造部広公と檜前舎人部諧国がいたが、この功により二人は爵を賜った。主帳という職務は郡四等官のうち最下級にあたり、律令の規定では郡主帳二人は上郡の定数にあたる（和田英松 1902）。このことから８世紀の城飼郡は12郷からなっていたと考えられる（原秀三郎 1994）。

なお檜前舎人部（ひのくまのとねりべ）とは宣化天皇の親衛隊である舎人にちなむ。『新撰姓氏録』では神別　火明命の子孫とされ、尾張連と同祖一族とされている。このことから城飼郡における檜前舎人部の存在は、６世紀から７世紀における尾張との交易や陶工集団の移住と結びつけて考えることができるかもしれない。

『先代旧事本紀』では物部氏の祖先饒速日（ニギハヤヒ）命は、尾張連の祖先である火明命と同一神とする。すると天神族（天津神の子孫）の物部氏は、『新撰姓氏録』の天孫族である尾張連より分かれた檜前舎人という記述とは相容れないこととなってしまう。檜前舎人を物部氏を出自とする説は、遠江における久努や遠淡海など旧国造が物部系氏族と伝わっている点、『旧事本紀』が物部氏を意視している点から、その領域の氏族は、何らかのかたちで物部系氏族の影響を受けていたとみるべきかもしれない。

つぎに尾張から入っている山茶碗についてふれてみたい。七社神社遺跡３区では常滑編年６－a型式の碗と小皿が、６区では５型式の碗が出土した。遠江の中世遺跡では、12世紀段階で常滑窯の壺・甕類が認められることは多いが、碗・皿類の供膳具の報告に接することは少ない。ところが下平河八幡神社西遺跡、下平河八幡神社谷遺跡出土中世土器を分析した溝口彰啓氏によると（溝口彰啓他 2009）、常滑３型式の碗がみられ、常滑５型式あたりからその出土量が飛躍的に増加し、６－a型式の碗・皿類とあわせると同じ時期の碗・皿類の過半数を占めるという。

近隣の毛森山横穴墓群薬師３号横穴墓から、常滑編年６－a型式の碗が出土している。この資料も含め、だいぶ以前に実測した遺物実測図を提供し、2004年に発掘調査報告書が刊行されたが、報告書では常滑窯の碗であることの記述はもれている（大東町教育委員会 2004b）。同じく旧大東町の明曽横穴墓群西支群３号横穴墓からは、常滑編年５型式の碗が出土している（大東町教育委員会 1995）。以上の例から七社神社遺跡周辺は尾張系山茶碗が一定量搬入され、消費された地域であることを確認できた。

第３節　城飼郡の古代氏族

七社神社遺跡では７世紀後半から８世紀代が１つのピークの時期であった。ここではその基盤となる背景を知るために、つぎの文献資料や木簡によって確認できる城飼郡の古代氏族についてふれ、あわせて考古学に知りえるこの地域の後期古墳の実態と比較・検討してみたい。

大山守皇子、是土方君・榛原君、凡二族之始祖也…「日本書紀」　応神天皇二年の条

以下、小治田朝廷（推古朝）城飼評督以後、城飼郡司となる。「土方家系図」（静岡県 1989）

城飼郡朝夷郷戸主大湯坐部子根麻呂…「東南院文書」宝亀元（770）年の条

城飼郡主帳玉造部広公、檜前舎人部諸国…「続日本紀」宝亀二（771）年の条

狭束郷戸主文委マ（文部カ）麻口…「御殿・二宮遺跡木簡」

このうち土方氏の分流には「土方家系図」にみえる日置君、檜原君が認められるが、いずれも『倭名類聚鈔』の城飼郡比木（日置里）と檜原郡檜原里に居を構えていたとされる。「土方氏系図」については、いわゆる「郡評論争」で問題となった「評」の記載があり、原秀三郎氏によって「評から郡へと土方一族がどのようにかかわってきたかを知ることができるはなはだ興味深い史料」とされた（原秀三郎 1994）。この土方君は８世紀においても郡司四等官や軍団軍毅に任官し、位階としては一般官人の内位ではなく地方豪族の外位を得ているが、郡に上って大舎人、外正六位上まで昇った人物も輩出している。なお柿本人麿の歌で知られる「土方娘子」は土方氏出身の采女とも考えられている。このように土方氏は城飼郡ではもっとも有力な氏族と考えられる。

ところで城飼郡主帳玉造部広公、檜前舎人部諸国の記事から、城飼郡にもこのような有力氏族がいたことがわかる。これらの氏姓は伴部と名代・子代部に由来する。ほかに戸主についても大湯坐部、文部氏姓が認められるので、城飼郡ではいろいろな氏姓をもつ人々から成り立っていたと推定される。

他方、城飼郡域の後期古墳の多くは横穴墓群が大半を占めるが、築造時期は６世紀から７世紀代である。それはちょうど土方君が城飼評督に任じられていた頃とそれ以前にあたる。現状での東遠江の横穴墓の出現時期はMT15窯式併行の６世紀前葉であるが、城飼郡域ではTK10号窯式併行の６世紀中葉と考えられる（静岡県考古学会 2001）。この地域では出現期の横穴墓はまれで、菊川市宇洞山１号横穴墓のようなTK43号窯式併行期も少なく、大半がTK209号窯式（新）併行からTK217窯式併行期である。東遠江の横穴墓の特徴は平面や断面の形態に現れ、城飼郡域ではほぼドーム形の横穴墓で占められる。それとは別の分布を異する尖頭形プランの横穴墓は、原野谷川中流域から太田川中流域に分布して対象的である。このような明瞭な違いが、どのような規制や要因によって成り立っているかは不明であるが、地方が国造制—評制への移行期にみられる様相であることを指摘しておく。

城飼郡域の後期群集墳に論点を展したい。横穴墓の分布状況は菊川上流域に山本、大渕ヶ谷、篠ヶ谷など100基前後の大型群集墳の形成がみられるほか、その支流にあたる旧菊川町杉森、平尾周辺に30基の群集墳が認められる。この規模の群集墳は旧菊川町、旧小笠町、大東町にいくつか認められる。菊川流域以外の旧浜岡町域では新野、比木など『倭名類聚鈔』郷の比定地に10基以下の規模で広く分布する。城飼郡の西南域にあたる旧大須賀町には愛宕山、十二社神社横穴墓群が分布するが、いずれも５基前後の１単位群が認められる。その時期はいずれもTK217窯式併行期である。おそらく城飼郡の墓制を採用したとみれるこの横穴墓の存在から、現在の掛川市大須賀付近が、城飼郡（評）の境界であったことを反映しているのであろうか。

先の城飼郡における氏姓の分布をみると、異なる氏姓であってもほぼ共通の横穴墓という墓制を導入していることが判明する。ところが一部の地域にごく少数ながら、単独で存在する横穴式石室の古墳が認められる。この例外というべき例については、別に何らかの要因が働いたと考えている。

城飼郡域の群集墳の分布をみると、すでに『倭名類聚鈔』の郷比定地にくまなく分布していたことが判明する。律令制下の城飼郡は古代遠江の郡域としては、決して広くない範囲に11郷、８世紀段階では２人の主帳の存在から12郷から成ると推定される。すでに群集墳の段階から、上郡（15～12郷）となる要素が成立していたと評価したい。

ところで郡域を異にする榛原郡域には旧相良町内と旧榛原町内に横穴墓群が認められるが、横穴式石室の群集墳と併存している。周辺の群集墳が横穴式石室からなる旧榛原町内の大ヶ谷横穴墓群は、横穴墓中心地帯の城飼郡域から移住した榛原君（土方君の分流）一族の墓所に比定できるかも知れない。

引用・参考文献

和田英松　1902 『官職要解』(1983　講談社学術文庫を使用)
西郷藤八　1930 「遠江大坂村の古墳」『考古学雑誌20巻－10』
足立順司　1983 「古墳時代の袋井市域」『袋井市史通史編』
柴田　稔　1986 『小笠郡大東町畠川窯跡調査の概要』
大東町教育委員会　1989『糸操道跡』
後藤建一　1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』
静岡県　1989 『静岡県史 資料編４』
袋井市教育委員会　1989 『衛門坂古窯跡』
古瀬清秀　1991 「農工具」『古墳時代の研究８』
大東町教育委員会　1991 『玉体横穴群』
原秀三郎　1994 「古代の静岡」『静岡県史 通史編１』
大東町教育委員会　1995 『明僧横穴群』
鈴木敏則　2001 「第３節 埴輪」『静岡県の前方後円墳 総考編』
静岡県考古学会　2001 『東海の横穴墓』
大東町教育委員会　2002 『兼帯横穴群・兼帯遺跡・帝釈山砦』
大東町教育委員会　2004a 『五塚山古墳』
大東町教育委員会　2004b 『毛森山横穴群』
大須賀町釜ヶ谷土地整理組合　2004 『釜ヶ谷古窯跡群』
足立順司　2006 『蔭ノ越遺跡』
町史編さん委員会　2006 『浜岡町史 資料編 考古』
溝口彰啓他　2009 「まとめ」『菊川市下平川の墓跡群』

補注

第50・51図の出典については足立作図以外、守屋雅史氏（現 大阪市立美術館）、上記引用文献などによるが、守屋氏には大ヶ谷横穴墓群出土品について実測図公開の快諾をいただき、厚く御礼申し上げる。掛川市十二社神社横穴墓群出土須恵器については、県立掛川西高校郷土研究部（栗田賢二氏作図）資料による。掛川市教育委員会木佐森達弘氏によると、これらの資料は現存していないという。

出土遺物観察表

表1　土器

挿図	図版	区	遺構 層位	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	高台径	色調	産地
38-1		1	SH01	土師器	壺か甕		(9.30)			灰白	
38-2		1	SH01	土師器	壺	(19.60)	(3.50)			にぶい橙	
38-3		2	SR01	須恵器	坏身	(11.60)	(3.80)			灰黄	湖西
38-4		2	SR01	須恵器	坏身		(1.20)		(9.20)	灰白	湖西
38-5		2	SR01	須恵器	広口壺		(7.00)	6.20		灰白	
38-6		2	SR01	須恵器	甕		(13.50)			灰白	湖西
38-7		2	SR01	須恵器	壺		(8.60)			灰白	湖西
38-8	25-8	2		土師器	小型丸底壺		(3.65)	2.40		にぶい黄橙	
38-9		2		土師器	壺か甕		(1.80)	7.30		橙	
38-10	25-10	2	SR01	灰釉陶器	碗	(15.90)	4.70		(6.70)	灰	東遠
38-11		2	SR01	灰釉陶器	碗		(2.70)		(8.20)	灰黄	東遠
38-12		2	SR01	灰釉陶器	碗		(2.00)		(9.60)	灰白	
38-13		2	SR01	山茶碗	碗		(1.60)		5.80	灰黄褐	湖西
38-14	25-14	2	SR01	陶器	碗	9.50	6.00		4.70	素地：灰白 釉：明オリーブ・黒褐	瀬戸美濃
38-15		2	SR01	陶器	擂鉢		(3.50)	(9.00)		素地：明褐灰 錆釉：にぶい橙	志戸呂
38-16		2		灰釉陶器	碗		(2.40)		6.20	灰白	東遠
38-17		2		山茶碗	碗		(2.00)		7.10	灰白	東遠
38-18		2		山茶碗	碗		(2.25)		6.40	灰黄	東遠
38-19	25-19	2		山茶碗	小碗	8.70	2.70		4.90	灰白	東遠
38-20		2		灰釉陶器	甕	(25.10)	(6.90)			灰	東遠
38-21		2		青磁	小碗	(9.65)	(2.30)			断面：灰黄褐 釉：灰オリーブ	
38-22		2		陶器	擂鉢	(17.10)	(3.30)			素地：灰白 鉄釉：黒褐	瀬戸美濃
39-24	30-24	3	SE01	陶器	天目茶碗	(12.40)	(5.10)			素地：明褐灰 鉄釉：灰褐	志戸呂
39-28		3	SR01	須恵器	坏	(13.40)	4.20	(8.90)		橙	
39-29		3	SR01	山茶碗	碗		(1.20)		(6.20)	灰白	東遠
39-30	30-30	3	SR01	山茶碗	瓶		(5.20)		(8.10)	灰白	
39-31	30-31	3	SR01	青磁	碗	(13.10)	(4.00)			素地：灰白 釉：灰オリーブ	
39-32		3	SR02	須恵器	坏身		(1.20)		(10.00)	灰白	湖西
39-33		3	SR02	瓷器 (灰釉陶器)	碗		(2.40)		7.10	灰白	東遠
39-34	30-34	3	SR02	山茶碗	碗		(2.10)		(8.10)	黄灰	
39-35		3	SR02	須恵器	長頸瓶	(10.20)	(4.80)			灰白	
39-36		3	SR02	瓷器系	短頸壺	(8.00)	(3.60)			素地：灰白 内・外面：オリーブ黒	渥美湖西
40-37	25-37	3	SR02	土師器	カワラケ	(7.80)	2.35	5.00		淡橙	
40-38	25-38	3	SR02	土師器	カワラケ	7.50	2.15	4.60		浅黄橙	
40-39	25-39	3	SR02	山茶碗	小皿	6.90	1.60	4.50		橙	東遠
40-40	25-40	3	SR04	土師器	碗	11.80	3.90	5.60		灰白	
40-41	26-41	3	SR04	土師器	カワラケ	(7.30)	1.75	4.40		にぶい橙	
40-42		3	SR04	須恵器	短頸壺		(14.40)	9.30		灰白	渥美湖西
40-43		3	SR05	山茶碗	碗		(2.60)		7.40	灰白	湖西
40-44		3	土器集中1	土師器	坏	(12.80)	(4.00)			浅黄橙	
40-45		3	土器集中1	土師器	高坏		(11.70)	(10.00)		にぶい黄橙	
40-46		3	土器集中2	須恵器	坏蓋	(12.40)	(2.00)			灰白	
40-47	26-47	3	土器集中2	灰釉陶器	甕	20.00	34.30	8.00		灰白	

挿図	図版	区	遺構層位	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	高台径	色調	産地
40-48	26-48	3	土器集中2	須恵器	浄瓶	(4.55)	25.30		7.20	灰白	
40-49		3	土器集中2	土師器	坏か皿		(1.60)		(6.40)	浅黄橙	
41-50		3	土器集中2	土師器	高坏		(6.80)	(10.00)		淡橙	
41-51	26-51	3	土器集中3	須恵器	甕	(22.30)	(31.40)			灰	
41-52	26-52	3	土器集中4	須恵器	坏	(15.90)	5.20	(11.30)		灰白	
41-53		3	土器集中4	灰釉陶器	碗	(14.30)	4.40		7.00	灰白	渥美か猿投
41-54		3	土器集中4	須恵器	長頸瓶	9.00	(7.30)			灰白	
41-55	26-55	3	SD02	須恵器	皿	(16.10)	2.80			灰白	湖西
41-56		3	SD02	須恵器	皿	(15.80)	2.20			灰	
41-57	26-57	3	SD02	須恵器	皿	(16.20)	(2.20)			黄灰	
41-58		3	SD02	須恵器	皿	(15.70)	(2.30)			灰白	
41-59	26-59	3	SD02	須恵器	皿	15.40	2.50	8.30		黄灰	
42-60	26-60	3	SD02	須恵器	坏身	(11.80)	3.35	7.00		灰白	
42-61		3	SD02	土師器	坏	(11.40)	(3.20)			灰白	
42-62		3	SD02	土師器	坏	(13.60)	3.10			にぶい橙	
42-63		3	SD02	黒色土器	坏	(10.20)	3.10			灰	
42-64		3	SD02	土師器	甕	(20.90)	(8.70)			明褐灰	遠江
42-65		3	SD02	土師器	甕	(20.60)	(7.80)			にぶい橙	遠江
42-66		3	SD02	土師器	甕	(15.80)	(3.10)			にぶい黄橙	遠江
42-67		3	SD02	土師器	高坏か脚付盤		(10.70)			淡赤橙	
42-68	27-68	3	SK02	土師器	坏	(10.40)	4.70			にぶい黄橙	
42-69		3	SK03	須恵器	坏蓋	(10.60)	2.60			灰白	
42-70	27-70	3	SK03	土師器	坏	11.90	4.30	5.60		にぶい橙	
42-71	27-71	3	SK05	須恵器	坏身	(13.80)	4.15		(10.10)	灰白	
42-72		3	SK05	須恵器	坏蓋	(14.20)	(1.60)			灰白	
42-73		3	SK05	土師器	坏	(11.80)	3.60			橙	
42-74		3	SK05	土師器	坏		(3.10)			橙	
43-75	27-75	3	SP02	土師器	高坏	(18.00)	15.30	(13.20)		浅黄橙	
43-76	27-76	3	包含層	須恵器	坏蓋	(11.20)	3.90			青灰	湖西遠江
43-77	27-77	3	包含層	須恵器	坏身	(8.60)	3.60	4.20		灰	湖西遠江
43-78		3	包含層	須恵器	坏身	(10.20)	(2.70)			灰	湖西遠江
43-79		3	包含層	須恵器	坏身	(11.00)	(3.60)			灰	湖西遠江
43-80		3	包含層	須恵器	坏身	(11.00)	(3.20)			青灰	
43-81		3	包含層	須恵器	坏蓋		(3.00)			灰	湖西遠江
43-82		3	包含層	須恵器	坏蓋		(2.90)			灰白	湖西遠江
43-83		3	包含層	須恵器	坏蓋	(19.80)	(3.00)			灰白	湖西遠江
43-84		3	包含層	須恵器	坏蓋	(13.90)	(1.30)			灰白	湖西遠江
43-85		3	包含層	須恵器	坏身		(1.40)		(10.20)	灰白	湖西遠江
43-86	27-86	3	包含層	須恵器	坏	(12.60)	3.55	(8.00)		灰白	
43-87	27-87	3	包含層	須恵器	碗	(11.10)	3.50		5.90	灰白	
43-88		3	包含層	須恵器	坏身か鉢	(21.40)	4.10		(14.00)	明青灰	
43-89		3	包含層	須恵器	台付皿	15.50	2.25		8.40	灰白	
43-90	27-90	3	包含層	須恵器	台付皿	15.20	2.30		8.20	灰白	
43-91		3	包含層	須恵器	皿	(16.20)	2.20	(6.20)		灰	
44-92		3	包含層	須恵器	皿	(15.90)	(2.00)			灰白	
44-93		3	包含層	須恵器	長頸壺	(11.30)	(9.70)			灰白	
44-94		3	包含層	須恵器	甕	(15.30)	(4.10)			灰	
44-95		3	包含層	須恵器	甕	(19.40)	(3.90)			明緑灰	
44-96		3	包含層	須恵器	瓶類		(3.90)			灰白	

挿図	図版	区	遺構層位	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	高台径	色調	産地
44-97		3	包含層	須恵器	高坏		(5.10)			灰	黒川
44-98		3	包含層	須恵器	高坏		(7.20)			灰白	
44-99		3	包含層	須恵器	高坏		(9.30)	(9.20)		灰白	
44-100		3		土師器	坏	(11.50)	(4.00)			橙黄褐	
44-101		3		土師器	坏	(12.60)	(3.80)			浅黄橙	
44-102	27-102	3		土師器	坏	12.20	4.70			橙	
44-103		3	包含層	土師器	坏	(14.40)	3.35			にぶい橙	
44-104		3	包含層	土師器	坏	(13.05)	2.65	3.80		にぶい黄橙	
44-105		3		土師器	盤	(18.20)	(4.60)			にぶい橙	
44-106		3		土師器	甕	14.80	(5.80)			明褐灰	
44-107		3		土師器	高坏	17.70	(4.10)			外面：橙　内面：浅黄橙	
45-108		3		土師器	高坏		(6.10)			橙	
45-109		3		土師器	高坏		(6.90)	9.70		浅橙	
45-110		3		土師器	脚付盤		(4.93)			浅黄橙	
45-111		3	包含層	土師器	不明		(2.70)	(16.00)		にぶい橙	
45-112	27-112	3	包含層	灰釉陶器	碗	(13.40)	4.20		6.10	灰白	猪ヶ谷
45-113	29-113	3	包含層	灰釉陶器	碗	(12.20)	4.35		7.00	灰白	遠江
45-114		3	包含層	灰釉陶器	碗		(2.40)		(5.60)	灰白	
45-115		3	包含層	山茶碗	碗	(14.40)	(4.75)		6.80	灰白	渥美窯西
45-116		3	包含層	山茶碗	碗	(15.30)	(4.20)			灰	東濃
45-117		3	包含層	山茶碗	碗		(3.50)		(6.60)	褐灰	東濃
45-118		3	包含層	山茶碗	碗	(14.00)	(4.30)			灰白	東濃
45-119	30-119	3	包含層	山茶碗	碗	(15.60)	5.30		(6.30)	灰白	常滑
45-120	28-120	3	包含層	山茶碗	小皿	(9.40)	2.50		(4.95)	黄灰	東濃
45-121		3	包含層	山茶碗	小碗		(1.50)		4.90	灰	東濃
45-122	28-122	3	包含層	山茶碗	小皿	(8.00)	2.40	3.80		灰白	渥美湖西
45-123	28-123	3	包含層	山茶碗	小皿	(7.60)	2.15	(5.30)		にぶい橙	東濃
45-124	28-124	3	包含層	山茶碗	小皿	(7.20)	1.70	4.20		にぶい橙	東濃
45-125	28-125	3	包含層	山茶碗	小皿	7.90	1.80	5.20		灰白	常滑
45-126		3	包含層	陶器	鉢	(33.80)	(3.80)			にぶい黄褐	常滑
45-127	28-127	3	包含層	土師器	カワラケ	(6.90)	1.95			灰白	
46-128	28-128	3	包含層	土師器	坏	(11.45)	4.10	6.50		橙	
46-129		3		土師器	内耳土鍋	(26.00)	(6.10)			にぶい橙	
46-130		3	包含層	白磁	碗	(15.10)	(5.20)			灰白	
46-131		3	包含層	白磁	碗		(1.90)		5.00	灰白	
46-132		3	包含層	白磁	皿	(15.90)	(2.20)			明オリーブ灰	
46-133	30-133	3	包含層	青磁	碗	(16.70)	(3.20)			灰白	竜泉
46-134		3		青磁	碗		(3.80)		(5.60)	灰白	
46-135	30-135	3		須恵器	坏身		(1.40)		(10.20)	灰	
46-136		3		須恵器	盤		(0.70)	(8.00)		灰	
46-137	30-137	3		須恵器	盤		(0.90)			灰	
46-138	30-138	3		須恵器	不明		(0.80)			黄灰	
46-139		3		須恵器	不明		(0.55)			灰白	
45-140	30-140	3		山茶碗	鉢		(2.90)		(6.76)	灰白	湖西
46-141		3		山茶碗	鉢		(2.40)		(7.60)	灰白	東濃
47-145		4	SR01	須恵器	坏身		(1.70)		(9.50)	灰	
47-146		4	SR01	灰釉陶器	小瓶		(1.70)		(6.80)	灰	
47-147		4	SR01	白磁	碗	(15.80)	(2.80)			灰白	

挿図	図版	区	遺構層位	種別	器種	計測値(cm) 口径	器高	底径	高台径	色調	産地
47-148		4	SR01	陶器	瓶		(5.20)			露胎：灰 釉：黒	志戸呂
47-149	28-149	4	SR02	灰釉陶器	小皿	(12.60)	3.60		7.10	灰	東濃
47-150	28-150	4	SR02	土師器	カワラケ	(9.60)	2.85	5.10		浅黄橙	
47-151	28-151	4	SR02	土師器	カワラケ	(10.60)	2.65	(5.30)		にぶい橙	
47-152		4	包含層	須恵器	坏身	(12.00)	(2.40)			灰	星川
47-153		4	包含層	須恵器	坏身	(9.80)	4.50			青灰	星川
47-154		4	包含層	須恵器	坏蓋	(11.00)	(2.20)			灰白	
47-155		4	包含層	須恵器	坏身		(2.40)		(10.00)	灰白	猪西
47-156	28-156	4	包含層	須恵器	坏蓋	16.80	(2.80)			灰	湖西
47-157		4	包含層	須恵器	坏蓋		(2.80)			灰白	湖西
47-158	30-158	4	包含層	須恵器	坏蓋	(12.00)	2.30			灰白	
47-159		4	包含層	須恵器	坏蓋		(2.30)			灰白	
47-160	28-160	4	包含層	須恵器	碗	15.05	5.20		8.20	灰	
47-161		4	包含層	須恵器	碗	(15.70)	5.70		(9.10)	灰	
47-162	29-162	4	包含層	須恵器	坏	(13.30)	4.00	(6.40)		灰	
47-163	29-163	4	包含層	須恵器	大盤	(19.80)	5.00		(13.10)	灰白	
47-164		4	包含層	須恵器	甕	(18.80)	(8.00)			灰白	
48-165		4	包含層	須恵器	脚付盤		(10.80)			灰	
48-166		4	包含層	土師器	坏	(12.70)	3.85	(6.00)		浅黄橙	
48-167		4	包含層	土師器	甑		(8.50)			橙	
48-168	29-168	4	包含層	灰釉陶器	皿	(11.80)	3.30		6.40	灰白	東濃
48-169		4	包含層	山茶碗	碗		(3.65)		(5.20)	灰	東濃
48-170	29-170	4	包含層	山茶碗	小皿	(8.40)	2.20	(4.80)		灰	東濃
48-171	29-171	4	包含層	山茶碗	小皿	8.20	1.75	4.90		灰白	渥美湖西
48-172		4	包含層	古瀬戸	不明		(1.70)		(5.30)	灰白	古瀬戸
48-173		4	包含層	陶器	擂鉢	(34.40)	(2.30)			にぶい橙	常滑
48-174		4	包含層	陶器	擂鉢		(6.20)			浅黄橙	古志戸呂
48-175		4	包含層	陶器	丸碗		(1.65)		5.00	露胎：黄灰 釉：暗褐	志戸呂
49-179		5	SD04	須恵器	坏	(8.80)	(4.80)			灰	
49-180		5	SD05	須恵器	坏身	(9.66)	(2.60)			灰白	
49-181		5	SK01	土師器	甑		(6.00)			浅黄橙	
49-182	29-182	5	SK02	須恵器	坏蓋	(12.00)	4.60	(4.00)		灰	尾張
49-183	29-183	5	SK05	須恵器	坏蓋	(10.20)	4.60			灰	
49-184		5	包含層	須恵器	甕		(3.90)			緑灰	星川
49-185	29-185	5	包含層	山茶碗	碗	(15.50)	5.50		(7.20)	灰白	渥美湖西
49-186		5	包含層	山茶碗	碗	(14.00)	(3.50)			灰白	渥美湖西
49-187		5	包含層	山茶碗	小碗	(8.40)	2.40		(4.80)	灰	東濃
49-188	29-188	5	包含層	山茶碗	小皿	8.30	2.30	3.80		灰白	渥美湖西
49-189		5	包含層	古瀬戸	折縁深皿	(25.20)	(10.00)	(12.10)		灰白	古瀬戸
49-190		5	包含層	土師器	羽釜	(19.00)	(1.70)			灰黄褐	
49-191	30-191	5	包含層	青磁	碗	(16.75)	(2.70)			灰白	
49-192	30-192	5	包含層	白磁	皿	(9.80)	2.50	(4.40)		灰白	
49-193	30-193	5	包含層	白磁	皿	(13.10)	(1.50)			灰白	
49-198		6	包含層	山茶碗	碗		(1.80)		(7.25)	にぶい黄	常滑
49-199		6	包含層	山茶碗	碗	(14.65)	(3.00)			浅黄	東濃

表2　土製品

挿図	図版	区	遺構層位	種別	遺物名	計測値（cm）				色調
						最大長	最大幅	孔径	器高	
46-142	30-142	3	包含層	土製品	土錘	3.80	1.80	0.50		灰白
46-143	30-143	3	包含層	土製品	不明	3.15	2.40			灰白
48-176	30-176	4	包含層	土製品	土錘	4.20	1.35	0.55		黄灰
49-194	30-194	5	包含層	須恵器	陶錘	4.50	1.80	0.80		灰白
49-195	30-195	5	包含層	土製品	土錘	2.70	0.75	0.35		にぶい橙
49-196	30-196	5	包含層	土製品	不明	(5.60)	(3.90)		(5.60)	浅黄橙

表3　石製品・金属製品

挿図	図版	区	遺構層位	種別	遺物名	計測値（cm）				色調
						最大長	最大幅	孔径	器高	
39-23	30-23	2	包含層	石製品	不明	6.20	2.60	1.10	0.60	灰黄色
	29-144	3	包含層	金属製品	鉄滓	3.80	3.10	1.30		
48-177	30-177	4	包含層	金属製品	鉄斧	9.25	3.90	2.90		
48-178		4	包含層	金属製品	棒状鉄製品	15.60	1.30	0.90		
49-200	30-200	6		金属製品	寛永通宝（新）	径2.35		0.09	0.55	
49-201	30-201	6		金属製品	寛永通宝（新）	径2.45		0.11	0.55	
49-202	30-202	6	包含層	金属製品	文久永宝	径2.65		0.10	0.65	

表4　木製品

挿図	図版	区	遺構層位	種別	遺物名	計測値（cm）			樹種	木取
						最大長（縦）	最大幅（横）	最大厚		
39-25	25-25	3	SE01	木製品	曲物底板	19.00	18.80	1.10	スギ	柾目 左側部分が板目
39-26	25-26	3	SE01	木製品	曲物底板	17.40	3.60	0.60	針葉樹	柾目
39-27	25-27	3	SE01	木製品	漆椀	6.20	3.70	0.80		横木取り 板目
49-197	29-197	5	包含層	木製品	漆椀	4.50	12.50	0.45		横木取り 板目

1　掛川市大坂周辺遠景（空中写真）

2　調査区遠景（空中写真）

図版2

1　七社神社遺跡他遠景（南より）

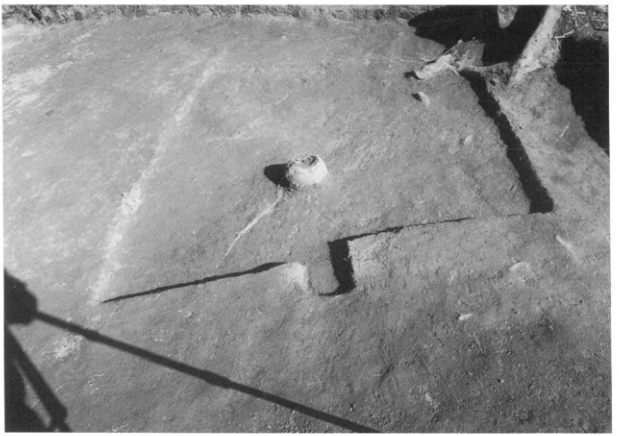
2　3区遠景（西より）

1　1区三井中世墓群全景

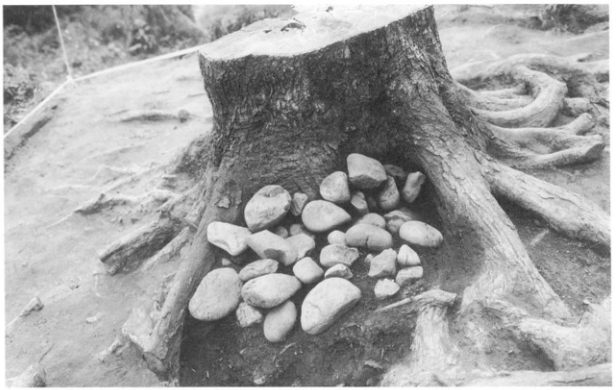
2　1区三井中世墓群・SH01全景

図版4

1　1区集石墓群全景

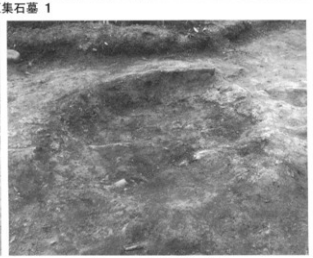


2　1区SH01全景



1　1区集石墓 1

2　1区集石墓 2



3　1区集石墓 2 土坑

4　1区集石墓 3

5　1区集石墓 4

図版6

1　2区全景（空中写真）

2　2区全景（空中写真）

1　2区全景（南より）

図版8

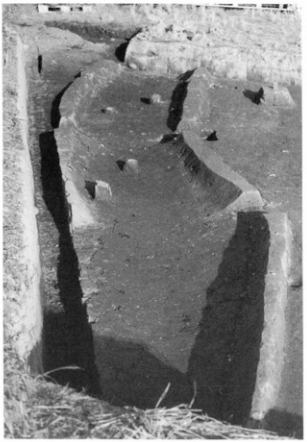
1　2区南側土器出土状況

2　2区土層堆積状況
（南より）

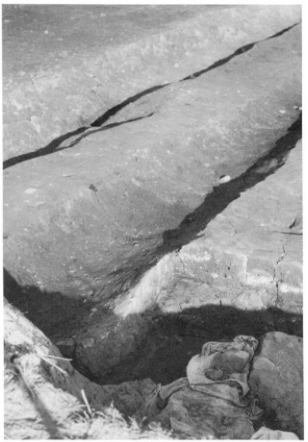
3　2区北壁（南より）

1　3区全景（北より）

図版10



1　3区SR02

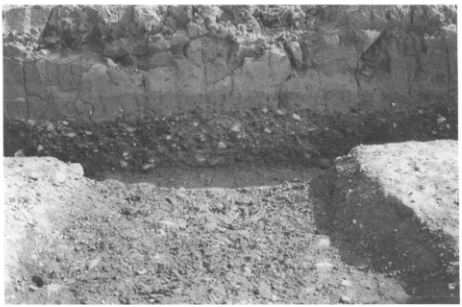


2　3区SR03

3　3区SR04

4　3区北東隅土器出土状況

1　3区SR06（西より）



2　3区SR06
覆土堆積状況

3　3区SE01・SP01

図版12

1　土器集中箇所 1

2　土器集中箇所 2

3　土器集中箇所 2 近景

1　3区2面SB01遠景

2　3区2面SB01

3　3区2面SD02

図版14

1　3区2面柱穴 2

2　3区2面SB01柱穴 5

3　3区2面SB01柱穴 7

4　3区2面SB01柱穴 9

5　3区2面SB01柱穴 10

1　4区1面全景（南より）

図版16

1　4区1面SR02
（西より）

2　4区1面土層堆積状況

3　4区2面北側全景
（北より）

1　4区2面全景（北より）

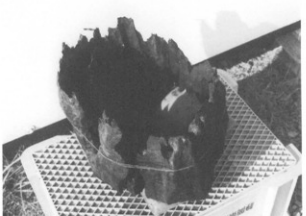
図版18

1　4区2面SB01

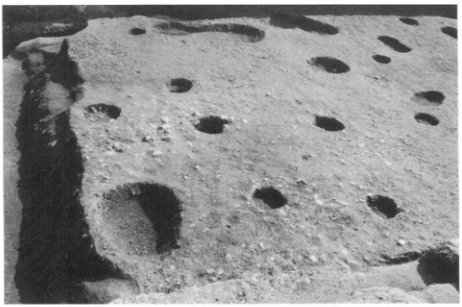
2　4区2面SB01柱痕出土状況

3　4区2面SB01柱穴礎石

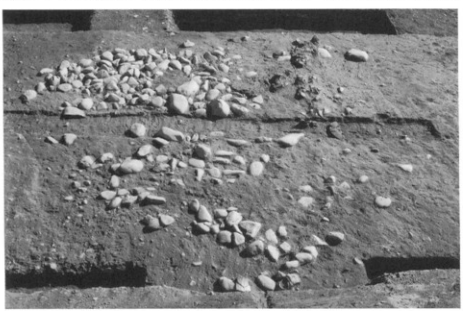
4　4区2面SP29柱根出土状況



5　4区2面SP29柱根



1　4区2面柵列



2　4区2面遺物
出土状況 1

3　4区2面遺物
出土状況 2

図版20

1　5区全景（北より）

1　5区SK01・SD01・SD02

2　5区SK03

3　5区漆椀出土状況

1　6区寺部中世墓群全景（北より）

1　6区全景（西より）

2　6区集石墓 1

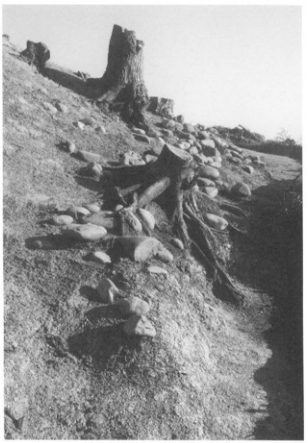
3　6区集石墓 2

4　6区集石墓 3

5　6区集石墓 4

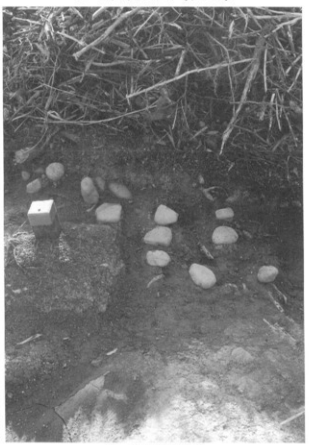
図版24

1　6区集石墓 5（南より）



2　6区集石墓 5（北より）

3　6区集石墓 6



4　6区集石墓 7

8

37

10

38

14

39

19

40

25

26

27

出土遺物 1 土器ほか

図版26

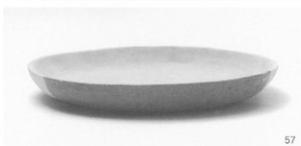
41

51

47

55

48


57

59

52

60

出土遺物 2 土器

68

77

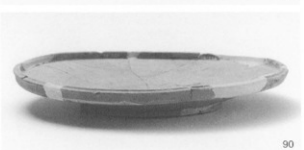
70

86

71

87

75


90

102

76

112

図版28

113

127

120

128

122

149

123

150

124

151

125

156

出土遺物 4 土器

160

182

162

183

163

185

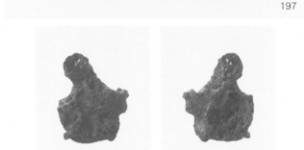
168

188

170

197

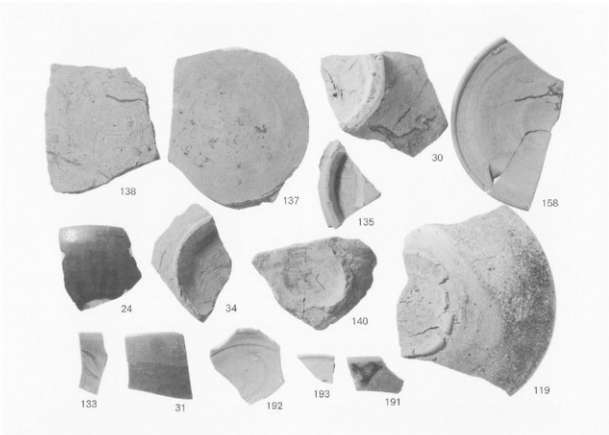
171

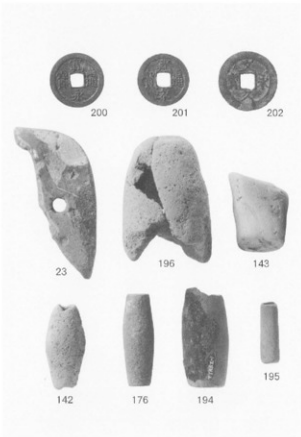

144表

144裏

出土遺物 5 土器ほか

図版30





出土遺物 6 土器ほか

報告書抄録

ふりがな	しちしゃじんじゃいせきほか
書名	七社神社遺跡他
副書名	平成20～22年度農道整備（一般・樹園地）高天神２期地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第237集
編著者名	足立順司
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－3002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　TEL 054－262－4261（代表）
発行年月日	2011年３月16日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
三井中世墓群	静岡県掛川市大坂			34° 41′ 15″	145° 50′	2008929～2010319	1,433	農道整備（平成20～21年度高天神２期地区）に伴う事前調査
七社神社遺跡				34° 40′ 59″	138° 21′ 03″			
寺部遺跡				34° 40′ 54″	138° 02′ 04″			
寺部中世墓群				34° 40′ 52″	138° 02′ 05″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三井中世墓群	墓	古墳時代前期 中・近世	竪穴住居跡　掘石墓４	土師器（古墳前期）	
七社神社遺跡	集落	古墳時代～中世	掘立柱建物跡　溝　流路　井戸　小穴	須恵器・土師器（古墳・奈良・平安）陶磁器（中世）晶質土器（奈良）鉄斧（奈良）鉄滓　漆器（中世）	
寺部遺跡	集落	古墳時代 奈良時代 中世	溝　土坑　流路	須恵器・土師器（古墳・奈良）陶磁器（中世）土製品　漆器（中世）	
寺部中世墓群	墓	中世・近世	集石墓７	銭貨（近世）陶器（中世）	

要約	三井・寺部中世墓群・七社神社遺跡・寺部遺跡は掛川南部の大坂にある。 三井・寺部中世墓群は小笠山丘陵頂部に位置し、中世～近世の集石墓であった。 七社神社遺跡と寺部遺跡は、古墳時代後期から平安初期と中世前期に盛行する集落であった。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第237集

七社神社遺跡他

平成20～22年度農道整備（一般・樹園連）高天神２期地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年３月16日　発行

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261㈹
FAX　054－262－4266
印刷所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055－921－1839㈹